



ネットアップの要素 **12.0**

『Element Plug-in for vCenter Server 4.4 User Guide』を参照してください

2020年4月 | 215-14895_2020-04_ja-jp
ng-gpso-jp-documents@netapp.com

目次

本書の内容.....	7
vCenter Plug-inの概要.....	8
開始前の準備.....	9
VMware vSphereの前提条件.....	9
ネットワーク ポート要件.....	9
NetApp Element Plug-in for vCenter Serverのインストール.....	13
管理ノードのインストール.....	13
vCenterへのvCenter Plug-inの登録.....	19
インストールまたはアップグレード後のプラグインへのアクセス.....	25
プラグインのアップグレード.....	26
Flash ベースから HTML5 ベースの vSphere Web Client への切り替え.....	26
NetApp Element Plug-in for vCenter Serverの使用方法.....	27
NetApp Element Configuration拡張ポイント.....	27
NetApp Element Management拡張ポイント.....	28
vCenterリンク モード.....	30
複数クラスタを管理する場合のオブジェクト名のベストプラクティス.....	31
クラスタ設定.....	32
クラスタの追加.....	32
クラスタの詳細の表示.....	33
クラスタの詳細.....	33
個々のクラスタの詳細.....	33
クラスタ プロファイルの編集.....	34
クラスタ プロファイルの削除.....	35
Virtual Volumesの有効化.....	35
保存データの暗号化の有効化.....	36
保存データの暗号化の無効化.....	36
SSHの有効化.....	36
SSHの無効化.....	37
SSHタイム リミットの変更.....	37
保護ドメインの監視設定.....	37
クラスタのシャットダウン.....	38
NetApp HCIの拡張.....	39

QoSIOC の設定.....	40
QoSIOC の設定.....	40
QoSIOC 設定の編集.....	41
QoSIOC 設定のクリア.....	42
QoSSIOCサービスのパスワードの変更.....	42
QoSSIOCイベントの表示.....	45
QoSSIOCイベントの詳細.....	45
プラグインの製品情報.....	47
レポート作成.....	48
レポート概要.....	48
イベントログの表示.....	50
イベントログ.....	50
イベントタイプ.....	50
アラート.....	52
アラートエラー コード.....	53
iSCSIセッション.....	65
実行中のタスク.....	66
ボリュームのパフォーマンス.....	66
管理.....	68
データストア管理.....	68
データストアの作成.....	68
データストアリストの表示.....	71
データストアの拡張.....	72
データストアのクローニング.....	73
データストアの共有.....	76
VAAI UNMAPの実行.....	77
データストアの削除.....	78
QoSSIOC自動化.....	78
QoSSIOC自動化の有効化.....	80
QoSSIOC統合の無効化.....	81
ボリュームの管理.....	81
ボリュームの作成.....	81
ボリュームの詳細の表示.....	83
ボリュームの編集.....	87
ボリュームのクローニング.....	88
ボリュームのバックアップとリストアの処理.....	90
ボリュームの削除.....	96
ボリュームのページ.....	97
削除したボリュームのリストア.....	98
アクセス グループへのボリュームの追加.....	98
アクセス グループからのボリュームの削除.....	99
複数のボリュームへのQoSポリシーの適用.....	99
ボリュームのQoSポリシーの関連付けの変更.....	100

ユーザ アカウントの管理.....	100
アカウントの作成.....	100
アカウントの詳細.....	101
アカウントの編集.....	101
アカウントの削除.....	102
ボリューム アクセス グループ.....	103
アクセス グループの作成.....	103
ボリューム アクセス グループの詳細.....	103
アクセス グループの編集.....	104
アクセス グループの削除.....	104
イニシエータ.....	105
イニシエータの作成.....	105
イニシエータの詳細.....	106
イニシエータの編集.....	106
イニシエータの削除.....	106
ボリューム アクセス グループへのイニシエータの追加.....	106
QoSポリシー.....	107
QoSポリシーの作成.....	107
QoSポリシーの詳細.....	108
QoSポリシーの編集.....	108
QoSポリシーの削除.....	109
データ保護.....	110
ボリュームSnapshot.....	110
ボリュームSnapshotの作成.....	110
ボリュームSnapshotの詳細.....	111
Snapshotの編集.....	112
Snapshotからのボリュームのクローニング.....	113
Snapshotへのボリュームのロールバック.....	114
ボリュームSnapshotのバックアップ処理.....	114
Snapshotの削除.....	117
グループSnapshot.....	117
グループSnapshotの作成.....	118
グループSnapshotの詳細.....	119
グループSnapshotの編集.....	119
グループSnapshotからのボリュームのクローニング.....	120
グループSnapshotへのボリュームのロールバック.....	120
グループSnapshotの削除.....	121
Snapshotスケジュール.....	121
Snapshotスケジュールの作成.....	122
Snapshotスケジュールの詳細.....	122
Snapshotスケジュールの編集.....	123
Snapshotスケジュールのコピー.....	124
Snapshotスケジュールの削除.....	124
リアルタイムのリモート レプリケーションのためのクラスタとボリュームのペアリング設定.....	125
クラスタのペアリング.....	126
ボリュームのペアリング.....	129
ボリューム レプリケーションの検証.....	138
レプリケーション後のボリューム関係の削除.....	138
ボリューム関係の管理.....	138

クラスタ管理.....	144
ドライブ.....	144
クラスタへの使用可能ドライブの追加.....	144
ドライブの詳細.....	145
ドライブの削除.....	146
ノード.....	146
NetApp HCIストレージ ノード.....	146
NetApp HCIコンピューティング ノード.....	146
SolidFireストレージ ノード.....	146
SolidFire Fibre Channelノード.....	147
クラスタへのノードの追加.....	147
ノードの詳細.....	148
クラスタからのノードの削除.....	149
クラスタ ノードの再起動.....	150
クラスタ ノードのシャットダウン.....	150
VLANの管理.....	151
VLANの作成.....	151
仮想ネットワークの詳細.....	153
仮想ネットワークの編集.....	153
仮想ネットワークの削除.....	153
仮想ボリューム.....	155
vSphere Virtual Volumes (VVol) 機能の設定.....	155
ネットアップ Element VASA Providerの登録.....	156
VVolデータストアの作成.....	157
仮想ボリュームの詳細の表示.....	158
仮想ボリュームの詳細.....	158
個々の仮想ボリュームの詳細.....	159
ストレージ コンテナ.....	162
ストレージ コンテナの作成.....	163
ストレージ コンテナの詳細の表示.....	164
ストレージ コンテナの削除.....	166
プロトコル エンドポイント.....	167
プロトコル エンドポイントの詳細の表示.....	167
vCenter Plug-inの登録解除.....	170
vCenter Plug-inの削除.....	172
トラブルシューティング.....	174
プラグインの登録は成功するがWeb Clientにアイコンが表示されない.....	174
登録画面からプラグインを登録中にエラーが発生する.....	175
登録画面からプラグインを更新中にエラーが発生する.....	175
ネットアップの拡張機能をアップグレードできないというエラー メッセージが表示される.....	175
プラグインの削除は完了するがアイコンが残る.....	176
管理者パスワードの変更後にプラグインを登録解除または削除できない.....	176
プラグインの管理タスクが失敗するか、またはESXiホストからボリュームにアクセスできない.....	177

Firefox 59.0.2ブラウザでvCenter Plug-inを使用するとエラーが発生する.....	177
データストアの削除処理が失敗する.....	177
ペアリングキーを使用してクラスタペアを接続できない.....	177
QoSIOCステータスに関するエラーメッセージ.....	178
QoSIOCサービスが使用可能と表示されるが使用できない.....	178
データストアでQoSIOCが有効になっているが使用できない.....	178
製品マニュアルとその他の情報の参照先.....	180
ネットアップサポートへの問い合わせ.....	181
著作権に関する情報.....	182
商標に関する情報.....	183
マニュアルの更新について.....	184

本書の内容

このガイドでは、NetApp Element Plug-in for vCenter Serverを使用してストレージクラスタを設定し、管理する方法について説明します。このガイドは、ストレージソリューションの導入、管理、トラブルシューティングの担当者、および仮想マシン（VM）のストレージを割り当てる必要があるVMware管理者の方を対象としています。また、その他のITプロフェッショナルやソフトウェア開発者の方にも役立ちます。

vCenter Plug-inの概要

NetApp Element Plug-in for vCenter Server (VCP) はWebベースのツールで、VMware vSphere Web Clientユーザ インターフェイス (UI) に統合されます。VMware vSphereの拡張機能として動作する使いやすく拡張性に優れたインターフェイスで、NetApp Elementソフトウェアを実行しているストレージ クラスタを管理および監視できます。

プラグインのユーザ インターフェイスを使用して、クラスタの検出と設定、ストレージの管理と監視が可能なほか、クラスタ容量からストレージを割り当ててデータストアや仮想データストア (仮想ボリュームの場合) を構成できます。クラスタはネットワーク上では1つの論理グループとして認識され、仮想IPアドレスによってホストと管理者に示されます。また、クラスタのアクティビティを監視して、各種処理の実行中に発生したイベントのエラー メッセージやアラート メッセージなど、リアルタイムで通知を受け取ることができます。

開始前の準備

ネットアップElementのvCenter Server（VCP）用NetApp ElementプラグインをvCenterに直接インストールし、vSphere Web Clientを使用してプラグインにアクセスできます。インストールが完了したら、Storage I/O Controlに基づくサービス品質（QoSIOC）サービスおよびvCenter Plug-inのその他のサービスを利用できます。

VMware vSphereの前提条件

ネットアップElementvCenter Server用のNetApp Elementプラグインを使用するには、vSphere 6.5または6.7（ソフトウェアiSCSIアダプタとiSCSIネットワーキングが構成されたvCenterおよびESXiを含む）が必要です。

プラグインを使用する前に、次のvSphereの機能とベストプラクティスを考慮する必要があります。

- このプラグインは、HTML5 vSphere Web Clientバージョン6.7 U2とは互換性がありません。
- このプラグインは、Flash / Flex用のバージョン6.7 U2 vSphere Web Clientと、FlashクライアントとHTML5クライアント用のvSphere 6.7 U3リリースをサポートしています。
- vCenter High Availability（VCHA）はサポートされません。
- データストアの作成には選択したESXiホストでサポートされる最も高いVMFSバージョンが使用されるので、VMFSの互換性に関する問題を防ぐために、実行するvSphereおよびESXiのバージョンをすべてのクラスタメンバーで統一する必要があります。
- vSphere HTML5 Web ClientとFlash Web Clientには、統合できない個別のデータベースがあります。一方のクライアントに追加したクラスタは、もう一方のクライアントで認識されません。両方のクライアントを使用する場合は、両方にクラスタを追加してください。

ネットワークポート要件

システムをリモートから管理し、クライアントがデータセンターの外部からリソースに接続できるようにするために、データセンターのエッジファイアウォールで次のTCPポートを許可する必要があります。システムの使用方法によっては、一部のポートは不要な場合もあります。

特に記載がないかぎり、ポートはすべてTCPで、ネットアップサポートサーバ、管理ノード、およびストレージノードの間の双方向通信を許可する必要があります。

ヒント：管理ノード、ストレージノード、およびクラスタのMVIPの間でICMPを有効にします。

注：vSphereのネットワークポートの要件については、VMwareのドキュメントを参照してください。

この表では次の略語を使用します。

- MIP：管理IPアドレス
- SIP：ストレージIPアドレス
- MVIP：管理仮想IPアドレス
- SVIP：ストレージ仮想IPアドレス

ソース	デスティネーション	ポート	説明
iSCSIクライアント	ストレージ クラスタの MVIP	443	(オプション) UIおよびAPIアクセス
iSCSIクライアント	ストレージ クラスタのSVIP	3260	クライアントiSCSI通信
iSCSIクライアント	ストレージ ノードのSIP	3260	クライアントiSCSI通信
管理ノード	sfsupport.solidfire.com	22	サポート アクセス用リバースSSH トンネル
管理ノード	ストレージ ノードのMIP	22	サポート用SSHアクセス
管理ノード	DNSサーバ	53 TCP / UDP	DNSルックアップ
管理ノード	ストレージ ノードのMIP	442	ストレージノードおよびElementソフトウェアのアップグレードへの UI / APIアクセス
管理ノード	オンラインのソフトウェアリポジトリ： <ul style="list-style-type: none">• https://repo.netapp.com/bintray/api/package• https://netapp-downloads.bintray.com	443	管理ノード サービスのアップグレード
管理ノード	monitoring.solidfire.com	443	Active IQに報告するストレージ クラスタ
管理ノード	ストレージ クラスタの MVIP	443	ストレージノードおよびElementソフトウェアのアップグレードへの UI / APIアクセス
管理ノード	connect.pub.nks.cloud	443	NKSクラウド プロバイダとホスト型NKSサービスの間のセキュアな通信。たとえば、オンプレミスの NetApp HCIまたはVMwareにNKSが導入されている場合、トラフィックはこのNorthbound MTLSセキュアチャネルを使用します。
管理ノード	api.nks.netapp.io	443	オンプレミスの「リージョン」導入時の初期登録
管理ノード	repo.netapp.com	443	オンプレミス環境のインストール/更新に必要なコンポーネントへのアクセス

ソース	デスティネーション	ポート	説明
34.208.181.140 34.217.162.31 54.187.65.159 18.236.231.155	管理ノード	443	HTTPS (Kubernetesクラスタセキュリティ)
		6443	Kubernetes API (Kubernetesクラスタセキュリティ)
		12443	ダッシュボードへのプロキシ (Kubernetesクラスタセキュリティ)
		22	Kubernetesのアップグレードおよびその他のタスク (Kubernetesクラスタセキュリティ)
管理ノード	amazonaws.com	443	ディスパッチトンネル
SNMPサーバ	ストレージクラスタのMVIP	161 UDP	SNMPポーリング
SNMPサーバ	ストレージノードのMIP	161 UDP	SNMPポーリング
ストレージノードのMIP	DNSサーバ	53 TCP / UDP	DNSルックアップ
ストレージノードのMIP	管理ノード	80	Elementソフトウェアのアップグレード
ストレージノードのMIP	S3 / Swiftエンドポイント	80	(オプション) バックアップとリカバリ用のS3 / SwiftエンドポイントへのHTTP通信
ストレージノードのMIP	NTPサーバ	123 UDP	NTP
ストレージノードのMIP	管理ノード	162 UDP	(オプション) SNMPトラップ
ストレージノードのMIP	SNMPサーバ	162 UDP	(オプション) SNMPトラップ
ストレージノードのMIP	LDAPサーバ	389 TCP / UDP	(オプション) LDAP検索
ストレージノードのMIP	リモートストレージクラスタのMVIP	443	リモートレプリケーションのクラスタペアリング通信
ストレージノードのMIP	リモートストレージノードのMIP	443	リモートレプリケーションのクラスタペアリング通信
ストレージノードのMIP	S3 / Swiftエンドポイント	443	(オプション) バックアップとリカバリ用のS3 / SwiftエンドポイントへのHTTPS通信
ストレージノードのMIP	管理ノード	10514 TCP / UDP 514 TCP / UDP	syslog転送
ストレージノードのMIP	syslogサーバ	10514 TCP / UDP 514 TCP / UDP	syslog転送

ソース	デスティネーション	ポート	説明
ストレージノードのMIP	LDAPSサーバ	636 TCP / UDP	LDAPSルックアップ
ストレージノードのMIP	リモートストレージノードのMIP	2181	リモートレプリケーション用のクラスタ間通信
ストレージノードのSIP	S3 / Swiftエンドポイント	80	(オプション) バックアップとリカバリ用のS3 / SwiftエンドポイントへのHTTP通信
ストレージノードのSIP	S3 / Swiftエンドポイント	443	(オプション) バックアップとリカバリ用のS3 / SwiftエンドポイントへのHTTPS通信
ストレージノードのSIP	リモートストレージノードのSIP	2181	リモートレプリケーション用のクラスタ間通信
ストレージノードのSIP	ストレージノードのSIP	3260	ノード間iSCSI
ストレージノードのSIP	リモートストレージノードのSIP	4000～4020	リモートレプリケーションのノード間のデータ転送
ストレージノードのSIP	コンピューティングノードのSIP	442	コンピューティングノードAPI、設定と検証、ソフトウェアインベントリへのアクセス
システム管理者のPC	ストレージノードのMIP	80	(NetApp HCIのみ) NetApp Deployment Engineのランディングページ
システム管理者のPC	管理ノード	442	管理ノードへのHTTPS UIアクセス
システム管理者のPC	ストレージノードのMIP	442	ストレージノードへのHTTPS UIおよびAPIアクセス
			(NetApp HCIのみ) NetApp Deployment Engineでの設定および導入監視
システム管理者のPC	管理ノード	443	管理ノードへのHTTPS UIおよびAPIアクセス
システム管理者のPC	ストレージクラスタのMVIP	443	ストレージクラスタへのHTTPS UIおよびAPIアクセス
システム管理者のPC	ストレージノードのMIP	443	HTTPSによるストレージクラスタの作成、ストレージクラスタへの導入後のUIアクセス
vCenter Server	ストレージクラスタのMVIP	443	vCenter Plug-inのAPIアクセス
vCenter Server	管理ノード	8443	(オプション) vCenter Plug-inのQoSIOCサービス。
vCenter Server	ストレージクラスタのMVIP	8444	vCenter VASAプロバイダアクセス (VVVolのみ)

ソース	デスティネーション	ポート	説明
vCenter Server	管理ノード	9443	vCenter Plug-inの登録。登録完了後はポートを閉じてもかまいません。

NetApp Element Plug-in for vCenter Serverのインストール

新規インストールの場合は、新しい管理ノードを導入してネットアップ Element Plug-in for vCenter ServerをvCenter Serverに登録することで、このプラグインを手動でインストールできます。

手順

1. *vSphere Web Client*を使用して、ネットアップ HCIまたはNetApp Elementソフトウェアのインストール用OVAをダウンロードし、導入します。
2. プラグインをvCenterに登録します。
3. プラグインにアクセスし、インストールが正常に完了したことを確認します。
4. プラグインを使用してストレージ クラスタを追加します。
5. プラグインを使用して管理ノードおよびQoSIOCを設定します。

管理ノードのインストール

NetApp Elementソフトウェアを実行しているクラスタの管理ノードは、構成に応じたイメージを使用して手動でインストールできます。この手動プロセスは、管理ノードのインストールにNetApp Deployment Engineを使用していないSolidFireオールフラッシュストレージ管理者およびNetApp HCI管理者を対象としています。

開始する前に

- クラスタでNetApp Elementソフトウェア11.3以降を実行している必要があります。
- インストール環境でIPv4を使用している必要があります。管理ノード11.3ではIPv6がサポートされません。

注 : IPv6のサポートが必要な場合は、管理ノード11.1を使用してください。

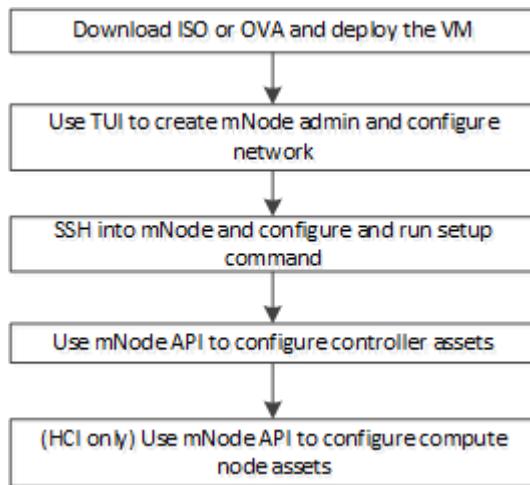
- ネットアップ サポート サイトからソフトウェアをダウンロードする権限が必要です。
- 使用するプラットフォームに適した管理ノードイメージの種類を特定しておきます。
次の表を参考にしてください。

プラットフォーム	インストールイメージの種類
Microsoft Hyper-V	.iso
KVM	.iso
VMware vSphere	.iso, .ova
Citrix XenServer	.iso
OpenStack	.iso

タスク概要

この手順を実行する前に、永続ボリュームについて理解し、永続ボリュームを使用するかどうかを決定しておく必要があります。永続ボリュームを使用すると、管理ノードのデータを指定したストレージ クラスタに格納できるため、管理ノードが失われた場合や削除された場合でもデータを保持することができます。

次の図に、この手順の概要を示します。



手順

1. ネットアップサポートサイトから、インストール環境に対応したOVAまたはISOをダウンロードします。
 - Elementソフトウェア :
 - NetApp HCI :
 1. ダウンロードするソフトウェアのバージョン番号を選択します。
 2. Goをクリックします。
 3. 表示されるプロンプトをそれぞれクリックして確認し、EULAに同意し、ダウンロードする管理ノードのイメージを選択します。
2. OVAをダウンロードした場合は、次の手順を実行します。
 1. OVAを導入します。
 2. ストレージクラスタが管理ノード（eth0）とは別のサブネット上にあり、同一ボリュームを使用する場合は、ストレージサブネット（eth1など）上のVMに2つ目のネットワークインターフェイスコントローラ（NIC）を追加するか、管理ネットワークがストレージネットワークにルーティングできることを確認します。
3. ISOをダウンロードした場合は、次の手順を実行します。
 1. 以下の構成でハイパーバイザーから新しい64ビットの仮想マシンを作成します。
 - 仮想CPU×6
 - 12GB RAM
 - 400GBの仮想ディスク、シンプロビジョニング
 - インターネットアクセスとストレージMVIPへのアクセスが可能な仮想ネットワークインターフェイス×1
 - (SolidFireオールフラッシュストレージの場合はオプション) ストレージクラスタへの管理ネットワークアクセスが可能な仮想ネットワークインターフェイス×1。ストレージクラスタが管理ノード（eth0）とは別のサブネット上にある環境で永続ボリュームを使用する場合は、ストレージサブネット（eth1）上のVMに2つ目のネットワークインターフェイスコントローラ（NIC）を追加するか、管理ネットワークからストレージネットワークへルーティング可能なことを確認します。



注意 : このあとの手順で指示があるまでは
仮想マシンの電源をオンにしないでください。

2. 仮想マシンにISOを接続し、.isoインストールイメージでブートします。
- 注：イメージを使用して管理ノードをインストールすると、スプラッシュ画面が表示されるまでに30秒程度かかることがあります。
4. インストールが完了したら、管理ノードの仮想マシンの電源をオンにします。
5. ターミナルユーザインターフェイス (TUI) を使用して、管理ノードの管理ユーザを作成します。

ヒント：メニューオプション間を移動するには、上矢印キーまたは下矢印キーを押します。ボタン間を移動するにTabは、を押します。ボタンからフィールドTabに移動するには、を押します。フィールド間を移動するには、上矢印キーまたは下矢印キーを押します。

6. 管理ノードネットワーク (eth0) を設定します。
- 注：ストレージトラフィックを分離するために追加のNICが必要な場合は、別のNICの設定手順を参照してください。

[ストレージ NICの設定](#) (18ページ)

7. 管理ノードにSSH接続します。
8. SSHを使用して次のコマンドを実行し、root権限を取得します。プロンプトが表示されたら、パスワードを入力します。

```
sudo su
```

9. 管理ノードとストレージクラスタの間で時刻が同期されている (NTP) ことを確認します。

注：vSphere で**Synchronize guest time with host**は、VMオプションのボックスをオンにする必要があります。今後VMを変更する場合はこのオプションを無効にしないでください。

10. 管理ノードのセットアップコマンドを設定します。

注：セキュアプロンプトでパスワードを入力するように求められます。クラスタがプロキシサーバの背後にいる場合、パブリックネットワークに接続できるようにプロキシを設定する必要があります。

```
/sf/packages/mnode/setup-mnode --mnode_admin_user [username] --storage_mvip [mvip] --storage_username [username] --telemetry_active [true]
```

1. 次の各必須パラメータについて、[]内の値（かっこを含む）を置き換えます。

注：()内はコマンドの省略名で、正式な名前の代わりに使用できます。

--mnode_admin_user (-mu) [username]

管理ノードの管理者アカウントのユーザ名。一般には、管理ノードへのログインに使用したユーザアカウントのユーザ名です。

--storage_mvip (-sm) [MVIP address]

Elementソフトウェアを実行しているストレージクラスタのMVIP（管理仮想IPアドレス）。

--storage_username (-su) [username]

--storage_mvipパラメータで指定したクラスタのストレージクラスタ管理者のユーザ名。

--telemetry_active (-t) [true]

trueのままにして、Active IQによる分析のためのデータ収集を有効にします。

2. (オプション)：アクティブな IQ エンドポイントパラメータをコマンドに追加します。

--remote_host (-rh) [AIQ_endpoint]

Active IQのテレメトリデータが処理される送信先エンドポイント。このパラメータを指定しない場合、デフォルトのエンドポイントが使用されます。

3. (オプション)：永続ボリュームに関する以下のパラメータを追加します。



注意：永続ボリューム機能用に作成されたアカウントとボリュームを変更または削除しないでください。変更または削除すると、管理機能が失われます。

--use_persistent_volumes (-pv) [true/false, default: false]

永続ボリュームを有効または無効にします。永続ボリューム機能を有効にするには、trueを入力します。

--persistent_volumes_account (-pva) [account_name]

--use_persistent_volumesをtrueに設定した場合、永続ボリュームに使用するストレージアカウント名をこのパラメータに入力します。

注：永続ボリュームには、クラスタ上の既存のアカウント名とは異なる一意のアカウント名を使用してください。永続ボリュームのアカウントを他の環境から切り離すことが非常に重要です。

--persistent_volumes_mvip (-pvm) [mvip]

永続ボリュームを使用する、Elementソフトウェアを実行しているストレージクラスタのMVIP（管理仮想IPアドレス）を入力します。このパラメータは、管理ノードで複数のストレージクラスタが管理されている場合にのみ必須です。複数のクラスタを管理していない場合は、デフォルトのクラスタMVIPが使用されます。

4. プロキシサーバを設定します。

--use_proxy (-up) [true/false, default: false]

プロキシの使用を有効または無効にします。プロキシサーバを設定する場合、このパラメータは必須です。

--proxy_hostname_or_ip (-pi) [host]

プロキシのホスト名またはIP。プロキシを使用する場合には必須です。このパラメータを指定すると、--proxy_portの入力を求められます。

--proxy_username (-pu) [username]

プロキシユーザ名。このパラメータは省略可能です。

--proxy_password (-pp) [password]

プロキシパスワード。このパラメータは省略可能です。

--proxy_port (-pq) [port, default: 0]

プロキシポート。このパラメータを指定すると、プロキシのホスト名またはIP（--proxy_hostname_or_ip）の入力を求められます。

--proxy_ssh_port (-ps) [port, default: 443]

SSHプロキシポート。デフォルト値はポート443です。

11. (オプション) 各パラメータに関する詳細情報が必要な場合は、`help`パラメータを使用します。

--help (-h)

各パラメータに関する情報を返します。パラメータは、初期導入時の構成に基づいて必須かオプションかが決まります。アップグレードと再導入ではパラメータの要件が異なる場合があります。

12. `setup-mnode`コマンドを実行します。
13. ブラウザから、管理ノード REST API UI にログインします。
- Storage MVIP にアクセスしてログインします。
次の手順用に証明書が承認されます。
 - 管理ノードで REST API UI を開きます。 `https://[management node IP]/mnode`
14. Management Node REST API UI で**Authorize**、または任意のロックアイコンをクリックし、次の手順を実行します。
- クラスタのユーザ名とパスワードを入力します。
 - `mnode-client`の値がまだ入力されていない場合は、クライアントIDを入力します。
 - Authorize**クリックするとセッションが開始されます。
15. 次GET /assetsの手順で必要なベースアセット ID を検索するには、を実行します。
- [GET /assets
 - Try it out**をクリックします。
 - Execute**をクリックします。
 - ベースアセットの" id "の値をクリップボードにコピーします。

注: インストール環境には、インストール時またはアップグレード時に作成されたベースアセットの構成が含まれています。

Server response

Code	Details
200	Response body <pre>[{ "compute": [], "config": { "collector": { "remoteHost": "monitoring" } }, "controller": [1], "id": "84ba38b3-ed88-4916-ab3a-08b3b1b3da83", "name": "SR-5400", "ots": [], "storage": [{ "_links": { "self": { "href": "https://[management node IP]/api/assets/84ba38b3-ed88-4916-ab3a-08b3b1b3da83/storage/ } } }] }]</pre>

16. HCI 監視用の vCenter コントローラ資産 (NetApp HCI インストールのみ) とハイブリッドクラウド制御 (すべてのインストール用) を、管理ノードの既知の資産に追加します。

- POST /assets/{asset_id}/controllers**クリックすると、コントローラのサブアセットが追加されます。
- Try it out**をクリックします。
- Model**タブで定義されている必要なペイロード値を vCenter と vCenter のクレデンシャルのタイプで入力します。

4. クリップボードにコピーしasset_idた親ベースアセット ID を「」フィールドに入力します。
 5. **Execute**をクリックします。
17. (NetApp HCI の場合のみ) 管理ノードの既知の資産にコンピューティングノード資産を追加します。
1. **POST/assets/{asset_id}/compute-nodes**クリックすると、コンピュートノードアセットの資格情報を含むコンピュートノードサブアセットが追加されます。
 2. **Try it out**をクリックします。
 3. ペイロードに**Model**、タブで定義されている必要なペイロード値を入力します。
ESXi ホストを入力し、"Hardware_Tag" パラメータを削除します。
 4. クリップボードにコピーしasset_idた親ベースアセット ID を「」フィールドに入力します。
 5. **Execute**をクリックします。

関連タスク

[NetApp Element Plug-in for vCenter Serverのインストール](#) (13ページ)

新規インストールの場合は、新しい管理ノードを導入してネットアップ Element Plug-in for vCenter ServerをvCenter Serverに登録することで、このプラグインを手動でインストールできます。

ストレージ NIC の設定

ストレージに追加の NIC を使用している場合は、管理ノードに SSH で接続するか、vCenter コンソールを使用して curl コマンドを実行し、そのネットワークインターフェイスを設定できます。

開始する前に

- eth0 の IP アドレスがわかっている。
- クラスタでNetApp Elementソフトウェア11.3以降を実行している必要があります。
- 管理ノード11.3以降を導入しておきます。

手順

1. SSHまたはvCenterコンソールを開きます。
2. 新しいストレージネットワークインターフェイスに必要な各パラメータについて、次のコマンドテンプレート（\$ で表示）の値を置き換えます。

注: 次のテンプレートのクラスタオブジェクトは必須であり、管理ノードのホスト名の名前変更に使用できます。本番環境では、--insecure または -k オプションを使用しないでください。

```
curl -u $mnode_user_name : $mnode_password -- 安全でない -x post \
https://$mnode_ip:442/json-rpc/10.0 \
-H 'Content-Type: application/json' \
-H 'cache-control: no-cache' \
-d '{
    "params": {
        "network": {
            "$eth1": {
                "# default" : false ,
                "アドレス" : "$storage_ip" ,
                "auto" : true ,
                「ファミリー」:「 INET 」
                「方法」:「静的」,
                「MTU」:「 9000 」,
                「ネットマスク」:「 252.0 」,
                「ステータス」:「アップ」
            }
        }
    }
}'
```

```
        },
        "cluster": {
            "名前" : "$mnode_host_name"
        }
    },
    "method": "SetConfig"
}
```

3. コマンドを実行します。

永続ボリューム

永続ボリュームを使用すると、管理ノードの設定データをローカルなVMではなく指定したストレージクラスタに格納できるため、管理ノードが失われた場合や削除された場合でもデータを保持することができます。永続ボリュームはオプションですが、推奨される管理ノード設定です。

永続ボリュームを有効にするオプションは、新しい管理ノード導入時のインストールスクリプトとアップグレードスクリプトに含まれています。永続ボリュームはElementソフトウェアベースのストレージクラスタ上のボリュームであり、ホスト管理ノードVMのノード設定情報がVMが使用されなくなったあとも格納されます。管理ノードが失われた場合は、交換用の管理ノードVMを再接続して失われたVMの設定データをリカバリできます。

インストールまたはアップグレード時に永続ボリューム機能を有効にすると、「NetApp-HCI-」で始まる名前の複数のボリュームが、割り当てられているクラスタに自動的に作成されます。これらのボリュームは、Elementソフトウェアベースのボリューム同様、ElementソフトウェアWeb UI、NetApp Element Plug-in for vCenter Server、またはAPIを使用して表示できます。リカバリに使用できる現在の設定データを保持するためには、永続ボリュームが管理ノードにiSCSI接続された状態で稼働している必要があります。



注意: 管理サービスに関連付けられた永続ボリュームは、インストール時またはアップグレード時に作成され、新しいアカウントに割り当てられます。永続ボリュームを使用している場合は、ボリュームまたは関連するアカウントを変更または削除しないでください。

vCenterへのvCenter Plug-inの登録

vCenter Plug-inパッケージをvSphere Web Clientに導入するには、vCenter Serverでパッケージを拡張機能として登録します。登録が完了すると、vSphere環境に接続されたすべてのvSphere Web Clientでこのプラグインを利用できるようになります。

開始する前に

- vSphere Web Clientからログアウトしておきます。
注: ログアウトしないと、このプロセスで行った更新がWeb Clientで認識されません。
- プラグインを登録するためのvCenter Administratorロールの権限が必要です。
- Elementソフトウェア11.3以降を実行する管理ノードOVAを導入しておきます。
- 管理ノードの電源をオンにしてIPアドレスまたはDHCPアドレスを設定しておきます。
- SSHクライアントまたはWebブラウザ（Chrome 56以降またはFirefox 52以降）を使用します。
- ファイアウォールルールで、TCPポート443、8443、および9443でvCenterとストレージクラスタMVIP間のオープンネットワーク通信を許可します。ポート9443は登録に使用され、登録完了後は閉じてもかまいません。クラスタで仮想ボリューム機能を有

効にした場合は、VASA Providerアクセス用にTCPポート8444も開いていることを確認してください。

タスク概要

vCenter Plug-inは、そのプラグインを使用するすべてのvCenter Serverに登録する必要があります。

注 : MOBデータの同期を保ち、プラグインをアップグレードできるようにするには、リンクモード環境内の各vCenter Serverにプラグインを登録する必要があります。

接続先のvCenter Serverにプラグインが登録されていない場合、vSphere Web Clientにはプラグインが表示されません。

手順

1. 登録用TCPポートを含む管理ノードのIPアドレスをブラウザに入力します (`https://[management node IP]:9443`)。

プラグインの[Manage QoSSIOC Service Credentials]ページが表示されます。

The screenshot shows the 'Manage QoSSIOC Service Credentials' page. On the left sidebar, under 'QoSSIOC Management', the 'Manage Credentials' option is selected. The main area displays a warning message: 'The current QoSSIOC password is set to the default value of 'solidfire'. You should customize credentials to better ensure QoSSIOC service security.' Below this, there are three input fields: 'Old Password' (labeled 'Current password'), 'New Password', and 'Confirm Password'. Each field has a small info icon (i) next to it. At the bottom of the form is a 'SUBMIT CHANGES' button.

2. オプション: vCenter Plug-inを登録する前に、QoSSIOCサービスのパスワードを変更します。

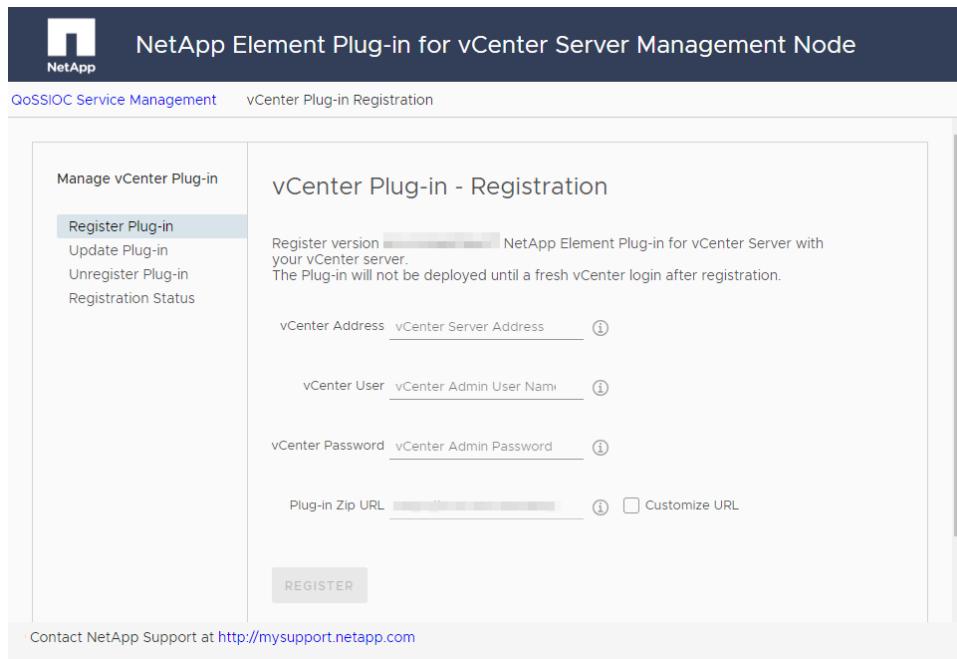
1. 次の情報を入力します。

- **Old Password**: QoSSIOCサービスの現在のパスワード。パスワードをまだ割り当てていない場合は、デフォルトのパスワードを入力します。
solidfire
- **New Password**: QoSSIOCサービスの新しいパスワード。
- **Confirm Password**: 新しいパスワードをもう一度入力します。

2. [Submit Changes]をクリックします。

注 : 変更を送信すると、QoSSIOCサービスが自動的に再起動されます。

3. [vCenter Plug-in Registration]をクリックします。



4. 次の情報を入力します。

- ・ プラグインを登録するvCenterサービスのIPv4アドレスまたはFQDN。
- ・ vCenter Administratorのユーザ名。

注 : vCenter Administratorロールの権限を持つユーザのユーザ名とパスワードを入力する必要があります。

- ・ vCenter Administratorのパスワード。
- ・ (社内サーバ / ダークサイトの場合) プラグインのZIPのカスタムURL。

注 : ほとんどのインストールではデフォルトのパスが使用されます。HTTPサーバまたはHTTPSサーバ(ダークサイト)を使用する場合や、ZIPファイルの名前またはネットワーク設定を変更した場合は、[Custom URL]をクリックしてURLをカスタマイズできます。URLをカスタマイズする場合の追加の設定手順については、社内(ダークサイト)のHTTPサーバのvCenterプロパティの変更に関するプラグインのドキュメントを参照してください。

5. [Register]をクリックします。

6. オプション: [Registration Status]をクリックします。

7. オプション: 次の情報を入力します。

- ・ プラグインを登録するvCenterサービスのIPv4アドレスまたはFQDN
- ・ vCenter Administratorのユーザ名
- ・ vCenter Administratorのパスワード

8. オプション: [Check Status]をクリックして、vCenter Serverに新しいバージョンのプラグインが登録されていることを確認します。

9. vSphere Web ClientにvCenter Administratorとしてログインします。

注 : この操作でvSphere Web Clientでのインストールが完了します。vCenter Plug-inのアイコンがvSphereのメインページに表示されない場合は、プラグインのトラブルシューティングに関するドキュメントを参照してください。

関連タスク

[NetApp Element Plug-in for vCenter Serverのインストール \(13ページ\)](#)

新規インストールの場合は、新しい管理ノードを導入してネットアップ Element Plug-in for vCenter ServerをvCenter Serverに登録することで、このプラグインを手動でインストールできます。

[管理ノードのインストール](#) (13ページ)

NetApp Elementソフトウェアを実行しているクラスタの管理ノードは、構成に応じたイメージを使用して手動でインストールできます。この手動プロセスは、管理ノードのインストールにNetApp Deployment Engineを使用していないSolidFireオールフラッシュストレージ管理者およびNetApp HCI管理者を対象としています。

[社内（ダークサイト）のHTTPサーバ用のvCenterプロパティの変更](#) (22ページ)

vCenter Plug-inの登録時に社内（ダークサイト）のHTTPサーバのURLをカスタマイズする場合は、vSphere Web Clientのプロパティ ファイルを変更する必要があります。

関連資料

[プラグインの登録は成功するがWeb Clientにアイコンが表示されない](#) (174ページ)

社内（ダークサイト）のHTTPサーバ用のvCenterプロパティの変更

vCenter Plug-inの登録時に社内（ダークサイト）のHTTPサーバのURLをカスタマイズする場合は、vSphere Web Clientのプロパティ ファイルを変更する必要があります。

開始する前に

ネットアップサポートサイトからソフトウェアをダウンロードする権限が必要です。

手順

1. vCenterがHTTPサーバからダウンロードを実行できるようにするために、ご使用の環境に対応する手順に従って `webclient.properties` ファイルを変更します。

オプション	説明
vCSA	<p>1. SSHでvCenter Serverに接続します。</p> <pre>Connected to service * List APIs: "help api list" * List Plugins: "help pi list" * Launch BASH: "shell"</pre> <p>Command></p> <p>2. コマンドプロンプトで「shell」と入力してrootにアクセスします。</p> <pre>Command> shell Shell access is granted to root</pre> <p>3. VMware vSphere Web Clientサービスを停止します。</p> <pre>service-control --stop vsphere-client service-control --stop vsphere-ui</pre> <p>4. ディレクトリを変更します。</p> <pre>cd /etc/vmware/vsphere-client</pre> <p>5. webclient.propertiesファイルを編集し、allowHttp=trueを追加します。</p> <p>6. ディレクトリを変更します。</p> <pre>cd /etc/vmware/vsphere-ui</pre> <p>7. webclient.propertiesファイルを編集し、allowHttp=trueを追加します。</p> <p>8. VMware vSphere Web Clientサービスを起動します：</p> <pre>service-control --start vsphere-client service-control --start vsphere-ui</pre>

オプション	説明
Windows	<ol style="list-style-type: none">1. コマンドプロンプトからディレクトリを変更します。 <pre>cd c:\Program Files\VMware\vCenter Server\bin</pre>2. VMware vSphere Web Clientサービスを停止します。 <pre>service-control --stop vsphere-client service-control --stop vsphere-ui</pre>3. ディレクトリを変更します。 <pre>cd c:\ProgramData\VMware\vCenterServer\cfg\vsphere-client</pre>4. webclient.propertiesファイルを編集し、allowHttp=trueを追加します。5. ディレクトリを変更します。 <pre>cd c:\ProgramData\VMware\vCenterServer\cfg\vsphere-ui</pre>6. webclient.propertiesファイルを編集し、allowHttp=trueを追加します。7. コマンドプロンプトからディレクトリを変更します。 <pre>cd c:\Program Files\VMware\vCenter Server\bin</pre>8. VMware vSphere Web Clientサービスを起動します。 <pre>service-control --start vsphere-client service-control --start vsphere-ui</pre>

注: 登録手順が完了したら、変更したファイルからallowHttp=trueを削除して下さいません。

2. vCenterをリブートします。

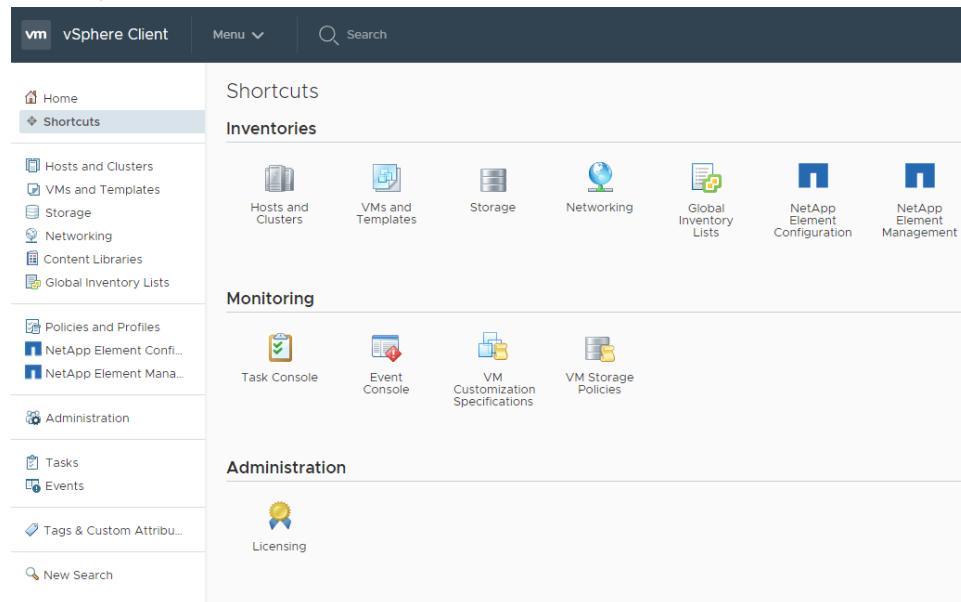
関連タスク

[NetApp Element Plug-in for vCenter Serverのインストール](#) (13ページ)

新規インストールの場合は、新しい管理ノードを導入してネットアップ Element Plug-in for vCenter ServerをvCenter Serverに登録することで、このプラグインを手動でインストールできます。

インストールまたはアップグレード後のプラグインへのアクセス

インストールまたはアップグレードが正常Shortcutsに完了すると、vSphere Web Client のタブとサイドパネルに NetApp Element Configuration and Management 拡張ポイントが表示されます。



注 : vCenter Plug-inのアイコンが表示されない場合は、プラグインのトラブルシューティングに関するドキュメントを参照してください。

関連タスク

[NetApp Element Plug-in for vCenter Serverのインストール](#) (13ページ)

新規インストールの場合は、新しい管理ノードを導入してネットアップ Element Plug-in for vCenter ServerをvCenter Serverに登録することで、このプラグインを手動でインストールできます。

関連資料

[プラグインの登録は成功するがWeb Clientにアイコンが表示されない](#) (174ページ)

プラグインのアップグレード

プラグインがインストールネットアップElementされた既存のvSphere環境では、最新の管理サービスパッケージを使用して、vCenter Server（VCP）用のNetApp Elementプラグインをアップグレードできます。vSphereのアップグレード、NetApp HCIまたはSolidFireのフルシステムアップグレードの一部としてアップグレードする場合は、さらに複雑な作業が必要になります。クライアントを切り替える場合は、FlashからHTML5版vSphere Web Clientに設定を移行することもできます。

手順

次のいずれかのアップグレードまたは移行オプションを選択します。

- vSphereコンポーネントをアップグレードする場合は、次のいずれかの手順を実行します。
 - vCenter Server用Elementプラグインを使用して、NetApp HCIシステムのvSphereコンポーネントをアップグレードします
 - vCenter Server用Elementプラグインを使用して、NetApp SolidFireストレージシステムのvSphereコンポーネントをアップグレードします
- エンドツーエンドのNetApp HCIまたはSolidFireストレージシステムのアップグレードの一部としてプラグインをアップグレードする場合は、製品に適した手順に従ってください。

ネットアップのマニュアル：アップグレードの概要

- Element Server用のElementプラグインをアップグレードして最新バージョンを取得する場合は、次の手順を実行します。
NetAppのマニュアル：vCenter Server用Elementプラグインをバージョン4.4にアップグレードします
- FlashベースからHTML5ベースのvSphereクライアントに切り替える場合は、次の手順を実行します。
FlashベースからHTML5ベースのvSphere Web Clientへの切り替え（26ページ）

FlashベースからHTML5ベースのvSphere Web Clientへの切り替え

FlashベースのvSphere Web ClientからHTML5ベースのvSphere Web Clientに切り替える場合は、既存のプラグインをアップグレードせずにそのまま使用できます。

開始する前に

- 現在のプラグインは4.1以降で、vCenter Serverに登録されている。
- FlashベースのvSphere Web Clientを使用している。

手順

1. vSphere Flash Web Clientからログアウトします。
2. vSphere HTML5 Web Clientにログインします。
3. プラグインを使用して次の手順を実行します。
 1. ストレージクラスタを追加します
 2. 管理ノードとQoSを設定します

NetApp Element Plug-in for vCenter Serverの使用方法

NetApp Element Plug-in for vCenter Serverを使用すると、VMware vSphere Web Client内でNetApp Elementクラスタを設定、管理、監視することができます。Configuration拡張ポイントとManagement拡張ポイントを使用して、クラスタ全体に対する変更を行うことができます。

NetApp Element Configuration拡張ポイントでは、クラスタの追加と管理、リンクモードのvCenter Serverの割り当て、管理ノードのQoSIOCの設定を行うことができます。NetApp Element Management拡張ポイントでは、Element UIと同等の監視および管理インターフェイスを通じて、ストレージシステムをクラスタ単位で一元管理できます。

関連資料

[NetApp Element Configuration拡張ポイント](#) (27ページ)

ネットアップElement Configuration 拡張ポイントを使用すると、クラスタの追加と管理、リンクモード用のvCenterサーバへのストレージクラスタの割り当て、QoSIOC用の管理ノードの設定を行うことができます。

[NetApp Element Management拡張ポイント](#) (28ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントでは、Element UIと同等の監視および管理インターフェイスを通じて、ストレージシステムをクラスタ単位で一元管理できます。

NetApp Element Configuration拡張ポイント

ネットアップElement Configuration 拡張ポイントを使用すると、クラスタの追加と管理、リンクモード用のvCenterサーバへのストレージクラスタの割り当て、QoSIOC用の管理ノードの設定を行うことができます。

注:インストールされているvSphereのバージョンによっては、vSphere Web Clientの画面は以降のスクリーンショットと多少異なる場合があります。

The screenshot shows the 'Clusters' tab of the NetApp Element Configuration interface. At the top, there are tabs for 'Getting Started', 'Clusters' (which is selected), 'QoSIOC Settings', 'QoSIOC Events', and 'About'. Below the tabs, there is a search bar with the placeholder 'Clusters' and a 'ADD CLUSTER' button. A dropdown menu labeled 'ACTIONS' is open. The main area displays a table with one item. The columns are: Cluster Name, vCenter IP Address, Unique ID, Management Virtual IP, Storage Virtual IP, Status, and VVols. The first row shows 'Cluster Name' as '○', 'Status' as 'Online', and 'Enabled'. There is also a small 'i' icon in the top right corner of the main area.

ネットアップElement Configuration拡張ポイントからは以下のタブを使用できます。

はじめに

プラグインの拡張ポイントと実行できる操作の説明が表示されます。各ページでGetting Startedページを非表示AboutネットアップElementにしたり、NetApp Element Configuration 拡張ポイントのタブから復元したりできます。

クラスタ

プラグインで制御されているネットアップElementクラスタを管理します。クラスタ固有の機能を有効化、無効化、または設定することもできます。

QoSIOC の設定

vCenter と通信するために、管理ノードの QoSIOC サービスのクレデンシャルを設定します。

QoSIOC Events

検出されたすべてのQoSIOCイベントに関する情報が表示されます。

About

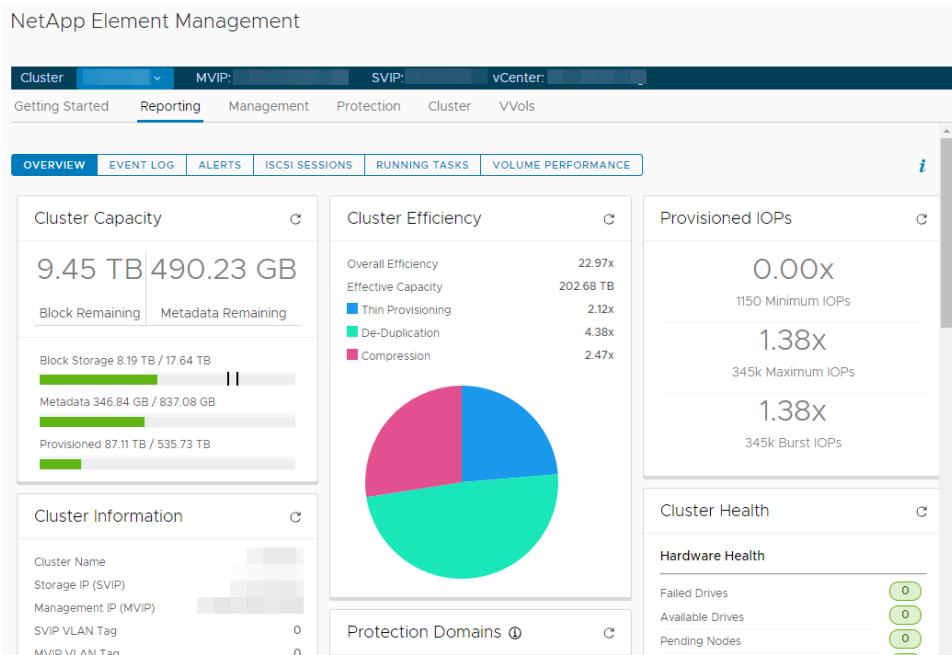
プラグインのバージョン情報が表示されます。サービスバンドルをダウンロードするオプションもあります。

NetApp Element Management拡張ポイント

NetApp Element Management拡張ポイントでは、Element UIと同等の監視および管理インターフェイスを通じて、ストレージシステムをクラスタ単位で一元管理できます。

注：インストールされているvSphereのバージョンによっては、vSphere Web Clientの画面は以降のスクリーンショットと多少異なる場合があります。

NetApp Element Management



クラスタナビゲーションバーでは、プラグインに追加されたクラスタ間をすばやく切り替えることができます。

Cluster

複数のクラスタが追加されている場合は、管理タスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。ドロップダウンリストから追加されたその他のクラスタを選択できます。

MVIP

選択したクラスタの管理仮想IPアドレス。

SVIP

選択したクラスタのストレージ仮想IPアドレス。

vCenter

選択したクラスタがアクセスできるvCenter Server。プラグインに追加されたクラスタには、vCenter Serverへのアクセスが割り当てられています。

NetApp Element Management拡張ポイントからは以下のタブを使用できます。

Getting Started

プラグインの拡張ポイントと実行できる操作の説明が表示されます。[Getting Started]ページはページ単位で非表示にでき、またNetApp Element Configuration拡張ポイントの[About]タブで元に戻すことができます。

Reporting

クラスタのコンポーネントに関する情報とクラスタのパフォーマンスの概要が表示されます。イベント、アラート、iSCSIセッション、実行中のタスク、およびボリュームのパフォーマンスに関する情報を検索することもできます。

Management

データストア、ボリューム、ユーザ アカウント、アクセス グループ、およびイニシエータを作成および管理します。バックアップ処理、クローニング、Snapshotを実行することもできます。NetApp Elementソフトウェア10以降を使用している場合は、QoSポリシーの作成と管理も可能です。

Protection

個々のSnapshotとグループSnapshotを管理します。Snapshotの作成スケジュールの設定、リアルタイム レプリケーションのためのクラスタのペアリング、ボリュームペアの管理も可能です。

Cluster

ドライブとノードを追加および管理します。VLANの作成と管理も可能です。

VVols

仮想ボリュームおよび仮想ボリュームに関連付けられたストレージ コンテナ、プロトコル エンドポイント、およびバインドを管理します。

vCenterリンク モード

ネットアップ Element Plug-in for vCenter Serverでは、vCenterリンク モードを使用して他の vCenter Serverのクラスタリソースを管理することができます。リンク モード グループに属するいずれかのvCenter Serverにログインし、リンクされた他のvCenter Serverが所有するリソースを同じ画面から管理できます。

プラグインを使用するリンク モード環境内の各vCenter Serverにプラグインを登録する必要があります。プラグインの登録ユーティリティを使用して、各vCenter Serverへの登録を完了してください。さらに、リンクされたそれぞれのvCenter ServerのvSphere Web Clientに一度ログインする必要があります。ログインすると、Web Clientにプラグインがインストールされます。

ベストプラクティス : Add Cluster構成プロセス中にクラスタに関連付けた vCenter Server からクラスタを管理します。

Elementソフトウェアベースのストレージを使用するホストは特定のvCenter Server専用であり、リンク モード グループのメンバー間では共有されません。そのため、クラスタのストレージ管理タスクはvCenter Server内で使用可能なホストに限定されます。

注 : プラグインはネットワーク上のエレメントベースのストレージクラスタを管理できますが、vCenter Server のリモートインスタンス上のデータストアを管理することはできません。vCenter Server と vCenter 用の Element プラグインは、リモートの vCenter Server のデータストアを認識できません。このような場合、vCenter 用の Element プラグインは、ボリュームに VMFS（Virtual Machine File System）データストアがあるかどうかを認識できず、ボリュームを削除できません。リモート vCenter Server でデータストアとボリュームを管理する場合は、注意が必要です。

関連タスク

[クラスタの追加](#) (32ページ)

NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、Elementソフトウェアを実行するクラスタを追加できます。クラスタへの接続が確立されると、そのクラスタをNetApp Element Management拡張ポイントを使用して管理できるようになります。

複数クラスタを管理する場合のオブジェクト名のベストプラクティス

クラスタコンポーネントを簡単に識別できるように、NetApp Element Plug-in for vCenter Serverに関連するすべてのオブジェクトに一貫したわかりやすい命名規則を使用する必要があります。これは、特にvCenter Serverやクラスタを複数使用する環境において重要となります。

わかりやすい命名規則を使用しないと、複数のクラスタを管理する際に混乱が生じるおそれがあります。たとえば、インベントリにSF-cluster₁とSF-cluster₂がある場合は、アカウント、ボリューム、データストアにも同様のパターンで名前を付ける必要があります(SF1-account1、SF2-vol1など)。一貫した命名規則を使用すれば、**NetApp Element Management**拡張ポイントのクラスタナビゲーションバーを調べなくても、作業中のクラスタを容易に識別できます。また、Elementソフトウェアベースのボリュームに関連付けられたデータストアなど、Elementソフトウェアベースのストレージオブジェクトのバックингオブジェクトとして機能するvSphere内のオブジェクトを誤って変更する可能性も少なくなります。

クラスタ設定

NetApp Element Configuration拡張ポイントの[Clusters]タブでは、クラスタを追加することができます。追加したクラスタはNetApp Element Management拡張ポイントで管理できます。既存のクラスタプロファイルを管理したり、Virtual Volumes (VVol) 機能をサポートされるクラスタで有効にしたり、クラスタをシャットダウンしてオフラインに切り替えたりすることもできます。

クラスタの追加

NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、Elementソフトウェアを実行するクラスタを追加できます。クラスタへの接続が確立されると、そのクラスタをNetApp Element Management拡張ポイントを使用して管理できるようになります。

開始する前に

- IPアドレスまたはFQDNがわかっている使用可能な状態のクラスタが少なくとも1つ必要です。
- クラスタに対するフル権限を持つ現在のクラスタ管理者のユーザ クレデンシャルが必要です。
- ファイアウォールルールで、TCPポート443および8443でvCenterとクラスタMVIP間のオープンネットワーク通信を許可します。

注 : NetApp Element Management拡張ポイントの機能を使用するには、クラスタが少なくとも1つ追加されている必要があります。

タスク概要

ここでは、クラスタプロファイルを追加してクラスタをプラグインで管理できるようにする方法について説明します。プラグインを使用してクラスタ管理者のクレデンシャルを変更することはできません。クラスタ管理者アカウントのクレデンシャルを変更する手順については、*NetApp Element*ソフトウェアユーザガイドを参照してください。



注意 : vSphere HTML5 Web ClientとFlash Web Clientは別々のデータベースを使用しており、両データベースを統合することはできません。一方のクライアントに追加したクラスタは、もう一方のクライアントで認識されません。両方のクライアントを使用する場合は、両方にクラスタを追加してください。

手順

- [NetApp Element Configuration] > [Clusters]を選択します。
- [Add Cluster]をクリックします。
- [Add Cluster]ダイアログ ボックスで、次の情報を入力します。
 - IP address/FQDN : クラスタのMVIPアドレスを入力します。
 - User ID : クラスタ管理者のユーザ名を入力します。
 - Password : クラスタ管理者のパスワードを入力します。
 - vCenter Server : リンクモード グループを設定している場合、クラスタにアクセスするvCenter Serverを選択します。リンクモードを使用していない場合は、現在のvCenter Serverがデフォルトで選択されます。

注 : クラスタではvCenter Serverごとに専用のホストを使用します。選択したvCenter Serverから目的のホストにアクセスできることを確認してください。使

用するホストをあとで変更する場合は、クラスタを削除し、別のvCenter Serverに再割り当てして再度追加します。

4. [OK]をクリックします。
処理が完了すると、クラスタが使用可能なクラスタのリストに表示され、NetApp Element Management拡張ポイントで使用できるようになります。

クラスタの詳細の表示

使用可能な各クラスタの詳細をまとめた概要情報を確認できます。

手順

1. [NetApp Element Configuration] > [Clusters]を選択します。
2. 確認するクラスタプロファイルのチェックボックスを選択します。
3. [Actions]をクリックします。
4. 表示されたメニューで[Details]を選択します。

クラスタの詳細

NetApp Element Configuration拡張ポイントの[Clusters]ページで、プラグインに追加されているすべてのクラスタに関する情報を確認できます。

Cluster Name

クラスタの名前。

vCenter IP Address

クラスタが割り当てられているvCenter ServerのIPアドレスまたはFQDN。

Unique ID

クラスタの一意のID。

Management Virtual IP

管理仮想IPアドレス (MVIP)。

Storage Virtual IP

ストレージ仮想IPアドレス (SVIP)。

Status

クラスタのステータス。

VVols

クラスタのVVol機能のステータス。

個々のクラスタの詳細

NetApp Element Configuration拡張ポイントの[Clusters]ページでは、個々のクラスタを選択してその詳細を表示し、クラスタの詳細情報を確認できます。

Cluster Name

クラスタの名前。

Unique ID

クラスタの一意のID。

vCenter IP Address

クラスタが割り当てられているvCenter ServerのIPアドレスまたはFQDN。

Management Virtual IP

管理仮想IPアドレス（MVIP）。

MVIP Node ID

マスターMVIPアドレスを保持するノード。

Storage Virtual IP

ストレージ仮想IPアドレス（SVIP）。

SVIP Node ID

マスターSVIPアドレスを保持するノード。

Element Version

クラスタで実行されているNetApp Elementソフトウェアのバージョン。

VASA 2 Status

Elementクラスタ上のVASA Providerのステータス。

VASA Provider URL

Elementクラスタで有効になっているVASA ProviderのURL（該当する場合）。

Encryption At Rest Status

保存データの暗号化（Encryption At Rest）機能の状態。

有効な値は次のとおりです。

- Enabling：保存データの暗号化を有効にしています。
- Enabled：保存データの暗号化は有効です。
- Disabling：保存データの暗号化を無効にしています。
- Disabled：保存データの暗号化は無効です。

Ensemble Nodes

データベースアンサンブルに参加しているノードのIP。

Paired With

ローカルクラスタとペアリングされている他のクラスタの名前。

SSH Status

Secure Shell（SSH）のステータス。有効な場合は残り時間が表示されます。

クラスタプロファイルの編集

NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、クラスタプロファイルのクラスタ管理者のユーザ名とパスワードを変更できます。

タスク概要

ここでは、プラグインで使用されるクラスタ管理者のユーザ名とパスワードを変更する方法について説明します。プラグインからクラスタ管理者のクレデンシャルを変更することはできません。クラスタ管理者アカウントのクレデンシャルを変更する手順については、NetApp Elementソフトウェアユーザガイドを参照してください。

手順

1. [NetApp Element Configuration] > [Clusters]を選択します。
2. 編集するクラスタプロファイルのチェックボックスを選択します。
3. [Actions]をクリックします。
4. 表示されたメニューで[Edit]をクリックします。

5. [Edit Cluster]ダイアログ ボックスで、次の情報を必要に応じて編集します。

- **User ID** : クラスタ管理者のユーザ名。
- **Password** : クラスタ管理者のパスワード。

注 : クラスタプロファイルのIPアドレスまたはFQDNは、クラスタの追加後は変更できません。また、割り当てられているリンクモードのvCenter Serverも追加済みのクラスタについては変更できません。クラスタのアドレスや関連付けられているvCenter Serverを変更する場合は、クラスタを削除して追加し直す必要があります。

6. [OK]をクリックします。

クラスタプロファイルの削除

NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、vCenter Plug-inでの管理対象から除外するクラスタのクラスタプロファイルを削除できます。

タスク概要

リンクモードグループを設定している場合にクラスタを別のvCenter Serverに再割り当てるには、クラスタプロファイルを削除してから、リンクされている別のvCenter ServerのIPで再度追加します。

手順

1. [NetApp Element Configuration] > [Clusters]を選択します。
2. 削除するクラスタプロファイルのチェックボックスを選択します。
3. [Actions]をクリックします。
4. 表示されたメニューで[Remove]をクリックします。
5. 操作を確定します。

Virtual Volumesの有効化

NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、vSphere Virtual Volumes (VVOL) 機能を手動で有効にする必要があります。ElementシステムのVVOL機能はデフォルトでは無効になっており、新規インストール時やアップグレード時に自動的に有効になることはありません。VVOL機能の有効化は一度だけ実行します。

開始する前に

- ElementクラスタがVVOLに対応したESXi 6.0以降の環境に接続されている必要があります。
- Element 11.3以降を使用している場合は、クラスタをESXi 6.0 Update 3以降の環境に接続する必要があります。

手順

1. [NetApp Element Configuration] > [Clusters]を選択します。
2. 有効にするクラスタをリストから選択します。
3. [Actions]をクリックします。
4. 表示されたメニューで[Enable VVols]をクリックします。



注意 : 有効にしたVVOL機能をあとから無効にすることはできません。vSphere Virtual Volumes機能を有効にすると、NetApp Elementソフトウェアの設定が永続的に変更されます。クラスタがVMware ESXi VVOLに対応した環境に接続されている場合にのみ、VVOL機能を有効にしてください

い。VVol機能を無効にしてデフォルト設定に戻すには、クラスタを工場出荷時のイメージに戻す必要があります。

5. [Yes]をクリックして、Virtual Volumes設定の変更を確定します。

注 : VVol機能を有効にすると、ElementクラスタはVASA Providerを起動してVASAトラフィック用のポート8444を開き、vCenterおよびすべてのESXiホストから検出可能なプロトコルエンドポイントを作成します。

6. 選択したクラスタの[Actions]をクリックします。
7. 表示されたメニューで[Details]を選択します。
8. [VASA Provider URL]フィールドからVASA ProviderのURLをコピーします。このURLは、VASA ProviderをvCenterに登録する際に使用します。

注 : vSphere Virtual Volumes機能に必要なその他の設定タスクについては、プラグインのドキュメントを参照してください。

関連タスク

[vSphere Virtual Volumes \(VVol\) 機能の設定](#) (155ページ)

NetApp Element Plug-in for vCenter Serverで仮想ボリューム (VVol) 機能を使用するには、初期設定手順を実行する必要があります。

保存データの暗号化の有効化

NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、Encryption At Rest (EAR;保存データの暗号化) 機能を手動で有効にすることができます。

手順

1. [NetApp Element Configuration] > [Clusters]を選択します。
2. 保存データの暗号化を有効にするクラスタを選択します。
3. [Actions]をクリックします。
4. 表示されたメニューで[Enable EAR]をクリックします。
5. 操作を確定します。

保存データの暗号化の無効化

NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、保存データの暗号化 (EAR) 機能を手動で無効にすることができます。

手順

1. [NetApp Element Configuration] > [Clusters]を選択します。
2. 保存データの暗号化を無効にするクラスタのチェックボックスを選択します。
3. [Actions]をクリックします。
4. 表示されたメニューで[Disable EAR]をクリックします。
5. 操作を確定します。

SSHの有効化

NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、Secure Shell (SSH) セッションを手動で有効にすることができます。SSHを有効にすると、ネットアップの技術サポートエンジニアが指定された期間にストレージノードにアクセスしてトラブルシューティングを行うことができます。

手順

1. [NetApp Element Configuration] > [Clusters]を選択します。
2. SSHセッションを有効にするクラスタを選択します。
3. [Actions]をクリックします。
4. 表示されたメニューで[Enable SSH]をクリックします。
5. SSHセッションを有効にする期間（時間）を入力します。最大値は720です。処理を続行するには、値を設定する必要があります。
6. [Yes]をクリックします。

SSHの無効化

NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、ストレージ クラスタ内のノードへのSecure Shell (SSH) アクセスを手動で無効にすることができます。

手順

1. [NetApp Element Configuration] > [Clusters]を選択します。
2. SSHアクセスを無効にするクラスタを選択します。
3. [Actions]をクリックします。
4. 表示されたメニューで[Disable SSH]をクリックします。
5. [Yes]をクリックします。

SSHタイム リミットの変更

NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、アクティブなSecure Shell (SSH) セッションの期間を変更できます。

手順

1. [NetApp Element Configuration] > [Clusters]を選択します。
2. 変更するSSHセッションを実行しているクラスタを選択します。
3. [Actions]をクリックします。
4. 表示されたメニューで[Change SSH]をクリックします。
ダイアログ ボックスにSSHセッションの残り時間が表示されます。
5. SSHセッションの新しい期間（時間）を入力します。処理を続行するには、値を設定する必要があります。
6. [Yes]をクリックします。

保護ドメインの監視設定

NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、保護ドメインの監視を手動で有効にすることができます。ノード ドメインまたはシャーシ ドメインに基づいて保護ドメインのしきい値を選択できます。

開始する前に

- 保護ドメインの監視機能を使用するには、Element 11.0以降のクラスタを選択する必要があります。Element 11.0より前のクラスタでは保護ドメイン機能を使用できません。
- 保護ドメイン機能を使用するには、クラスタに2つ以上のノードが必要です。2ノードクラスタとの互換性はありません。

タスク概要

保護ドメインとは、ノードまたはグループ化された一連のノードのことで、クラスタのデータ可用性を失うことなく、ドメイン内のノードまたはすべてのノードで障害が発生する可能性があります。保護ドメイン機能を使用すると、クラスタのリソース容量を監視して、クラスタが障害イベントから回復できるようにすることができます。ノードまたはシャーシのドメインレベルでモニタリングを選択できます。

- ノードレベルでは、個々のノードごとに各保護ドメインが定義され、各ノードはシャーシ全体に配置される可能性があります。
- シャーシレベルは、シャーシを共有するノードごとに各保護ドメインを定義します。

シャーシドメインの耐障害性を確保するためには、ノードドメインよりも多くの容量リソースが必要です。保護ドメインのしきい値を超えると、データの可用性を中断せずに障害から回復するための十分な容量をクラスタで確保できなくなります。

手順

- NetApp Element Configuration > Clustersの順に選択します。
- 保護ドメインの監視を有効にするクラスタを選択します。
- Actionsをクリックします。
- 表示されるメニューでSet Protection Domain Monitoring、をクリックします。
- Set Protection Domain Monitoringダイアログで、障害のしきい値を選択します。
 - Node** : しきい値を超えると、ノードレベルでハードウェア障害が発生しても、クラスタが中断されないデータを提供できなくなります。ノードしきい値はシステムのデフォルト設定です。
 - Chassis** : しきい値を超えると、シャーシレベルでハードウェア障害が発生しても、クラスタが中断されないデータを提供できなくなります。
- OKをクリックします。

タスクの結果

監視のプリファレンスを設定ReportingNetApp Element Managementしたら、拡張ポイントのタブから保護ドメインを監視できます。レポート概要（48ページ）を参照してください。

クラスタのシャットダウン

NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、ストレージクラスタ内のすべてのアクティブノードを手動でシャットダウンできます。

開始する前に

I/Oを停止し、すべてのiSCSIセッションを切断しておきます。

注 : クラスタをシャットダウンするのではなく再起動する場合は、NetApp Element Management拡張ポイントの[Cluster]ページからすべてのノードを選択して再起動を実行できます。

手順

- [NetApp Element Configuration] > [Clusters]を選択します。
- シャットダウンするクラスタのチェックボックスを選択します。
- [Actions]をクリックします。
- 表示されたメニューで[Shutdown]をクリックします。
- 操作を確定します。

関連タスク

[クラスタノードのシャットダウン](#) (150ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントを使用して、クラスタ内の1つ以上のアクティブノードをシャットダウンできます。クラスタをシャットダウンするには、すべてのクラスタノードを選択して同時にシャットダウンします。

[クラスタノードの再起動](#) (150ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントを使用して、クラスタ内の1つ以上のアクティブノードを再起動できます。

関連情報

[*Powering off and powering on a NetApp HCI system*](#)

NetApp HCIの拡張

NetApp HCIを使用してノードを追加することにより、NetApp HCIインフラストラクチャを手動で拡張できます。システムを拡張するためのNetApp HCI UIへのリンクには、NetApp Element拡張ポイントからアクセスできます。リンクにはNetApp Element Management拡張ポイントの[Getting Started]ページと[Cluster]ページからもアクセスできます。

手順

1. [NetApp Element Configuration] > [Clusters]を選択します。
2. 変更するクラスタを選択します。
3. [Actions]をクリックします。
4. 表示されたメニューで[Expand your NetApp HCI]をクリックします。

QoSIOC の設定

NetAppQoSIOC Settings Element Configuration 拡張ポイントのタブでは、 vCenter の Storage I/O Control Settings （ SIOC ）に基づいて QoS （ Element Storage QoS ）に使用される QoSIOC 設定を構成できます。これらのクレデンシャルは、管理ノードの QoSIOC サービスが vCenter と通信するために必要です。 QoSIOC サービスは、 vCenter でデータストアの VM アクティビティを監視します。クレデンシャルを設定したら、これらの設定を編集してクレデンシャルを更新したり、新しい管理ノードの設定をクリアしたりできます。

QoSIOCElement は、パワーオンイベントやパワーオフイベント、ゲストの再起動やシャットダウン、再構成アクティビティなどの仮想マシンイベントが発生したときに、標準要素ボリュームの QoS 値を調整します。 QoSIOC はオプションの機能であり、プラグインでストレージクラスタを管理するために必要な機能ではありません。

QoSIOC は、標準データストアでのみ使用できます。仮想ボリューム（ VVol ）では機能しません。

注 : ページ QoSIOC Settings を使用して、仮想ボリューム（ VVol ）機能を有効にしたり、 VVol を vSphere で使用できるようにしたりすることはできません。 詳細については、 vCenter Server 用の Element プラグインのマニュアルで、 VVol 機能の設定についての説明を参照してください。

リンクモードの場合、 vCenter Server 用の NetApp Element プラグインは、単一の vCenter Server で指定した QoSIOC 設定を使用して、すべての vCenter Server を登録します。

QoSIOC Status [設定] ページのフィールドには、次の値が表示されます。

- Up : QoSIOC は有効です。
- Down : QoSIOC は無効です。
- Not Configured : QoSIOC は未設定です。
- Network Down : vCenter がネットワーク上の QoSIOC サービスと通信できません。 mNode と SIOC サービスはまだ実行されている可能性があります。

関連タスク

[vSphere Virtual Volumes \(VVol \) 機能の設定](#) (155ページ)

NetApp Element Plug-in for vCenter Server で仮想ボリューム（ VVol ）機能を使用するには、初期設定手順を実行する必要があります。

関連情報

[KB: Status shows as Network Down or Down](#)

QoSIOC の設定

NetAppElement Element Configuration ネットアップ Element を使用して、 Element Management Node （ MNode ）の QoSIOC 設定を構成できます。 QoSIOC サービスを有効にして使用するには、この設定が必要です。

手順

1. NetApp Element Configuration > QoSIOC Settings の順に選択します。
2. Actions をクリックします。
3. 表示されるメニューで Configure 、を選択します。
4. Configure QoSIOC Settings ダイアログボックスで、次の情報を入力します。

- **mNode IP Address/FQDN** : QoSIOC サービスを含むクラスタの管理ノードの IP アドレス。
- **mNode Port** : QoSIOC サービスを含む管理ノードのポートアドレス。デフォルトポートは8443です。
- **QoSIOC User ID** : QoSIOC サービスのユーザ ID。QoSIOC サービスのデフォルトのユーザ ID は *admin* です。ネットアップ HCIの場合、ネットアップ Deployment Engineを使用したインストールで入力されるユーザIDと同じです。
- **QoSIOC Password** : Element qossIOC サービスのパスワード。QoSIOCサービスのデフォルトのパスワードは*solidfire*です。カスタムパスワードを作成していない場合は、登録画面 ([https://\[management node IP\]:9443](https://[management node IP]:9443))からパスワードを作成できます。

注 : NetApp HCI の導入では、デフォルトのパスワードはインストール時にランダムに生成されます。パスワードを確認するには、「関連情報」の「サポート技術情報」のリンクにある手順 4 を参照してください。

- **vCenter User ID** : フル管理者ロール権限を持つ vCenter 管理者のユーザ名。
- **vCenter Password** : フル管理者ロール権限を持つ vCenter 管理者のパスワード。

5. OKをクリックします。

QoSIOC Statusこのフィールドは、プラグインがサービスと正常に通信できる場合に表示されます。

注 : 管理ノードの有効な QoSIOC 設定を構成すると、これらの設定がデフォルトになります。新しい管理ノードに有効な QoSIOC 設定を指定するまで、QoSIOC 設定は最後に認識されていた有効な QoSIOC 設定に戻ります。新しい管理ノードの QoSIOC クレデンシャルを設定する前に、設定した管理ノードの QoSIOC 設定をクリアする必要があります。

関連情報

[KB: Status shows as Network Down or Down](#)

QoSIOC 設定の編集

ElementNetApp Element Configurationネットアップ 拡張Elementポイントを使用して、アクティブな Element Management ノードの QoSIOC クレデンシャルと vCenter クレデンシャルを変更できます。

手順

1. NetApp Element Configuration > QoSIOC Settingsの順に選択します。
2. Actionsをクリックします。
3. 表示されるメニューでEdit、を選択します。
4. Edit QoSIOC Settingsダイアログボックスで、次のいずれかを変更します。
 - **QoSIOC User ID** : QoSIOC サービスのユーザ ID。QoSIOC サービスのデフォルトのユーザ ID は *admin* です。ネットアップ HCIの場合、ネットアップ Deployment Engineを使用したインストールで入力されるユーザIDと同じです。
 - **QoSIOC Password** : エレメント qossIOC サービスのパスワード。QoSIOCサービスのデフォルトのパスワードは*solidfire*です。カスタムパスワードを作成していない場合は、登録画面 ([https://\[management node IP\]:9443](https://[management node IP]:9443))からパスワードを作成できます。

注 : NetApp HCI の導入では、デフォルトのパスワードはインストール時にランダムに生成されます。パスワードを確認するには、「関連情報」の「サポート技術情報」のリンクにある手順 4 を参照してください。

- **vCenter User ID** : フル管理者ロール権限を持つ vCenter 管理者のユーザ名。
 - **vCenter Password** : フル管理者ロール権限を持つ vCenter 管理者のパスワード。
5. **OK**をクリックします。
QoSIOC Statusこのフィールドは、プラグインがサービスと正常に通信できる場合に表示されます。

注 : 管理ノードの有効な QoSIOC 設定を構成すると、これらの設定がデフォルトになります。新しい管理ノードに有効な QoSIOC 設定を指定するまで、QoSIOC 設定は最後に認識されていた有効な QoSIOC 設定に戻ります。新しい管理ノードの QoSIOC クレデンシャルを設定する前に、設定した管理ノードの QoSIOC 設定をクリアする必要があります。

QoSIOC 設定のクリア

NetApp Element Configuration ネットアップ Element ポイントを使用して、Element Management Node (MNode) の QoSIOC 設定の詳細をクリアできます。新しい管理ノードのクレデンシャルを設定するには、先に既存の管理ノードの設定をクリアする必要があります。QoSIOC 設定をクリアすると、アクティブな QoSIOC が vCenter、クラスタ、データストアから削除されます。

手順

1. NetApp Element Configuration > QoSIOC Settings の順に選択します。
2. Actions をクリックします。
3. 表示されるメニューで Clear、を選択します。
4. 操作を確定します。
QoSIOC Statusこのフィールドには、プロセスの完了後に Not Configured と表示されます。

関連タスク

[QoSIOC サービスのパスワードの変更](#) (42 ページ)

管理ノードの登録画面を使用して、QoSIOC サービスのパスワードを変更できます。

QoSIOC サービスのパスワードの変更

管理ノードの登録画面を使用して、QoSIOC サービスのパスワードを変更できます。

開始する前に

- NetApp Element Configuration 拡張ポイント (**NetApp Element Configuration > QoSIOC Settings**) を使用して、Element Management Node (MNode) の QoSIOC 設定の詳細をクリアしました。
注 : 新しい管理ノードのクレデンシャルを設定する前に、設定した管理ノードの QoSIOC 設定をクリアする必要があります。QoSIOC 設定をクリアすると、アクティブな QoSIOC が vCenter、クラスタ、データストアから削除されます。
- 管理ノードの電源をオンにしておきます。

タスク概要

ここでは、QoSIOC パスワードのみを変更する方法について説明します。QoSIOC ユーザ名 **QoSIOC Settings** を変更する場合は、NetApp Element Configuration 拡張ポイントのページから変更できます。

手順

1. 登録用TCPポートを含む管理ノードのIPアドレスをブラウザに入力します ([https://\[management node IP\]:9443](https://[management node IP]:9443))。

登録 UIManage QoSIOC Service Credentials には、プラグインのページが表示されます。

The screenshot shows the 'NetApp Element Plug-in for vCenter Server Management Node' interface. The left sidebar has 'QoSIOC Management' with 'Manage Credentials' and 'Restart QoSIOC Service' options. The main panel title is 'Manage QoSIOC Service Credentials'. A yellow warning box says: 'The current QoSIOC password is set to the default value of 'solidfire'. You should customize credentials to better ensure QoSIOC service security.' Below it are fields for 'Old Password' (Current password), 'New Password' (New password), and 'Confirm Password' (Confirm New Password). At the bottom is a 'SUBMIT CHANGES' button.

2. 次の情報を入力します。
 - **Old Password** : QoSIOC サービスの現在のパスワード。パスワードをまだ割り当てていない場合は、デフォルトのパスワードを入力します。
solidfire
注 : NetApp HCI の導入では、デフォルトのパスワードはインストール時にランダムに生成されます。パスワードを確認するには、「関連情報」の「サポート技術情報」のリンクを参照してください。
 - **New Password** : QoSIOC サービスの新しいパスワード。
 - **Confirm Password** : 新しいパスワードをもう一度入力します。
3. **Submit Changes**をクリックします。
注 : 変更を送信すると、QoSIOCサービスが自動的に再起動されます。
4. vSphere Web Client で**NetApp Element Configuration > QoSIOC Settings**、を選択します。
5. **Actions**をクリックします。
6. 表示されるメニューで**Configure**、を選択します。
7. **Configure QoSIOC Settings**ダイアログボックス**QoSIOC Password**で、「」フィールドに新しいパスワードを入力します。
8. **OK**をクリックします。
QoSIOC Statusこのフィールドは、プラグインがサービスと正常に通信できる場合に表示されます。

関連タスク

[QoSIOC 設定のクリア](#) (42ページ)

NetApp Element Configuration ネットアップ Element ポイントを使用して、 Element Management Node (MNode) の QoSIOC 設定の詳細をクリアできます。新しい管理ノードのクレデンシャルを設定するには、先に既存の管理ノードの設定をクリアする必要があります。 QoSIOC 設定をクリアすると、アクティブな QoSIOC が vCenter 、クラスタ、データストアから削除されます。

[QoSIOC 設定の編集](#) (41ページ)

ElementNetApp Element Configuration ネットアップ 拡張 Element ポイントを使用して、アクティブな Element Management ノードの QoSIOC クレデンシャルと vCenter クレデンシャルを変更できます。

QoSSIOCイベントの表示

QoSSIOCイベントは、NetApp Element Configuration拡張ポイントで確認できます。QoS 対応データストアを持つ VM が再構成された場合、または電源イベントまたはゲストイベントが発行された場合、プラグインは QoSSIOC イベントを報告します。

開始する前に

- ・ クラスタが少なくとも1つ追加および実行されている必要があります。
- ・ プラグQoSSIOC Settingsインのページを使用して、QoSSIOC サービスを設定し、実行していることを確認する必要があります。
- ・ 少なくとも1つのデータストアでQoSSIOC自動化が有効になっている必要があります。

タスク概要

QoSSIOCイベントは、ローカルに追加されたクラスタから表示されます。リンクモード環境では、クラスタがローカルに追加されているvSphere Web Clientにログインして、そのクラスタのQoSSIOCイベントを表示します。

手順

NetApp Element Configuration > QoSSIOC Eventsの順に選択します。

QoSSIOC Eventsページにイベントのリストが表示されます。

関連タスク

[QoSSIOCの設定](#) (40ページ)

NetApp Element ConfigurationネットアップElementを使用して、Element Management Node (MNode) の QoSSIOC 設定を構成できます。QoSSIOCサービスを有効にして使用するには、この設定が必要です。

[QoSSIOC自動化の有効化](#) (80ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントを使用して、QoSSIOCの自動化を有効にし、仮想マシンディスク (VMDK) のパフォーマンス レベルをカスタマイズすることができます。

QoSSIOCイベントの詳細

NetApp Element Configuration拡張ポイントの[QoSSIOC Events]ページで、各クラスタのQoSSIOCイベントに関する情報を確認できます。

Date

QoSSIOCイベントの日時。

Datastore Name

ユーザが定義したデータストア名。

Cluster IP

イベントの発生元であるデータストアが含まれているクラスタのIPアドレス。

Volume ID

システムによって生成された関連するボリュームのID。

Min IOPs

ボリュームのQoS設定 - 現在の最小IOPS。

Max IOPs

ボリュームのQoS設定 - 現在の最大IOPS。

Burst IOPs

ボリュームのQoS設定 - 現在のバーストIOPS。

Burst Time

バーストが許可される期間。

プラグインの製品情報

NetApp Element vCenter Plug-inのバージョン、ビルド番号、およびIPアドレスに関する全般的な情報は、NetApp Element Configuration拡張ポイントから確認できます。[About]ページには、サービスバンドルをダウンロードするオプションのほか、両方の拡張ポイントから利用できる[Getting Started]ページを非表示にしたり再表示したりするオプションがあります。

レポート作成

[Reporting]タブには、クラスタのコンポーネントに関する情報とクラスタの利用状況の概要が表示されます。[Reporting]ページを開くと、クラスタのコンポーネントとリソースの概要が表示されます。

レポート概要

Overview Reporting NetApp Element Management 拡張ポイントのタブのページに、選択したクラスタの全体的な容量、効率性、パフォーマンスなどの高レベルのクラスタ情報を表示できます。

Cluster Capacity

ブロックストレージ、メタデータ、およびプロビジョニング スペース用の残りの容量。しきい値情報を確認するには、進捗状況バーの上にポインタを移動してください。

Cluster Information

クラスタに固有の情報。クラスタの名前、クラスタで実行されているNetApp Elementソフトウェアのバージョン、MVIPアドレスとSVIPアドレス、クラスタのノード、4k IOPS、ボリューム、セッションの数などの情報が含まれます。

- **Cluster Name** : クラスタの名前。
- **Storage IP (SVIP)** : Storage Virtual IP Address (SVIP)。
- **Management IP (MVIP)** : Management Virtual IP Address (MVIP)。
- **SVIP VLAN Tag** : マスター SVIP アドレスの VLAN ID 。
- **MVIP VLAN Tag** : マスター MVIP アドレスの VLAN ID 。
- **Node Count** : クラスタ内のアクティブノードの数。
- **Cluster 4K IOPS** : クラスタが 1 秒間に読み書きできる 4096 (4K) ブロックの数。
- **Element OS Version** : NetApp Elementソフトウェアクラスタで実行されている NetApp Element ソフトウェアのバージョン。
- **Volume Count** : クラスタ上のボリュームの総数 (仮想ボリュームを除く)。
- **Virtual Volume Count** : クラスタ上の仮想ボリュームの合計数。
- **iSCSI Sessions** : クラスタに接続されている iSCSI セッション。
- **Fibre Channel Sessions** : クラスタに接続されているファイバチャネルセッション。

Cluster Efficiency

シンプロビジョニング、重複排除、および圧縮を考慮した、システム全体の容量に対する使用率。クラスタでの効率化は、シンプロビジョニング、重複排除、および圧縮を使用しない従来のストレージデバイスにおける容量使用率と比較して計算されます。

保護ドメイン

クラスタの保護ドメイン監視の概要。



注意 : 保護ドメイン機能は、2ノードクラス
とは互換性がありません。

- **Protection Domains Monitoring Level** : ユーザが選択した保護ドメインの耐障害性レベル。指定できる値はChassis、またはNodeです。緑は、クラスタが選択し

た監視レベルに対応していることを示します。赤は、クラスタが選択した監視レベルに対応しておらず、対処が必要なことを示します。

- **Remaining Block Capacity**：選択した耐障害性レベルを維持しながら使用できる残りのブロック容量を示します。
- **Metadata Capacity**：障害から回復するために十分なメタデータ容量があるかどうかを示します。また、データの可用性を維持します。**Normal**（緑色）を選択した監視レベルを維持するためにクラスタに十分なメタデータがあることを示します。**Full**（赤）クラスタが選択した監視レベルに対応できなくなり、対処が必要であることを示します。

Provisioned IOPS

クラスタ上のボリュームのIOPSについてのオーバープロビジョニングの状況の概要。[Provisioned IOPS]の値は、クラスタ上のすべてのボリュームのMin IOPS、Max IOPS、およびBurst IOPSのそれぞれを合計し、クラスタのMax IOPSで除算して求められます。

注：たとえば、クラスタに4つのボリューム（それぞれMin IOPSが500、Max IOPSが15,000、Burst IOPSが15,000）がある場合、Min IOPSの合計は2,000、Max IOPSの合計は60,000、Burst IOPSの合計は60,000になります。クラスタのMax IOPSが50,000の場合、計算は次のようにになります。

- Min IOPS : $2000/50000 = 0.04x$
- Max IOPS : $60000/50000 = 1.20x$
- Burst IOPS : $60000/50000 = 1.20x$

1.00xは、プロビジョニングされたIOPSがクラスタのIOPSと同じとなるベースラインです。

Cluster Health

クラスタのハードウェア、容量、およびセキュリティについての健全性。健全性は次のように色分けされます。

- 緑：正常
- 黄：重大
- 赤：エラー

Cluster Input/Output

クラスタで実行中のI/O。値は、前回のI/O測定値と現在のI/O測定値から計算されます。グラフに表示される測定値を次に示します。

- **Total**：システムで発生する読み取り IOPS と書き込み IOPS の組み合わせ。
- **Read**：発生している読み取り IOPS の数。
- **Write**：書き込み IOPS の数。

Cluster Throughput

クラスタ上の読み取り、書き込み、および合計の帯域幅アクティビティ。

- **Total**：クラスタ内の読み取りアクティビティと書き込みアクティビティの両方に使用されている合計 MB/ 秒。
- **Read**：クラスタの読み取りアクティビティ（MB/ 秒）。
- **Write**：クラスタの書き込みアクティビティ（MB/ 秒）。

Performance Utilization

消費されているクラスタIOPSの割合。たとえば、25万IOPSのクラスタが10万IOPSで実行されている場合、消費率は40%です。

イベント ログの表示

選択したクラスタで実行された処理のイベント ログと、発生する可能性があるクラスタ障害を確認できます。ほとんどのエラーはシステムで自動的に解決されます。システムで解決できないエラーについては、手動での対応が必要になる場合があります。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Reporting]を選択します。

注 : 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタを選択する必要があります。

2. [Event Log]をクリックします。
クラスタのすべてのイベントの一覧が表示されます。
3. 確認するイベントを選択します。
4. [Details]を選択します。
クラスタイベントの詳細なメッセージが表示されます。

イベント ログ

NetApp Element Management拡張ポイントの[Reporting]タブにある[Event Log]ページで、システムで検出されたイベントに関する情報を確認できます。

Event ID

各イベントに関連付けられた一意のID。

Event Type

ログに記録されているイベントのタイプ（APIイベントやクローンイベントなど）。

Message

イベントに関連するメッセージ。

Service ID

イベントを報告したサービスのID（該当する場合）。障害がサービスに関連付けられていない場合、この値は0（ゼロ）です。

Node

イベントを報告したノードのID（該当する場合）。

Drive ID

イベントを報告したドライブのID（該当する場合）。

Event Time

イベントが発生した日時。

イベント タイプ

システムからは複数のタイプのイベントが報告されます。各イベントは、システムが完了した処理を表しています。イベントには、日常的に発生するイベント、正常なイベント、または管理者による対応が必要なイベントがあります。[Event Log]ページの[Event Type]列は、システムのどの部分でイベントが発生したかを示しています。

注 : 読み取り専用のAPIコマンドはイベント ログに記録されません。

イベント ログに表示されるイベントのタイプは次のとおりです。

apiEvent

ユーザがAPIまたはWeb UIから開始した、設定を変更するイベント。

binAssignmentsEvent

データ ビンの割り当てに関するイベント。ビンは簡単に言うとデータを保持するコンテナであり、クラスタ全体にマップされます。

binSyncEvent

ブロック サービス間でのデータの再割り当てに関するシステム イベント。

bsCheckEvent

ブロック サービス チェックに関するシステム イベント。

bsKillEvent

ブロック サービスの終了に関するシステム イベント。

bulkOpEvent

ボリューム全体に対して実行された処理（バックアップ、リストア、Snapshot、クローンなど）に関するイベント。

cloneEvent

ボリューム クローニングに関するイベント。

clusterMasterEvent

クラスタの初期化時または設定変更（ノードの追加や削除など）時に発生するイベント。

AssumeEvent

ディスク上の無効なデータチェックサムに関するイベント。

dataEvent

データの読み取りと書き込みに関するイベント。

dbEvent

クラスタ内のアンサンブル ノードによって管理されているグローバルデータベースに関するイベント。

driveEvent

ドライブの処理に関するイベント。

encryptionAtRestEvent

クラスタでの暗号化プロセスに関するイベント。

ensembleEvent

アンサンブル内のノード数の増減に関するイベント。

fibreChannelEvent

ノードの設定と接続に関するイベント。

gcEvent

ブロック ドライブ上のストレージを再利用するために60分ごとに実行されるプロセスに関するイベント。このプロセスはガベージ コレクションとも呼ばれます。

ieEvent

内部システム エラー。

installEvent

ソフトウェアの自動インストールイベント。保留状態のノードにソフトウェアが自動的にインストールされています。

iSCSIEvent

システムでのiSCSIの問題に関するイベント。

limitEvent

アカウントまたはクラスタ内で許可されているボリュームまたは仮想ボリュームの最大数に近づいていることを示すイベント。

networkEvent

仮想ネットワークのステータスに関連するイベント。

platformHardwareEvent

ハードウェアデバイスで検出された問題に関連するイベント。

remoteClusterEvent

リモート クラスタペアリングに関連するイベント。

schedulerEvent

スケジュールされたSnapshotに関連するイベント。

serviceEvent

システム サービスのステータスに関連するイベント。

sliceEvent

スライス サーバに関連するイベント（メタデータ ドライブまたはボリュームの削除など）。

snmpTrapEvent

SNMP トラップに関連するイベント。

statEvent

システムの統計に関連するイベント。

tsEvent

システム転送サービスに関連するイベント。

unexpectedException

予期しないシステム例外に関連するイベント。

UREEvent

ストレージデバイスからの読み取り中に発生する回復不能な読み取りエラーに関連するイベント。

vasaProviderEvent

vSphere APIs for Storage Awareness (VASA) Providerに関連するイベント。

アラート

アラートはクラスタの障害またはエラーであり、発生時に報告されます。アラートには、情報、警告、エラーがあり、クラスタの稼働状況を表すインジケーターとして利用できます。ほとんどのエラーは自動的に解決しますが、一部のエラーでは手動での対応が必要です。

NetApp Element Management拡張ポイントの[Reporting]タブにある[Alerts]ページで、個々のシステムアラートに関する情報を確認できます。

アラートが解決されると、そのアラートに関するすべての情報（解決された日付を含む）が[Resolved]ビューに移動します。

このページに表示される列は次のとおりです。

ID

クラスタアラートの一意のID。

Severity

- `warning` : 近々対応が必要になる可能性があるが、深刻ではない問題です。システムのアップグレードは引き続き可能です。
- `error` : パフォーマンスが低下したり高可用性（HA）が失われたりする可能性のある障害です。通常、サービスへのそれ以外の影響はありません。
- `critical` : サービスに影響する深刻な障害です。システムは、API要求およびクライアントI/O要求を処理できません。この状態で運用を続けると、データが失われる可能性があります。
- `bestPractice` : 推奨されるシステム構成のベストプラクティスが使用されていません。

Type

- `node` : ノード全体に影響する障害。
- `drive` : 個々のドライブに影響する障害。
- `cluster` : クラスタ全体に影響する障害。
- `service` : クラスタ上のサービスに影響する障害。
- `volume` : クラスタ上のボリュームに影響する障害。

Node

このエラーに関連するノードのノードID。エラーのタイプが`node`と`drive`の場合に表示され、それ以外の場合は「-」(ダッシュ)が表示されます。

Drive ID

このエラーに関連するドライブのドライブID。エラーのタイプが`drive`の場合に表示され、それ以外の場合は「-」(ダッシュ)が表示されます。

Error Code

エラーの原因を示すコード。

Details

エラーの詳細な説明。

Time

この項目は[Active filter]ビューにのみ表示されます。エラーがログに記録された日時です。

Resolution Date

この項目は[Resolved filter]ビューにのみ表示されます。エラーが解決された日時です。

アラート エラー コード

[Alerts]ページには、システムから報告されたエラー コードと各アラートが表示されます。エラー コードは、アラートが発生したシステムのコンポーネントおよびアラートが生成された理由を判断する場合に役立ちます。

以下は、各種システム アラートのリストです。

AuthenticationServiceDefault

1つ以上のクラスタノードの認証サービスが正常に機能していません。

ネットアップ サポートにお問い合わせください。

availableVirtualNetworkIPAddressesLow

IPアドレス ブロック内の仮想ネットワークアドレスの数が不足しています。

この問題を解決するには、仮想ネットワークアドレスのブロックにIPアドレスを追加してください。

blockClusterFull

単一ノードの損失をサポートするのに十分なブロックストレージの空き容量がありません。GetClusterFullThreshold クラスタのフルネスレベルの詳細については、API メソッドを参照してください。このクラスタ障害は、次のいずれかの状態を示します。

- ステージ 3 低（警告）：ユーザ定義のしきい値を超えるました。クラスタ全体の設定を調整するか、ノードを追加します。
- ステージ 4 クリティカル（エラー）：1 ノードの障害から回復するのに十分なスペースがありません。ボリューム、スナップショット、クローンの作成は許可されていません。
- ステージ 5 が完了（クリティカル）1。書き込みや新しい iSCSI 接続は許可されません。現在の iSCSI 接続は維持されます。クラスタに追加される容量が増えるまで、書き込みは失敗します。

この問題を解決するには、ボリュームをページ（削除）するか、ストレージ クラスタにストレージノードをもう1つ追加してください。

ブロックがデグレードされました

障害が発生したため、ブロックデータは完全にレプリケートされなくなりました。

Severity	説明
Error	使用できるのは、ブロックデータ全体のコピーが1つだけです。
Critical	ブロックデータの完全なコピーは使用できません。

この障害を解決するには、オフラインノードまたはブロックサービスをリストアするか、ネットアップのサポートにお問い合わせください。

blockServiceTooFull

ブロックサービスが大量の容量を使用しています。

この問題を解決するには、プロビジョニング済み容量を追加してください。

blockServiceUnhealthy

ブロックサービスが異常として検出されました：

- 重大度 = 警告：アクションは実行されません。この警告期間は、ctimeUntilBsisKilleDMSEC=330000 ミリ秒で期限切れになります。
- 重大度 = エラー：システムはデータを自動的に廃棄し、他の正常なドライブにデータを再レプリケートしています。
- 重大度 = 重大：複数のノードで、レプリケーションカウント以上のブロックサービスが失敗しました（2倍の Helix の場合は 2）。データが利用できず、ビンの同期が完了しません。

ネットワーク接続の問題とハードウェアエラーを確認します。特定のハードウェアコンポーネントに障害が発生した場合は、他の障害が発生します。この障害は、ブロックサービスがアクセス可能になったとき、またはサービスが廃棄されたときにクリアされます。

clockSkewExceedsFaultThreshold

クラスタマスターと、トーカンを提示しているノード間の時間スキューが、推奨しきい値を超えてます。ストレージクラスタは、ノード間の時間のずれを自動的に修正できません。

この問題を解決するには、インストール時のデフォルトではなく、使用するネットワーク内のNTPサーバを使用してください。内部NTPサーバを使用している場合は、ネットアップサポートにお問い合わせください。

clusterCannotSync

スペース不足です。オフラインのブロックストレージドライブ上のデータをアクティブな状態のドライブに同期することはできません。

この問題を解決するには、ストレージを追加してください。

clusterFull

ストレージクラスタ内の空きストレージスペースが不足しています。

この問題を解決するには、ストレージを追加してください。

clusterIOPSAreOverProvisioned

クラスタのIOPSがオーバープロビジョニングされています。最小QoSのIOPSの合計が、クラスタの想定IOPSを上回っています。すべてのボリュームで同時に最小QoSを維持することができません。

この問題を解決するには、ボリュームの最小QoS IOPS設定を低くします。

disableDriveSecurityFailed

クラスタはドライブのセキュリティ（保存中のデータの暗号化）を有効にするようには設定されていませんが、少なくとも1つのドライブでドライブのセキュリティが有効になっているため、そのドライブでドライブのセキュリティを無効にできませんでした。この障害の重大度は「Warning」です。

この問題を解決するには、ドライブのセキュリティを無効にできなかった理由について障害の詳細を確認してください。次の理由が考えられます。

- 暗号化キーを取得できなかった場合は、キーまたは外部キー サーバへのアクセスに関する問題を調査してください。
- ドライブで無効化処理に失敗した場合は、間違ったキーが取得されていないかどうかを確認してください。

どちらでもない場合は、ドライブの交換が必要となる可能性があります。

正しい認証キーを指定してもセキュリティが無効にならないドライブに対して、リカバリを試みることができます。この処理を実行するには、ドライブの状態をAvailableに変更してシステムから取り外し、ドライブで完全消去を実行してからActiveに戻します。

disconnectedClusterPair

クラスタペアが切断されているか、正しく設定されていません。クラスタ間のネットワーク接続を確認します。

disconnectedRemoteNode

リモートノードが切断されているか、正しく設定されていません。ノード間のネットワーク接続を確認します。

disconnectedSnapMirrorEndpoint

リモートSnapMirrorエンドポイントが切断されているか、正しく設定されていません。クラスタとリモートのSnapMirrorEndpoint間のネットワーク接続を確認します。

driveAvailable

クラスタ内に利用可能なドライブがあります。通常は、すべてのクラスタにすべてのドライブが追加されていて、利用可能な状態のドライブはないはずです。この問題が予期せずに発生する場合は、ネットアップ サポートにお問い合わせください。

この問題を解決するには、利用可能なドライブをすべてストレージ クラスタに追加してください。

driveFailed

1つ以上のドライブに障害が発生すると、クラスタはこの障害を返します。これは、次のいずれかの状態を示します。

- ドライブマネージャがドライブにアクセスできません。
- スライスまたはロックサービスが何度も失敗しました。ドライブの読み取りまたは書き込みに失敗した可能性があり、再起動できません。
- ドライブがありません。
- ノードのマスター サービスにアクセスできません（ノード内のすべてのドライブに障害が発生していると見なされます）。
- ドライブがロックされており、ドライブの認証キーを取得できません。
- ドライブがロックされ、アンロック操作が失敗する。

この問題を解決するには：

- ノードのネットワーク接続を確認します。
- ドライブを交換します。
- 認証キーが使用可能であることを確認します。

driveWearFault

ドライブの残量がしきい値を下回っていますが、まだ機能しています。この障害には2つの重大度レベルがあります。重大度と警告：

- シリアル付きドライブ：スロットに <serial number> : <node slot> <drive slot> には重大な摩耗レベルがあります。
- シリアル付きドライブ：スロット : <node slot> <drive slot> には、消耗品の少ない予約があります。

この問題を解決するには、ドライブをすぐに交換してください。

duplicateClusterMasterCandidates

ストレージ クラスタ マスターの候補が複数検出されました。ネットアップ サポートにお問い合わせください。

enableDriveSecurityFailed

クラスタはドライブのセキュリティ（保存中のデータの暗号化）を要求するように設定されていますが、少なくとも1つのドライブでセキュリティを有効にできませんでした。この障害の重大度は「Warning」です。

この問題を解決するには、ドライブのセキュリティを有効にできなかった理由について障害の詳細を確認してください。次の理由が考えられます。

- 暗号化キーを取得できなかった場合は、キーまたは外部キー サーバへのアクセスに関する問題を調査してください。
- ドライブで有効化処理に失敗した場合は、間違ったキーが取得されていないかどうかを確認してください。

どちらでもない場合は、ドライブの交換が必要となる可能性があります。

正しい認証キーを指定してもセキュリティが有効にならないドライブに対して、リカバリを試みることができます。この処理を実行するには、ドライブの状態を

Availableに変更してシステムから取り外し、ドライブで完全消去を実行してからActiveに戻します。

ensembleDegraded

1つ以上のアンサンブル ノードへのネットワーク接続または電源が失われています。

この問題を解決するには、ネットワーク接続または電源を復旧してください。

exception

想定外の障害が報告されました。この障害は障害キューから自動的に消去されません。ネットアップ サポートにお問い合わせください。

failedSpaceTooFull

ブロック サービスがデータ書き込み要求に応答していません。スライス サービスが失敗した書き込みを格納するための容量が足りなくなります。

この問題を解決するには、書き込みを正常に処理し、失敗用の容量がスライス サービスからフラッシュされるように、ブロック サービス機能をリストアしてください。

fanSensor

ファン センサーで障害が発生しているか、ファン センサーが見つかりません。

この障害を解決するには、障害が発生したハードウェアを交換します。

fibreChannelAccessDegraded

Fibre Channel ノードが自身のストレージIPでストレージ クラスタ内の他のノードに一定期間応答していません。この状態になると、ノードは応答していないと判断され、クラスタ障害が生成されます。ネットワーク接続を確認します。

fibreChannelAccessUnavailable

すべてのFibre Channel ノードが応答していません。ノードIDが表示されます。ネットワーク接続を確認します。

FibreChannelActiveXL

IXL Nexus の数は、ファイバチャネルノードごとにサポートされるアクティブセッション数の上限である 8000 に近づいています。

- ベストプラクティスの制限は 5500 です。
- 警告制限は 7500 です。
- 最大制限（非強制）は 8192 です。

この障害を解決するには、ベストプラクティスの制限である 5500 を下回る IXL Nexus の数を減らします。

fibreChannelConfig

このクラスタ障害は、次のいずれかの状態を示します。

- PCIスロットに想定外のFibre Channelポートが接続されています。
- 想定外のFibre Channel HBAモデルが使用されています。
- Fibre Channel HBAのファームウェアに問題があります。
- Fibre Channelポートがオンラインではありません。
- Fibre Channelパススルーフィルターの設定中に永続的な問題が発生しました。

ネットアップ サポートにお問い合わせください。

FibreChannelStaticiXL

iXL Nexus の数は、ファイバチャネルノードごとにサポートされる静的セッション数の上限である 16000 に近づいています。

- ベストプラクティスの制限は 11000 です。
- 警告制限は 15000 です。
- 最大制限（強制）は 16384 です。

この障害を解決するには、iXL Nexus の数をベストプラクティスの上限である 11000 以下に減らしてください。

fileSystemCapacityLow

いずれかのファイルシステムでスペースが不足しています。

この問題を解決するには、ファイルシステムに容量を追加してください。

FipsDriveMismatched (FipsDriveMis)

FIPS 対応ストレージ ノードに FIPS 非対応ドライブが挿入されているか、FIPS 非対応ストレージ ノードに FIPS 対応ドライブが挿入されています。ノードごとにエラーが生成され、影響を受けるすべてのドライブが表示されます。

この問題を解決するには、問題のドライブを取り外すか、または交換します。

fipsDrivesOutOfCompliance

FIPS ドライブ機能を有効にしたあとに保存データの暗号化を無効にしたことが検出されました。このエラーは、FIPS ドライブ機能が有効になっていて、FIPS 非対応のドライブまたはノードがストレージ クラスタに配置されている場合にも生成されます。

この問題を解決するには、保存データの暗号化を有効にするか、FIPS 非対応のハードウェアをストレージ クラスタから取り外してください。

fipsSelfTestFailure

FIPS サブシステムのセルフ テスト中に障害が検出されました。

ネットアップ サポートにお問い合わせください。

hardwareConfigMismatch

このクラスタ障害は、次のいずれかの状態を示します。

- 構成がノードの定義と一致しません。
- このタイプのノードに対して正しくないドライブ サイズが使用されています。
- サポート対象外のドライブが検出されました。考えられる理由は、インストールされているエレメントのバージョンがこのドライブを認識しないことです。このノードの要素ソフトウェアを更新することを推奨します。
- ドライブ ファームウェアが一致しません。
- ドライブの暗号化対応がノードと一致しません。

ネットアップ サポートにお問い合わせください。

IDPcertificateExpiration : 有効期限

クラスタのサードパーティ ID プロバイダ (IdP) で使用するサービスプロバイダの SSL 証明書が期限切れに近づいているか、すでに期限切れになっています。この問題では、緊急性に基づいて次の重大度が使用されます。

Severity	説明
Warning	証明書は30日以内に期限切れになります。

Severity	説明
Error	証明書は7日以内に期限切れになります。
Critical	証明書は3日以内に期限切れになるか、すでに期限切れになっています。

この問題を解決するには、SSL証明書の有効期限が切れる前に更新します。
UpdateIdpConfiguration更新されたSSL証明書を提供するには、APIメソッドで
refreshCertificateExpirationTime = trueを使用します。

inconsistentBondModes

VLANデバイスのボンディングモードが見つかりません。想定されるボンディングモードと使用中のボンディングモードが表示されます。

inconsistentInterfaceConfiguration

インターフェイスの設定が一貫していません。

この問題を解決するには、ストレージクラスタ内のすべてのノードインターフェイスの設定と同じにしてください。

inconsistentMtus

このクラスタ障害は、次のいずれかの状態を示します。

- Bond1Gの不一致：Bond1Gインターフェイス間で異なるMTUが設定されています。
- Bond10Gの不一致：Bond10Gインターフェイス間で異なるMTUが設定されています。

該当するノードと設定されているMTU値が表示されます。

inconsistentRoutingRules

このインターフェイスのルーティングルールが一貫していません。

inconsistentSubnetMasks

VLANデバイスのネットワークマスクが、内部的に記録されたVLANのネットワークマスクと一致しません。想定されるネットワークマスクと使用中のネットワークマスクが表示されます。

incorrectBondPortCount

ボンドポートの数が正しくありません。

invalidConfiguredFibreChannelNodeCount

想定される2つのFibre Channelノード接続のいずれかがデグレード状態です。この問題は、Fibre Channelノードが1つしか接続されていない場合に発生します。

この問題を解決するには、クラスタのネットワークの接続状態とケーブル配線を確認するとともに、停止しているサービスがないか確認してください。ネットワークやサービスに問題がない場合は、ネットアップサポートに連絡してFibre Channelノードを交換してください。

irqBalanceFailed

割り込み処理の負荷分散中に例外が発生しました。

ネットアップサポートにお問い合わせください。

kmipCertificateFault

- ルート認証局(CA)証明書の有効期限が近づいています。

この問題を解決するには、有効期限まで30日以上ある新しい証明書をルートCAから取得し、`ModifyKeyServerKmip`を使用してルートCA証明書を更新します。

- クライアント証明書の有効期限が近づいています。

この問題を解決するには、`GetClientCertificateSigningRequest`を使用して新しいCSRを作成し、新しい有効期限まで30日以上あることを確認して署名し、`ModifyKeyServerKmip`を使用して期限が切れるKMIPクライアント証明書を新しい証明書に置き換えます。

- ルート認証局（CA）証明書の有効期限が切れています。

この問題を解決するには、有効期限まで30日以上ある新しい証明書をルートCAから取得し、`ModifyKeyServerKmip`を使用してルートCA証明書を更新します。

- クライアント証明書の有効期限が切れています。

この問題を解決するには、`GetClientCertificateSigningRequest`を使用して新しいCSRを作成し、新しい有効期限まで30日以上あることを確認して署名し、`ModifyKeyServerKmip`を使用して期限切れのKMIPクライアント証明書を新しい証明書に置き換えます。

- ルート認証局（CA）証明書のエラーです。

この問題を解決するには、正しい証明書が提供されていることを確認し、必要に応じてルートCAから証明書を再取得します。`ModifyKeyServerKmip`を使用して正しいKMIPクライアント証明書をインストールします。

- クライアント証明書のエラーです。

この問題を解決するには、正しいKMIPクライアント証明書がインストールされていることを確認します。クライアント証明書のルートCAがEKSにインストールされている必要があります。`ModifyKeyServerKmip`を使用して正しいKMIPクライアント証明書をインストールします。

kmipServerFault

- 接続エラー

この問題を解決するには、外部キー サーバが稼働しており、ネットワーク経由でアクセスできることを確認します。`TestKeyServerKmip`と`TestKeyProviderKmip`を使用して、接続をテストします。

- 認証エラー

この問題を解決するには、正しいルートCAおよびKMIPクライアント証明書が使用されていることと、秘密鍵とKMIPクライアント証明書が一致することを確認します。

- サーバ エラー

この問題を解決するには、エラーの詳細を確認します。エラーによっては、外部キー サーバでのトラブルシューティングが必要になる場合があります。

MemoryEccThreshold

修正可能な ECC エラーまたは修正不可能な ECC エラーが多数検出されました。重大度が `Error` の場合、DIMM の障害が原因である可能性があります。

ネットアップ サポートにお問い合わせください。

memoryUsageThreshold

メモリ使用量が正常値を上回っています。

ネットアップ サポートにお問い合わせください。

metadataClusterFull

1つのノードの損失をサポートするための十分な空きメタデータストレージスペースがありません。GetClusterFullThresholdクラスタのフルネスレベルの詳細については、API メソッドを参照してください。このクラスタ障害は、次のいずれかの状態を示します。

- ステージ 3 低（警告）：ユーザ定義のしきい値を超えるました。クラスタ全体の設定を調整するか、ノードを追加します。
- ステージ 4 クリティカル（エラー）：1ノードの障害から回復するのに十分なスペースがありません。ボリューム、スナップショット、クローンの作成は許可されていません。
- ステージ 5 が完了（クリティカル）1。書き込みや新しい iSCSI 接続は許可されません。現在の iSCSI 接続は維持されます。クラスタに追加される容量が増えるまで、書き込みは失敗します。データを消去または削除するか、ノードを追加します。

この問題を解決するには、ボリュームをページ（削除）するか、ストレージ クラスタにストレージ ノードをもう1つ追加してください。

mtuCheckFailure

ネットワークデバイスに適切なMTUサイズが設定されていません。

この問題を解決するには、すべてのネットワークインターフェイスとスイッチポートでジャンボフレームが設定されている（MTUが最大9,000バイト）ことを確認してください。

networkConfig

このクラスタ障害は、次のいずれかの状態を示します。

- 想定されるインターフェイスが存在しません。
- インターフェイスが重複しています。
- 設定済みのインターフェイスが停止しています。
- ネットワークの再起動が必要です。

ネットアップ サポートにお問い合わせください。

noAvailableVirtualNetworkIPAddresses

IPアドレスのブロックに利用可能な仮想ネットワークアドレスがありません。クラスタにこれ以上ストレージ ノードを追加できません。

この問題を解決するには、仮想ネットワークアドレスのブロックにIPアドレスを追加してください。

NodeHardwareFault（ネットワークインターフェイス <name> がダウンしているか、ケーブルが接続されていません）

ネットワークインターフェイスがダウンしているか、ケーブルが外れています。

この障害を解決するには、ノードのネットワーク接続を確認します。

nodeHardwareFault（ドライブ暗号化対応状態が不一致ノードの暗号化対応状態がスロット<ノードスロット><ドライブスロット>のドライブ）

ドライブは、そのドライブがインストールされているストレージノードと暗号化機能が一致しません。

nodeHardwareFault（このノードタイプのスロット<ノードスロット><ドライブスロット>にあるドライブの<ドライブタイプ> ドライブサイズ<実際のサイズ> が正しくありません。<expected size>）

ストレージノードに、このノードのサイズが正しくないドライブが含まれています。

NodeHardwareFault (サポートされていないドライブがスロット<ノードスロット><ドライブスロット>で検出されました。ドライブの統計情報とヘルス情報は使用できません)

ストレージノードにサポートされていないドライブが含まれている。

NodeHardwareFault (スロット<ノードスロット>のドライブはファームウェアバージョン<予想されるバージョン>を使用する必要がありますが、サポートされていないバージョン<実際のバージョン>を使用しています)

ストレージノードに、サポートされていないファームウェアバージョンを実行しているドライブが含まれています。

nodeOffline

Elementソフトウェアが指定されたノードと通信できません。ネットワーク接続を確認します。

notUsingLACPBondMode

LACPボンディング モードが設定されていません。

この問題を解決するには、ストレージノードの導入時にLACPボンディングを使用してください。LACPを有効にして正しく設定していないと、クライアントでパフォーマンスの問題が発生する可能性があります。

ntpServerUnreachable

ストレージクラスタが指定されたNTPサーバと通信できません。

NTPサーバ、ネットワーク、およびファイアウォールの設定を確認してください。

ntpTimeNotInSync

ストレージクラスタと指定されたNTPサーバで時刻に大きな差があります。ストレージクラスタはこの時間差を自動的に修正できません。

この問題を解決するには、インストール時のデフォルトではなく、使用するネットワーク内のNTPサーバを使用してください。内部のNTPサーバを使用しても問題が解決しない場合は、ネットアップサポートにお問い合わせください。

nvramDeviceStatus

NVRAMデバイスにエラーがあるか、障害が発生しようとしているか、または障害が発生しました。この問題では、緊急性に基づいて次の重大度が使用されます。

Severity	説明
Warning	ハードウェアによって警告が検出されました。この状態は、過熱警告などの一時的な状態である可能性があります。
Error	ハードウェアによってエラーステータスが検出されました。クラスタマスターは、スライスドライブを操作から削除しようとします。セカンダリスライスサービスを使用できない場合、ドライブは削除されません。
Critical	ハードウェアによって重大なステータスが検出されました。クラスタマスターは、スライスドライブを操作から削除しようとします。セカンダリスライスサービスを使用できない場合、ドライブは削除されません。

この問題を解決するには、故障したハードウェアを交換します。

powerSupplyError

このクラスタ障害は、次のいずれかの状態を示します。

- 電源装置がありません。
- 電源装置で障害が発生しました。
- 電源装置の入力が見つからないか、範囲外です。

冗長な電源がすべてのノードに供給されていることを確認してください。ネットアップサポートにお問い合わせください。

provisionedSpaceTooFull

クラスタのプロビジョニング済み容量がいっぱいです。

この問題を解決するには、プロビジョニング済みスペースを追加するか、またはボリュームを削除およびパージしてください。

remoteRepAsyncDelayExceeded

レプリケーションに設定されている非同期遅延を超えるました。クラスタ間のネットワーク接続を確認します。

remoteRepClusterFull

ターゲットストレージクラスタがいっぱいのため、ボリュームがリモートレプリケーションを停止しました。

この問題を解決するには、ターゲットストレージクラスタのスペースを解放してください。

remoteRepSnapshotClusterFull

ターゲットストレージクラスタがいっぱいのため、ボリュームがSnapshotのリモートレプリケーションを停止しました。

この問題を解決するには、ターゲットストレージクラスタのスペースを解放してください。

remoteRepSnapshotsExceededLimit

ターゲットストレージクラスタのボリュームがSnapshotの最大数を超えたため、ボリュームがSnapshotのリモートレプリケーションを停止しました。

この障害を解決するには、ターゲットストレージクラスタのスナップショット制限を増やします。

scheduleActionError

スケジュールされたアクティビティが実行されましたが、失敗しました。

スケジュールされたアクティビティが再び実行されて成功するか、アクティビティが削除されるか、または停止後に再開されれば、障害はクリアされます。

sensorReadingFailed

ベースボード管理コントローラ(BMC)のセルフテストが失敗したか、センサーがBMCと通信できませんでした。

ネットアップサポートにお問い合わせください。

serviceNotRunning

要求されたサービスが実行されていません。

ネットアップサポートにお問い合わせください。

sliceServiceTooFull

スライスサービスに割り当てられたプロビジョニング済み容量が少なすぎます。

この問題を解決するには、プロビジョニング済み容量を追加してください。

sliceServiceUnhealthy

スライス サービスが正常な状態でないことをシステムが検出し、サービスを自動的に停止しています。

- 重大度 = 警告 : アクションは実行されません。この警告期間は 6 分で終了します。
- 重大度 = エラー : システムはデータを自動的に廃棄し、他の正常なドライブにデータを再レプリケートしています。

ネットワーク接続の問題とハードウェアエラーを確認します。特定のハードウェアコンポーネントに障害が発生した場合は、他の障害が発生します。この障害は、スライスサービスがアクセス可能になったとき、またはサービスが廃棄されたときにクリアされます。

sshEnabled

ストレージクラスタ内の1つ以上のノードでSSHサービスが有効になっています。

この問題を解決するには、該当するノードのSSHサービスを無効にするか、ネットアップ サポートにお問い合わせください。

sslCertificateExpiration

このノードに関連付けられている SSL 証明書の有効期限が近づいているか、有効期限が切れています。この問題では、緊急性に基づいて次の重大度が使用されます。

Severity	説明
Warning	証明書は30日以内に期限切れになります。
Error	証明書は7日以内に期限切れになります。
Critical	証明書は3日以内に期限切れになるか、すでに期限切れになっています。

この問題を解決するには、SSL証明書を更新してください。必要であれば、ネットアップ サポートにお問い合わせください。

strandedCapacity

1つのノードがストレージクラスタの容量の半分以上を占めている。

データの冗長性を維持するために、システムは最大ノードの容量を削減し、ブロック容量の一部を使用しないようにします（使用しません）。

この障害を解決するには、既存のストレージノードにドライブを追加するか、クラスタにストレージノードを追加します。

tempSensor

温度センサーが正常よりも高い温度を報告しています。この問題は、powerSupplyErrorまたはfanSensorとともに発生する可能性があります。

ストレージクラスタの近くに通気を妨げる障害物がないかどうかを確認してください。必要であれば、ネットアップ サポートにお問い合わせください。

アップグレード

アップグレードが24時間以上実行中です。

この問題を解決するには、アップグレードを再開するか、ネットアップ サポートにお問い合わせください。

unresponsiveService

サービスが応答しなくなりました。

ネットアップ サポートにお問い合わせください。

virtualNetworkConfig

このクラスタ障害は、次のいずれかの状態を示します。

- ・インターフェイスがありません。
- ・インターフェイス上のネームスペースが正しくありません。
- ・ネットマスクが正しくありません。
- ・IPアドレスが正しくありません。
- ・インターフェイスが稼働していません。
- ・ノード上に不要なインターフェイスがあります。

ネットアップ サポートにお問い合わせください。

volumeDegraded

セカンダリ ボリュームのレプリケートと同期が終了していません。このメッセージは、同期が完了するとクリアされます。

volumesOffline

ストレージ クラスタ内の1つ以上のボリュームがオフラインです。

VolumeDegraded 障害も発生します。

ネットアップ サポートにお問い合わせください。

関連情報

[NetApp Support](#)

iSCSIセッション

NetApp Element Management拡張ポイントの[Reporting]タブにある[iSCSI Sessions]ページでは、選択したクラスタに接続されているiSCSIセッションに関する情報を確認できます。

Node

ボリュームのプライマリ メタデータパーティションをホストしているノード。

Account

ボリュームを所有するアカウントの名前。値が空白の場合は、ダッシュ (-) が表示されます。

Volume

ノードでのボリュームの識別名。

Volume ID

ターゲットIQNに関連付けられたボリュームのID。

Initiator ID

システムによって生成されたイニシエータのID。

Initiator Alias

イニシエータが多数ある場合に特定のイニシエータを見つけやすくするための別名。

Initiator IP

セッションを開始するエンドポイントのIPアドレス。

Initiator IQN

セッションを開始するエンドポイントのIQN。

Target IP

ボリュームをホストしているノードのIPアドレス。

Target IQN

ボリュームのIQN。

Created On

セッションが確立された日時。

実行中のタスク

`ListSyncJobs`および`ListBulkVolumeJobs` APIメソッドから報告される、実行中のタスクの進捗状況と完了ステータスを確認できます。NetApp Element Management拡張ポイントの[Reporting]タブにある[Running Tasks]ページでは、実行中のタスクを確認できます。

Task Type

同期ジョブまたは一括ボリュームジョブのタイプ。

有効な値は次のとおりです。

- block
- clone
- read
- remote
- slice
- write

Node

クローンが書き込まれるノードのIDです。このIDは、タスク タイプが`clone`の場合にのみ表示されます。

Description

システムで現在実行中の同期プロセスの詳細を示すオブジェクトのリスト、またはシステムで現在実行中の各一括ボリュームジョブの情報。

Current Progress

ソースボリュームのうち、クローンが処理したバイト数。この情報は、タスク タイプが`clone`または`slice`の場合にのみ表示されます。

Elapsed Time

ジョブが開始されてからの経過時間（秒）。

Remaining Time

処理が完了するまでの推定残り時間（秒）。

ボリュームのパフォーマンス

NetApp Element Management拡張ポイントの[Reporting]タブにある[Volume Performance]ページで、選択したクラスタ内のすべてのボリュームのパフォーマンス情報を確認できます。

[Refresh every]リストをクリックして別の値を選択すると、ページ上のパフォーマンス情報の更新頻度を変更できます。クラスタのボリューム数が1,000個未満の場合、デフォルトの更新間隔は10秒です。それ以外の場合は60秒です。[Never]を選択すると、ページの自動更新が無効になります。

ID

システムによって生成されたボリュームのID。

Name

ボリュームの作成時に指定した名前。

Account

ボリュームに割り当てられているアカウントの名前。

Access Groups

ボリューム アクセス グループまたはボリュームが所属するグループの名前。

Volume Utilization %

クライアントによるボリュームの使用率を示すパーセンテージ。

有効な値は次のとおりです。

- 0 : クライアントはボリュームを使用していません。
- 100 : クライアントは最大値まで使用しています。
- >100 : クライアントはバースト値を使用しています。

Total IOPS

ボリュームに対して実行中のIOPS（読み取りおよび書き込み）の総数。

Read IOPS

ボリュームに対して実行中の読み取りIOPSの総数。

Write IOPS

ボリュームに対して実行中の書き込みIOPSの総数。

Total Throughput

ボリュームに対して実行中のスループット（読み取りおよび書き込み）の総量。

Read Throughput

ボリュームに対して実行中の読み取りスループットの総量。

Write Throughput

ボリュームに対して実行中の書き込みスループットの総量。

Total Latency (ms)

ボリュームに対する読み取りおよび書き込み処理が完了するまでの平均時間（マイクロ秒）。

Read Latency (ms)

過去500ミリ秒の、ボリュームに対する読み取り処理が完了するまでの平均時間（マイクロ秒）。

Write Latency (ms)

過去500ミリ秒の、ボリュームに対する書き込み処理が完了するまでの平均時間（マイクロ秒）。

Queue Depth

ボリュームに対する未処理の読み取りおよび書き込み処理の数。

Average IO Size

過去500ミリ秒の、ボリュームに対する最新のI/Oの平均サイズ（バイト）。

管理

[Management]タブでは、データストア、ボリューム、アカウント、アクセスグループ、イニシエータ、およびボリュームのQoSポリシーを作成および管理できます。

データストア管理

ネットアップ Element Plug-in for vCenter Serverでは、Elementボリューム上に作成されたデータストアを管理できます。データストアの作成、拡張、クローニング、共有、削除が可能です。また、VAAI UNMAP機能を使用して、シンプロビジョニングされたVMFSデータストアから解放されたブロックスペースをクラスタで再生することもできます。

データストア処理の進捗状況は、vSphereのタスク監視を使用して監視できます。

注 : データストアを作成および管理するにManagement > Accountsは、まずで少なくとも1つのユーザアカウントを作成する必要があります。データストアで QoSIOC サービスを使用する場合QoSIOC SettingsネットアップElementは、まず、NetApp Element Configuration 拡張ポイントのページで設定を構成する必要があります。

関連タスク

[アカウントの作成](#) (100ページ)

アカウントを作成し、ボリュームへのアクセスを許可することができます。作成したアカウント1つにつき、最大で2000個のボリュームを割り当てることができます。各アカウント名はシステム内で一意である必要があります。

[QoSIOC の設定](#) (40ページ)

NetApp Element ConfigurationネットアップElementを使用して、Element Management Node (MNode) のQoSIOC 設定を構成できます。QoSIOCサービスを有効にして使用するには、この設定が必要です。

データストアの作成

NetApp Element Management拡張ポイントを使用してデータストアを作成できます。

開始する前に

- クラスタが少なくとも1つ追加および実行されている必要があります。

注 : vCenterリンクモードを使用している場合は、クラスタが追加されているvCenter Serverが正しいことを確認してください。

- ユーザアカウントを少なくとも1つ作成しておく必要があります。
- vCenter Serverにホストが少なくとも1つ接続されている必要があります。

タスク概要

データストアの作成には選択したESXiホストでサポートされる最も高いVMFSバージョンが使用されるので、VMFSの互換性に関する問題を防ぐために、実行するvSphereおよびESXiのバージョンをすべてのクラスタメンバーで統一する必要があります。

注 : データストアで QoSIOC サービスを使用する場合QoSIOC SettingsNetApp Element Configurationは、最初に拡張ポイントからページの設定を構成する必要があります。

手順

- NetApp Element Management > Managementの順に選択します。

注 :複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. DatastoreページでCreate Datastoreをクリックします。
3. Create Datastoreダイアログボックスで、データストアの名前を入力します。

ヒント :各データストアにはデータセンター内で一意な名前を使用します。複数のクラスタやvCenter Serverを使用する環境では、わかりやすい名前のベストプラクティスを使用してください。

4. Nextをクリックします。
5. データストアに必要なホストを1つ以上選択します。

注 :新しいデータストアを作成するには、ホストが少なくとも1つ接続されている必要があります。ホストに複数のイニシエータがある場合は、いずれかのイニシエータを選択するか、またはホストを選択することですべてのイニシエータを選択します。vCenterリンクモードを使用している場合は、クラスタが割り当てられているvCenter Serverから使用可能なホストのみを選択できます。

6. Nextをクリックします。
7. Configure Volumeペインで既存のボリュームを選択し、次の手順に進むか、新しいデータストア用の新しいボリュームを作成します。

注 :既存のボリュームを選択して新しいデータストアを作成すると、既存のデータは失われます。既存のVMFSボリュームについては、VMFSデータストアコピーのマウントと重複するVMFSデータストアの管理について、VMwareのドキュメントを参照してください。

1. データストアの基盤となるボリュームの名前を入力します。
2. アカウントのドロップダウンリストからユーザアカウントを選択します。

注 :新しいボリュームを作成するには、既存のユーザアカウントが少なくとも1つ必要です。

3. 作成するボリュームの合計サイズを入力します。

注 :デフォルトのボリュームサイズの単位はGBです。GBまたはGiB単位のサイズを使用してボリュームを作成できます。

- 1GB=1,000,000,000バイト
- 1GiB=1,073,741,824バイト

注 :デフォルトでは、すべての新しいボリュームについて、512バイトエミュレーションがONに設定されます。

4. Quality of Service「」領域で、次のいずれかの操作を行います。
 - 既存PolicyのQoSポリシーがある場合は、そのポリシーを選択します。
 - でCustom Settings、IOPSのカスタマイズされた最小値、最大値、およびバースト値を設定するか、デフォルトのQoS値を使用します。



注意 :QoSポリシーは、データベース、アプリケーション、またはインフラサーバがリブートすることはほとんどなく、ストレージへのアクセスが常に同じである必要がある場合など、サービス環境に最適です。カスタムQoSOC自動化は、仮想デスクトップや専用のキオスクタイプのVMなど、日常的または数回の再起動、電源投入、または電源オフ

を行うことが可能な軽用途の VM に最適です。QoSIOC 自動化ポリシーと QoS ポリシーは一緒に使用しないでください。



注意 : 最大IOPSまたはバーストIOPSの値が 20,000 IOPSを超える場合、単一のボリュームでこのレベルのIOPSを実現するには、キー深度を深くするか、複数のセッションが必要になる場合があります。

8. Nextをクリックします。
9. 次のいずれかを選択してホストアクセスの認証タイプを設定します。

- Use Volume Access Group
- Use CHAP

注 : ボリュームを参照できるイニシエータを明示的に制限するには、ボリュームアクセスグループの認証タイプを使用します。シークレットベースのセキュアなアクセスで、イニシエータを制限しない場合はCHAPを使用します。

10. Nextをクリックします。
11. Use Volume Access Group選択した場合は、選択したホストのボリュームアクセスグループを設定します。

に示すボリュームアクセスグループRequired by Selected Initiatorsは、前の手順で選択した 1 つ以上のホストイニシエータにすでに関連付けられています。

1. 追加のボリューム アクセス グループを選択するか、またはボリューム アクセス グループを新規作成して、使用可能なイニシエータに関連付けます。
 - Available : クラスタ内のその他のボリュームアクセスグループオプション。
 - Create New Access Group : 新しいアクセスグループの名前Addを入力し、をクリックします。
 2. Nextをクリックします。
 3. Configure Hosts' Accessペインで、使用可能なホストイニシエータ (IQN または WWPN) を、前のペインで選択したボリュームアクセスグループに関連付けます。ボリューム アクセス グループがすでに関連付けられているホスト イニシエータの場合、このフィールドは読み取り専用です。ボリューム アクセス グループに関連付けられていない場合は、イニシエータの横にあるドロップダウンリストから選択します。
 4. Nextをクリックします。
12. QoSIOC 自動化Enable QoS & SIOCを有効にする場合は、チェックボックスをオンにして、QoSIOC 設定を構成します。



注意 : QoSポリシーを使用する場合は、QoSIOCを有効にしないでください。QoSIOC は、ボリューム QoS 設定の QoS 値を上書きして調整します。

注 : QoSIOC サービスを使用できQoSIOC SettingsNetApp Element Configuration ない場合は、最初に拡張ポイントからページの設定を構成する必要があります。

1. Enable QoS & SIOCを選択します。
2. を設定Burst Factorします。 .

注 : バースト係数は、VMDKのIOPS制限 (SIOC) 設定に掛ける係数です。デフォルト値を変更する場合は、すべてのVMDKについて、IOPS制限にこの係数を

掛けてもElementボリュームの最大バースト制限を超えない値を指定してください。

3. オプション: **Override Default QoS**設定を選択して設定します。

注 : **Override Default QoS**データストアの設定を無効にすると、各 VM のデフォルトの SIOC 設定に基づいて、共有と制限 IOPS の値が自動的に設定されます。

ヒント : SIOCシェア制限をカスタマイズするときは、SIOC IOPS制限も必ずカスタマイズしてください。

ヒント : デフォルトでは、最大 SIOC ディスク共有は無制限に設定されています。VDIなどの大規模な VM 環境では、クラスタの最大 IOPS がオーバーコミットされる可能性があります。QoSIOC を有効**Override Default QoS**にする場合は、必ずをチェックし、Limit IOPS オプションを適切な値に設定してください。

13. **Next**をクリックします。

14. 選択内容を確認し、**Finish**をクリックします。

15. vSphereのタスク監視を使用して、タスクの進捗状況を確認できます。データストアがリストに表示されない場合は、ビューを更新します。

関連概念

[複数クラスタを管理する場合のオブジェクト名のベストプラクティス](#) (31ページ)

クラスタコンポーネントを簡単に識別できるように、NetApp Element Plug-in for vCenter Serverに関連するすべてのオブジェクトに一貫したわかりやすい命名規則を使用する必要があります。これは、特にvCenter Serverやクラスタを複数使用する環境において重要となります。

関連タスク

[クラスタの追加](#) (32ページ)

NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、Elementソフトウェアを実行するクラスタを追加できます。クラスタへの接続が確立されると、そのクラスタをNetApp Element Management拡張ポイントを使用して管理できるようになります。

[アカウントの作成](#) (100ページ)

アカウントを作成し、ボリュームへのアクセスを許可することができます。作成したアカウント1つにつき、最大で2000個のボリュームを割り当てることができます。各アカウント名はシステム内で一意である必要があります。

[QoSIOCの設定](#) (40ページ)

NetApp Element ConfigurationネットアップElementを使用して、Element Management Node (MNode) の QoSIOC 設定を構成できます。QoSIOCサービスを有効にして使用するには、この設定が必要です。

データストアリストの表示

使用可能なデータストアは、NetApp Element Management拡張ポイントの[Datastores]ページで確認できます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注 :複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Datastores]ページに、NetApp ElementおよびESXiの現在のデータストアがすべて表示されます。

注: 複数のボリュームにまたがるデータストア（混在データストア）はリストに表示されません。[Datastore]ビューには、選択したNetApp ElementクラスタのESXiホストで利用できるデータストアのみが表示されます。

データストアの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[Management]タブにある[Datastores]ページで、クラスタ上のすべてのデータストアに関する情報を確認できます。

Name

データストアに割り当てられている名前。

Host Name(s)

関連付けられている各ホストデバイスのアドレス。

Status

有効な値は[Accessible]または[Inaccessible]です。データストアが現在vSphereに接続されているかどうかを示します。

Type

VMwareファイルシステムのデータストアタイプ。

Volume Name

関連付けられたボリュームに割り当てられている名前。

Volume NAA

関連付けられたボリュームのSCSIデバイスのグローバル意識別子（NAA IEEE Registered Extended形式）。

Total Capacity (GB)

データストアのフォーマット後の総容量。

Free Capacity (GB)

データストアに使用できるスペース。

QoSIOC Automation

QoSIOC自動化が有効になっているかどうか。有効な値は次のとおりです。

- Enabled : QoSIOCは有効です。
- Disabled : QoSIOCは無効です。
- Max Exceeded : ボリュームの[Max QoS]が指定された制限値を超えていません。

データストアの拡張

NetApp Element Management拡張ポイントを使用して、データストアを拡張してボリュームのサイズを大きくすることができます。データストアを拡張すると、そのデータストアに関連するVMFSボリュームも拡張されます。

手順

- [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

- [Datastores]ページで、拡張するデータストアのチェックボックスを選択します。
- [Actions]をクリックします。
- 表示されたメニューで[Extend]をクリックします。

5. [New Datastore Size] フィールドに新しいデータストアのサイズを入力し、単位 (GB または GiB) を選択します。

注: データストアの拡張では、ボリューム全体のサイズが消費されます。新しいデータストアのサイズは、選択したクラスタで利用可能なプロビジョニングされていないスペースよりも大きくすることはできません。また、クラスタで許容される最大ボリューム サイズ以下でなければなりません。

6. [OK] をクリックします。
7. 更新されたデータストアがリストに表示されるまで、必要に応じてページを更新します。

データストアのクローニング

ネットアップ Element Plug-in for vCenter Server では、データストアのクローニングが可能で、新しいデータストアを目的のESXiサーバやクラスタにマウントする機能などが用意されています。作成したデータストアのクローンに名前を付け、QoSIOC、ボリューム、ホスト、および認証タイプを設定できます。

開始する前に

- クラスタが少なくとも1つ追加および実行されている必要があります。
注: vCenterリンク モードを使用している場合は、クラスタが追加されているvCenter Serverが正しいことを確認してください。
- ソース ボリュームのサイズと同じかそれ以上のプロビジョニングされていない利用可能なスペースが必要です。
- vCenter Serverにホストが少なくとも1つ接続されている必要があります。
- ユーザ アカウントを少なくとも1つ作成しておく必要があります。

タスク概要

ソース データストアに仮想マシンが存在する場合は、クローン データストア上の仮想マシンが新しい名前でインベントリに格納されます。

手順

1. NetApp Element Management > Management の順に選択します。

注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. Datastores ページで、クローニングするデータストアのチェックボックスをオンにします。
3. Actions をクリックします。
4. 表示されるメニューで Clone をクリックします。

注: クローニングするデータストアにそのデータストアにないディスクが接続された仮想マシンが含まれている場合、クローンの作成後、その仮想マシンのコピーは仮想マシン インベントリに追加されません。

5. データストア名を入力します。
ヒント: 各データストアにはデータセンター内で一意な名前を使用します。複数のクラスタやvCenter Serverを使用する環境では、わかりやすい名前のベストプラクティスを使用してください。
6. Next をクリックします。
7. データストアに必要なホストを1つ以上選択します。

注 :新しいデータストアを作成するには、ホストが少なくとも1つ接続されている必要があります。ホストに複数のイニシエータがある場合は、いずれかのイニシエータを選択するか、またはホストを選択することですべてのイニシエータを選択します。vCenterリンクモードを使用している場合は、クラスタが割り当てられているvCenter Serverから使用可能なホストのみを選択できます。

8. **Next**をクリックします。
9. **Configure Volume**ペインで、次の手順を実行します。

注 :クローンデータストアのボリューム サイズは、ソースデータストアを構成するボリュームのサイズと同じになります。デフォルトでは、すべての新しいボリュームについて、512バイトエミュレーションがONに設定されます。

1. クローンデータストアを構成する新しいネットアップ Elementボリュームの名前を入力します。
2. アカウントのドロップダウンリストからユーザ アカウントを選択します。

注 :新しいボリュームを作成するには、既存のユーザ アカウントが少なくとも1つ必要です。

3. **Quality of Service**「」領域で、次のいずれかの操作を行います。
 - 既存Policyの QoS ポリシーがある場合は、そのポリシーを選択します。
 - でCustom Settings、IOPS のカスタマイズされた最小値、最大値、およびバースト値を設定するか、デフォルトの QoS 値を使用します。



注意 :QoS ポリシーは、データベース、アプリケーション、またはインフラサーバがリブートすることはほとんどなく、ストレージへのアクセスが常に同じである必要がある場合など、サービス環境に最適です。カスタム QoSIOC 自動化は、仮想デスクトップや専用のキオスクタイプの VM など、日常的または数回の再起動、電源投入、または電源オフを行うことが可能な軽用途の VM に最適です。QoSIOC 自動化ポリシーと QoS ポリシーは一緒に使用しないでください。



注意 :最大IOPSまたはバーストIOPSの値が20,000 IOPSを超える場合、単一のボリュームでこのレベルのIOPSを実現するには、キュー深度を深くするか、複数のセッションが必要になる場合があります。

10. **Next**をクリックします。
 11. 次のいずれかのオプションを選択してホスト アクセスの認証タイプを設定します。
 - **Use Volume Access Group**
 - **Use CHAP**
- 注 :**ボリュームを参照できるイニシエータを明示的に制限するには、ボリュームアクセス グループの認証タイプを使用します。シークレットベースのセキュアなアクセスで、イニシエータを制限しない場合はCHAPを使用します。
12. **Next**をクリックします。
 13. **Use Volume Access Group**選択した場合は、選択したホストのボリュームアクセス グループを設定します。

に示すボリュームアクセスグループ**Required by Selected Initiators**は、前の手順で選択した1つ以上のホストイニシエータにすでに関連付けられています。

1. 追加のボリュームアクセスグループを選択するか、またはボリュームアクセスグループを新規作成して、使用可能なイニシエータに関連付けます。
 - **Available** : クラスタ内のその他のボリュームアクセスグループオプション。
 - **Create New Access Group** : 新しいアクセスグループの名前**Add**を入力し、をクリックします。
 2. **Next**をクリックします。
 3. **Configure Hosts' Access**ペインで、使用可能なホストイニシエータ（IQNまたはWWPN）を、前のペインで選択したボリュームアクセスグループに関連付けます。ボリュームアクセスグループがすでに関連付けられているホストイニシエータの場合、このフィールドは読み取り専用です。ボリュームアクセスグループに関連付けられていない場合は、イニシエータの横にあるドロップダウンリストから選択します。
 4. **Next**をクリックします。
14. QoSIOC自動化**Enable QoS & SIOC**を有効にする場合は、チェックボックスをオンにして、QoSIOC設定を構成します。



注意 : QoSポリシーを使用する場合は、QoSIOCを有効にしないでください。QoSIOCは、ボリュームQoS設定のQoS値を上書きして調整します。

注 : QoSIOCサービスを使用でき**QoSIOC Settings**NetApp Element Configurationない場合は、最初に拡張ポイントからページの設定を構成する必要があります。

1. **Enable QoS & SIOC**を選択します。
2. を設定**Burst Factor**します。.

注 : バースト係数は、VMDKのIOPS制限(SIOC)設定に掛ける係数です。デフォルト値を変更する場合は、すべてのVMDKについて、IOPS制限にこの係数を掛けてもネットアップElementボリュームの最大バースト制限を超えない値を指定してください。

3. オプション: **Override Default QoS**設定を選択して設定します。

注 : **Override Default QoS**データストアの設定を無効にすると、各VMのデフォルトのSIOC設定に基づいて、共有と制限IOPSの値が自動的に設定されます。

ヒント : SIOCシェア制限をカスタマイズするときは、SIOC IOPS制限も必ずカスタマイズしてください。

ヒント : デフォルトでは、最大SIOCディスク共有は無制限に設定されています。VDIなどの大規模なVM環境では、クラスタの最大IOPSがオーバーコミットされる可能性があります。QoSIOCを有効Override Default QoSにする場合は、必ずをチェックし、Limit IOPSオプションを適切な値に設定してください。

15. **Next**をクリックします。
16. 選択内容を確認し、**Finish**をクリックします。
17. データストアのクローンがリストに表示されない場合は、ビューを更新します。

関連概念

[複数クラスタを管理する場合のオブジェクト名のベストプラクティス](#) (31ページ)

クラスタコンポーネントを簡単に識別できるように、NetApp Element Plug-in for vCenter Serverに関連するすべてのオブジェクトに一貫したわかりやすい命名規則を使用する必要があります。これは、特にvCenter Serverやクラスタを複数使用する環境において重要となります。

関連タスク

[クラスタの追加](#) (32ページ)

NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、Elementソフトウェアを実行するクラスタを追加できます。クラスタへの接続が確立されると、そのクラスタをNetApp Element Management拡張ポイントを使用して管理できるようになります。

[アカウントの作成](#) (100ページ)

アカウントを作成し、ボリュームへのアクセスを許可することができます。作成したアカウント1つにつき、最大で2000個のボリュームを割り当てることができます。各アカウント名はシステム内で一意である必要があります。

データストアの共有

NetApp Element Management拡張ポイントを使用して、データストアを1つ以上のホストと共有できます。

開始する前に

- クラスタが少なくとも1つ追加および実行されている必要があります。

注: vCenterリンクモードを使用している場合は、クラスタが追加されているvCenter Serverが正しいことを確認してください。

- 選択したデータセンターに複数のホストが存在している必要があります。

注: データストアを共有できるのは、同じデータセンターにあるホストだけです。

手順

- [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

- [Datastores]ページで、共有するデータストアのチェックボックスを選択します。

- [Actions]をクリックします。

- 表示されたメニューで[Share]をクリックします。

- 次のいずれかを選択してホストアクセスの認証タイプを設定します。

- Use Volume Access Group**
- Use CHAP**

注: ボリュームを参照できるイニシエータを明示的に制限するには、ボリュームアクセスグループの認証タイプを使用します。シークレットベースのセキュアなアクセスで、イニシエータを制限しない場合はCHAPを使用します。

- [Next]をクリックします。

- データストアに必要なホストを1つ以上選択します。

注: 新しいデータストアを作成するには、ホストが少なくとも1つ接続されている必要があります。ホストに複数のイニシエータがある場合は、いずれかのイニシエータを選択するか、またはホストを選択することですべてのイニシエータを選択します。vCenterリンクモードを使用している場合は、クラスタが割り当てられているvCenter Serverから使用可能なホストのみを選択できます。

- [Next]をクリックします。

9. [Use Volume Access Group]を選択した場合は、選択したホストのボリューム アクセス グループを設定します。[Required by Selected Initiators]に表示されているボリューム アクセス グループは、前の手順で選択した1つ以上のホスト イニシエータにすでに関連付けられています。
 1. 追加のボリューム アクセス グループを選択するか、またはボリューム アクセス グループを新規作成して、使用可能なイニシエータに関連付けます。
 - Available : クラスタ内の他のボリューム アクセス グループを選択します。
 - Create New Access Group : 新しいアクセス グループの名前を入力し、[Add]をクリックします。
 2. [Next]をクリックします。
 3. [Configure Hosts' Access]ペインで、使用可能なホスト イニシエータ (IQNまたはWWPN) を、前のペインで選択したボリューム アクセス グループに関連付けます。
ボリューム アクセス グループがすでに関連付けられているホスト イニシエータの場合、このフィールドは読み取り専用です。ボリューム アクセス グループに関連付けられていない場合は、イニシエータの横にあるドロップダウン リストから選択します。
10. 選択内容を確認し、[Finish]をクリックします。
11. データストアの共有タスクが完了したら、リストを更新し、データストアのホストを確認します。

VAAI UNMAPの実行

VAAI UNMAP機能を使用すると、シンプロビジョニングされたVMFS5データストアから解放されたブロックスペースをクラスタで再生できます。

開始する前に

1. タスクに使用するデータストアがVMFS5以前のものであることを確認します。
VMFS6では、ESXiで自動的に実行されるため、VAAI UNMAPは使用できません。
2. ESXiホストのシステム設定でVAAI UNMAPが有効になっていることを確認します。

```
esxcli system settings advanced list -o /VMFS3/EnableBlockDelete  
値が1に設定されている必要があります。
```

3. ESXiホストのシステム設定でVAAI UNMAPが有効になっていない場合は、次のコマンドを使用して値を1に設定します。

```
esxcli system settings advanced set -i 1 -o /VMFS3/EnableBlockDelete
```

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。
- 注：複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。
2. [Datastores]ページで、VAAI UNMAPを使用するデータストアのチェック ボックスを選択します。
3. [Actions]をクリックします。
4. 表示されたメニューで[VAAI Unmap]をクリックします。
5. 名前またはIPアドレスでホストを選択します。
6. ホストのユーザ名とパスワードを入力します。
7. 選択内容を確認し、[OK]をクリックします。

関連情報

[VMware VAAI blog article](#)

データストアの削除

NetApp Element Management拡張ポイントを使用して、データストアを削除できます。この処理を実行すると、該当するデータストアのVMに関連付けられたすべてのファイルが完全に削除されます。プラグインでは、登録済みのVMを含むデータストアは削除されません。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Datastores]ページで、削除するデータストアのチェックボックスを選択します。

3. [Actions]をクリックします。

4. 表示されたメニューで[Delete]をクリックします。

5. オプション: データストアに関連付けられたNetApp Elementボリュームを削除する場合は、[Delete associated volume]チェックボックスを選択します。

注:ボリュームを削除せずに残し、あとで別のデータストアに関連付けることもあります。

6. [Yes]をクリックします。

QoS SIOC自動化

NetApp Element Plug-in for vCenter Serverでは、標準データストア上のすべてのVMのStorage I/O Control (SIOC) 設定に基づいて、自動的なQuality of Service (QoS) をオプションで設定できます。

QoSとSIOCの統合 (QoSIOC) は、任意の標準データストアで有効にでき、関連付けられたすべてのVMですべてのSIOC設定のスキヤンを実行します。QoSIOCElementは、パワーオンイベントやパワーオフイベント、ゲストの再起動やシャットダウン、再構成アクティビティなどの仮想マシンイベントが発生したときに、標準要素ボリュームのQoS値を調整します。QoSIOCサービスは、SIOCのすべてのリザベーション(シェア)の合計とIOPS制限の合計に基づいて、各データストアの基盤となるボリュームの最小QoSと最大QoSを決定します。また、バースト係数も設定できます。

QoSIOC Automationを使用する前に、次の項目を考慮する必要があります。

- QoSIOC自動化ポリシーとQoSポリシーは一緒に使用しないでください。QoSポリシーを使用する場合は、QoSIOCを有効にしないでください。QoSIOCは、ボリュームQoS設定のQoS値を上書きして調整します。
- QoSIOCは、仮想デスクトップや専用のキオスクタイプのVMなど、日常的に、または1日に数回、再起動、電源オン、または電源オフを行うことができる、使用頻度の少ないVMに最適です。
- QoSIOCは、再起動がほとんどなく、ストレージへのアクセスが常に同じである必要があるデータベース、アプリケーション、インフラサーバなどのサービス環境には適していません。QoSポリシーは、これらの環境に最適です。
- QoSIOCは、標準データストアでのみ使用できます。仮想ボリューム(VVol)では機能しません。

データストアのQoSIOC設定時には次のダイアログボックスが表示されます。

A5T-BaG1 - QoSIOC Automation

Configure QoSIOC integration to optimize performance by virtual machines by leveraging NetApp Element QoS and vSphere SIOC

Enable QoS & SIOC

Burst Factor * 4 (i)

Override Default QoS

Shares * 1000 (i)

Limit IOPS * 2000 (i)

Refer to your VMware documentation on customizing VM disk shares.

OK CANCEL

Enable QoS & SIOC

データストア上の各VMDKのSIOC値の自動監視を有効にし、その値に従って基盤となるボリュームのQoS値を設定します。

Burst Factor

各VMDKのSIOC IOPS制限値の合計に対する乗数です。この係数に基づいて、基盤となるボリュームに許容されるバーストIOPSが決まります。

Override Default QoS

オンにすると[Shares]と[Limit IOPS]を指定できるようになります。これらの値は、各VMのSIOC設定がデフォルトに設定されている場合に使用できます。

Shares

SIOC設定がデフォルトに設定されている場合に使用される各VMDKの最小IOPSです。

Limit IOPS

SIOC設定がデフォルトに設定されている場合に使用される各VMDKの最大IOPSです。

VMDKのSIOC設定がデフォルトの設定（シェアレベルが[Normal]、IOPS制限が[Unlimited]）の場合、[Shares]と[Limit IOPS]の値が基盤となるボリューム全体のQoSに加算されます。VMDKのSIOC設定がデフォルトレベルでない場合は、SIOCのシェアが基盤となるボリュームの最小QoSに、IOPS制限値が最大QoSに加算されます。

注：リザベーション値はvSphere APIでは設定できません。VMDKに対してリザベーション値が設定されている場合、シェアは無視され、代わりにリザベーション値が使用されます。

QoSSIOC自動化の有効化

NetApp Element Management拡張ポイントを使用して、QoSSIOCの自動化を有効にし、仮想マシンディスク（VMDK）のパフォーマンスレベルをカスタマイズすることができます。

開始する前に

ページで、拡張ポイント**QoSSIOC Settings**から QoSSIOC サービス設定を設定しました。
NetApp Element Configuration extension point.

タスク概要

QoSIOC は、標準データストアでのみ使用できます。仮想ボリューム（VVol）では機能しません。QoSIOCElement は、パワーオンイベントやパワーオフイベント、ゲストの再起動やシャットダウン、再構成アクティビティなどの仮想マシンイベントが発生したときに、標準要素ボリュームの QoS 値を調整します。



注意 : QoSポリシーを使用する場合は、QoSSIOCを有効にしないでください。QoSIOC は、ポリシーに関係なく、ボリューム QoS 設定の QoS 値を上書きして調整します。

手順

1. NetApp Element Management > Management の順に選択します。

注 : 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. QoSSIOC Automation 選択したデータストアの列にある Status ボタンをクリックします。

ヒント : QoSの想定外の変更を防止するため、別のvCenterでは同じデータストアの QoSSIOC 統合を有効にしないでください。

3. Enable QoS & SIOC を選択します。

4. を設定Burst Factorします。 .

注 : バースト係数は、VMDKのIOPS制限（SIOC）設定に掛ける係数です。デフォルト値を変更する場合は、すべてのVMDKについて、IOPS制限にこの係数を掛けても NetApp Elementソフトウェアベースのボリュームの最大バースト制限を超えない値を指定してください。

5. オプション: Override Default QoS設定を選択して設定します。

注 : Override Default QoSデータストアの設定を無効にすると、各 VM のデフォルトの SIOC 設定に基づいて、共有と制限 IOPS の値が自動的に設定されます。

ヒント : SIOCシェア制限をカスタマイズするときは、SIOC IOPS制限も必ずカスタマイズしてください。

ヒント : デフォルトでは、最大 SIOC ディスク共有は無制限に設定されています。VDIなどの大規模な VM 環境では、クラスタの最大 IOPS がオーバーコミットされる可能性があります。QoSIOC を有効Override Default QoSにする場合は、必ずチェックし、Limit IOPS オプションを適切な値に設定してください。

6. OKをクリックします。

注 : データストアに対してQoSSIOC自動化を有効にすると、ボタンが[Disabled]から[Enabled]に変わります。

関連タスク

[QoSIOCの設定](#) (40ページ)

NetApp Element ConfigurationネットアップElementを使用して、Element Management Node (MNode) の QoSIOC 設定を構成できます。QoSIOCサービスを有効にして使用するには、この設定が必要です。

QoSIOC統合の無効化

NetApp Element Management拡張ポイントを使用して、QoSIOC統合を無効にできます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. 選択したデータストアの[QoSIOC Automation]列のボタンをクリックします。

3. [Enable QoS & SIOC]チェックボックスをオフにして統合を無効にします。

注:[Enable QoS & SIOC]チェックボックスをオフにすると、[Override Default QoS]オプションも自動的に無効になります。

4. [OK]をクリックします。

ボリュームの管理

ストレージは、NetApp Elementシステムではボリュームとしてプロビジョニングされます。ボリュームは、iSCSIまたはFibre Channelクライアントを使用してネットワーク経由でアクセスされるブロックデバイスです。

NetApp Element Plug-in for vCenter Serverでは、ユーザーアカウントのボリュームを作成、表示、編集、削除、クローニング、バックアップ、リストアすることができます。また、クラスタ上の各ボリュームの管理や、ボリュームアクセスグループのボリュームの追加と削除も可能です。

ボリュームの作成

新しいボリュームを作成し、そのボリュームを指定したアカウントに関連付けることができます（ボリュームはすべてアカウントに関連付ける必要があります）。この関連付けにより、アカウントは、iSCSIイニシエータ経由でCHAPクレデンシャルを使用してボリュームにアクセスできます。作成中に、ボリュームのQoS設定を指定することもできます。

開始する前に

- クラスタが少なくとも1つ追加および実行されている必要があります。
- ユーザーアカウントが作成されている必要があります。

手順

1. NetApp Element Management > Managementの順に選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. Volumesサブタブをクリックします。

3. Active「Create Volume」ビューで、「+」をクリックします。

4. ボリュームの名前を入力します。

ヒント:わかりやすい命名のベストプラクティスを使用してください。これは、環境で複数のクラスタやvCenter Serverを使用している場合に特に重要です。

5. 作成するボリュームの合計サイズを入力します。

注: デフォルトのボリューム サイズの単位はGBです。GBまたはGiB単位のサイズを使用してボリュームを作成できます。

- 1GB=1,000,000,000バイト
- 1GiB=1,073,741,824バイト

注: デフォルトでは、すべての新しいボリュームについて、512バイトエミュレーションがONに設定されます。VMwareではディスクリソースに512eが必要です。512eが有効になつていないとVMFSは作成できません。

6. Account ドロップダウンリストからユーザーアカウントを選択します。

7. Quality of Service 「」領域で、次のいずれかの操作を行います。

- 既存Policyの QoS ポリシーがある場合は、そのポリシーを選択します。
- でCustom Settings、 IOPS のカスタマイズされた最小値、最大値、およびバースト値を設定するか、デフォルトの QoS 値を使用します。



注意:

- QoS ポリシーは、データベース、アプリケーション、またはインフラサーバがリブートすることはほとんどなく、ストレージへのアクセスが常に同じである必要がある場合など、サービス環境に最適です。カスタム QoSIOC 自動化は、仮想デスクトップや専用のキオスクタイプの VM など、日常的または数回の再起動、電源投入、または電源オフを行うことが可能な軽用途の VM に最適です。QoSIOC 自動化ポリシーと QoS ポリシーは一緒に使用しないでください。
- データストアのQoSIOC設定を有効にすると、ボリューム レベルのQoS設定よりも優先されます。
- 最大IOPSまたはバーストIOPSの値が20,000 IOPSを超える場合、単一のボリュームでこのレベルのIOPSを実現するには、キューディープを深くするか、複数のセッションが必要になる場合があります。

8. OKをクリックします。

関連概念

[複数クラスタを管理する場合のオブジェクト名のベストプラクティス](#) (31ページ)

クラスタコンポーネントを簡単に識別できるように、NetApp Element Plug-in for vCenter Serverに関連するすべてのオブジェクトに一貫したわかりやすい命名規則を使用する必要があります。これは、特にvCenter Serverやクラスタを複数使用する環境において重要となります。

関連タスク

[クラスタの追加](#) (32ページ)

NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、Elementソフトウェアを実行するクラスタを追加できます。クラスタへの接続が確立されると、そのクラスタをNetApp Element Management拡張ポイントを使用して管理できるようになります。

アカウントの作成 (100ページ)

アカウントを作成し、ボリュームへのアクセスを許可することができます。作成したアカウント1つにつき、最大で2000個のボリュームを割り当てることができます。各アカウント名はシステム内で一意である必要があります。

ボリュームの詳細の表示

NetApp Element Management拡張ポイントでは、クラスタ上のすべてのアクティブボリュームに関する全般的な情報を確認できます。また、各アクティブボリュームの詳細（効率性、パフォーマンス、QoSなど）および関連付けられているSnapshotを確認できます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注 :複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Volumes]サブタブをクリックします。
アクティブボリュームに関する全般的な情報が表示されます。
3. 確認するボリュームのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[View details]を選択します。

ボリュームの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[Management]タブにある[Volumes]ページで、ボリュームの詳細を確認できます。

注 :VMwareではディスクリソースに512eが必要です。512eが有効になっていないとVMFSは作成できません。

Volume ID

システムによって生成されたボリュームのID。

Volume Name

ボリュームに割り当てられている名前。

Account

ボリュームに割り当てられているアカウントの名前。

Access Groups

ボリュームが属するボリュームアクセスグループの名前。

Access

ボリュームの作成時に割り当てられたアクセスのタイプ。

有効な値は次のとおりです。

- Read/Write : すべての読み取りと書き込みが許可されます。
- Read Only : すべての読み取りが許可されます。書き込みは許可されません。
- Locked : 管理者アクセスのみが許可されます。
- ReplicationTarget : レプリケートされたボリュームペアのターゲットボリュームとして指定されています。

Volume Paired

ボリュームがペアリングされているかどうか。

Size (GB)

ボリュームの合計サイズ (GB)。

Snapshots

ボリュームに対して作成されたSnapshotの数。

QoS Policy

ユーザが定義したQoSポリシーの名前。

512e

ボリュームで512eが有効になっているかどうか。[Yes]または[No]のいずれかです。

個々のボリュームの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[Management]タブにある[Volumes]ページでは、個々のボリュームを選択してその詳細を表示し、アクティブ ボリュームの情報を確認できます。

[General Details]セクションには次の情報が表示されます。

Name

ボリュームに割り当てられている名前。

Volume ID

システムによって生成されたボリュームのID。

IQN

ボリュームのiSCSI Qualified Name。

Account ID

関連付けられているアカウントの一意のアカウントID。

Account

ボリュームに割り当てられているアカウントの名前。

Access Groups

ボリュームが属するボリューム アクセス グループの名前。

Size

ボリュームの合計サイズ (バイト)。

Volume Paired

ボリュームがペアリングされているかどうか。

SCSI EUI Device ID

ボリュームのSCSIデバイスのグローバルー意識別子 (EUI-64ベースの16バイト形式)。

SCSI NAA Device ID

プロトコルエンドポイントのSCSIデバイスのグローバルー意識別子 (NAA IEEE Registered Extended形式)。

[Efficiency]セクションには次の情報が表示されます。

Compression

ボリュームの圧縮による削減率。

Deduplication

ボリュームの重複排除による削減率。

Thin Provisioning

ボリュームのシンプロビジョニングによる削減率。

Last Updated

前回の削減率更新日時。

[Performance]セクションには次の情報が表示されます。

Account ID

関連付けられているアカウントの一意のアカウントID。

Actual IOPS

過去500ミリ秒の、ボリュームに対する実際のIOPS。

Async Delay

ボリュームが最後にリモート クラスタと同期されてからの時間。

Average IOP Size

過去500ミリ秒の、ボリュームに対する最新のI/Oの平均サイズ（バイト）。

Burst IOPS Size

ユーザが利用可能なIOPクレジットの合計数。ボリュームが最大IOPSに到達していない場合、クレジットは蓄積されます。

Client Queue Depth

ボリュームに対する未処理の読み取りおよび書き込み処理の数。

Last Updated

前回のパフォーマンス更新日時。

Latency USec

過去500ミリ秒の、ボリュームに対する処理が完了するまでの平均時間（マイクロ秒）。値「0」（ゼロ）はボリュームに対するI/Oがなかったことを意味します。

Non-zero Blocks

前回のガベージ コレクション完了後、データが含まれる4KiBブロックの総数。

Performance Utilization

消費されているクラスタIOPSの割合。たとえば、25万IOPSのクラスタが10万IOPSで実行されている場合、消費率は40%です。

Read Bytes

ボリュームの作成以降にボリュームから読み込んだ累積バイト総数。

Read Latency USec

過去500ミリ秒の、ボリュームに対する読み取り処理が完了するまでの平均時間（マイクロ秒）。

Read Operations

ボリューム作成以降にボリュームに対して行った読み取り処理の合計数。

Thin Provisioning

ボリュームのシンプロビジョニングによる削減率。

Throttle

0~1の浮動小数点数。データの再レプリケーション、一時的なエラー、Snapshotの作成のために、クライアントの処理量をmaxIOPS未満に抑えている割合。

Total Latency USec

ボリュームに対する読み取りおよび書き込み処理が完了するまでの時間（マイクロ秒）。

Unaligned Reads

512eボリュームの場合、4kセクターの境界に沿っていない読み取り処理の数。アライメントされていない読み取りが多数ある場合は、パーティションのアライメントが適切でない可能性があります。

Unaligned Writes

512eボリュームの場合、4kセクターの境界に沿っていない書き込み処理の数。アライメントされていない書き込みが多数ある場合は、パーティションのアライメントが適切でない可能性があります。

Used Capacity

使用済み容量の割合。

Volume ID

システムによって生成されたボリュームのID。

Vol Access Groups

ボリュームに関連付けられているボリューム アクセス グループのID。

Volume Utilization

クライアントによるボリュームの使用率を示すパーセンテージ。

有効な値は次のとおりです。

- 0 : クライアントはボリュームを使用していません。
- 100 : クライアントは最大値まで使用しています。
- >100 : クライアントはバースト値を使用しています。

Write Bytes

ボリュームの作成以降にボリュームに書き込まれた累積バイト総数。

Write Latency USec

過去500ミリ秒の、ボリュームに対する書き込み処理が完了するまでの平均時間（マイクロ秒）。

Write Operations

ボリュームの作成以降にボリュームに対して行った書き込み処理の累積総数。

Zero Blocks

前回のガベージ コレクション完了後、データが含まれない4KiBブロックの総数。

[Quality of Service]セクションには次の見出しがあります。

Policy

ボリュームに割り当てられているQoSポリシーの名前。

I/O Size

IOPSのサイズ（KB）。

Min IOPS

クラスタがボリュームに提供する平常時の最小IOPS。ボリュームに設定されたMin IOPSは、そのボリュームに対して最低限保証されるパフォーマンス レベルです。パフォーマンスがこのレベルを下回ることはありません。

Max IOPS

クラスタがボリュームに提供する平常時の最大IOPS。クラスタのIOPSレベルが非常に高い場合も、IOPSパフォーマンスはこのレベル以下に抑えられます。

Burst IOPS

短時間のバースト時に許容される最大IOPS。ボリュームがMax IOPS未満で動作している間は、バースト クレジットが蓄積されます。パフォーマンス レベルが非常に高くなつて最大レベルに達した場合、ボリュームでIOPSの短時間のバーストが許容されます。

Max Bandwidth

ブロック サイズの増加に対応するために使用が許可される最大帯域幅。

[Snapshots]セクションには次の情報が表示されます。

Snapshot ID

システムによって生成されたSnapshotのID。

Snapshot Name

ユーザが定義したSnapshotの名前。

Create Date

Snapshotが作成された日時。

Expiration Date

Snapshotが削除される日時。

Size

ユーザが定義したSnapshotのサイズ (GB)。

ボリュームの編集

QoS値、ボリュームのサイズ、バイト値の算出単位など、ボリュームの属性を変更できます。アクセス レベルおよびボリュームにアクセスできるアカウントを変更することもできます。レプリケーションで使用するため、またはボリュームへのアクセスを制限するために、アカウント アクセスを変更することもできます。

タスク概要

管理ノードに永続ボリュームを使用している場合は、永続ボリュームの名前を変更しないでください。

手順

1. NetApp Element Management > Managementの順に選択します。

注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. Volumesサブタブをクリックします。
3. Activeビューから、編集するボリュームのチェックボックスをオンにします。
4. Actionsをクリックします。
5. 表示されるメニューでEdit、をクリックします。
6. オプション: Volume Sizeこのフィールドに、GB または GiB 単位で別のボリュームサイズを入力します。

注: ボリュームのサイズは、増やすことはできますが、減らすことはできません。レプリケーション用にボリューム サイズを調整するときは、レプリケーション ターゲットとして割り当てられているボリュームのサイズを先に拡張する必要があ

ります。次に、ソースボリュームのサイズを変更します。ターゲットボリュームのサイズは、ソースボリュームと同じかそれ以上にすることはできますが、ソースボリュームより小さくすることはできません。

7. オプション: 別のユーザアカウントを選択します。
8. オプション: 別のアカウントアクセスレベルを選択します。次のいずれかを選択できます。
 - **Read/Write**
 - **Read Only**
 - **Locked**
 - **Replication Target**
9. **Quality of Service 「」**領域で、次のいずれかの操作を行います。
 - 既存PolicyのQoSポリシーがある場合は、そのポリシーを選択します。
 - でCustom Settings、IOPSのカスタマイズされた最小値、最大値、およびバースト値を設定するか、デフォルトのQoS値を使用します。

ベストプラクティス: IOPSの値を変更する場合は、10または100の単位で増分します。また、有効な整数を入力する必要があります。

ボリュームのバースト値はできるだけ高くします。バースト値を非常に高く設定することで、たまに発生する大規模ロックのシーケンシャルワークロードを迅速に処理できる一方で、平常時のIOPSは引き続き抑制することができます。



注意:

- QoSポリシーは、データベース、アプリケーション、またはインフラサーバがリブートすることはほとんどなく、ストレージへのアクセスが常に同じである必要がある場合など、サービス環境に最適です。カスタムQoSIOC自動化は、仮想デスクトップや専用のキオスクタイプのVMなど、日常的または数回の再起動、電源投入、または電源オフを行うことが可能な軽用途のVMに最適です。QoSIOC自動化ポリシーとQoSポリシーは一緒に使用しないでください。
- データストアのQoSSIOC設定を有効にすると、ボリュームレベルのQoS設定よりも優先されます。
- 最大IOPSまたはバーストIOPSの値が20,000 IOPSを超える場合、単一のボリュームでのレベルのIOPSを実現するには、キュー深度を深くするか、複数のセッションが必要になる場合があります。

10. OKをクリックします。

ボリュームのクローニング

ボリュームのクローンを作成して、データのポイントインタイムコピーを作成できます。ボリュームをクローニングすると、ボリュームのSnapshotが作成され、次にそのSnapshotが参照しているデータのコピーが作成されます。これは非同期のプロセスであり、クロー

ニングするボリュームのサイズおよび現在のクラスタの負荷によって所要時間が異なります。

開始する前に

- ・ クラスタが少なくとも1つ追加および実行されている必要があります。
- ・ ボリュームを少なくとも1つ作成しておく必要があります。
- ・ ユーザ アカウントが作成されている必要があります。
- ・ ボリュームのサイズと同じかそれ以上のプロビジョニングされていない利用可能なスペースが必要です。

タスク概要

クラスタでは、ボリューム1個につき一度に実行できるクローン要求は最大2つ、アクティブなボリュームのクローン処理は最大8件までサポートされます。これらの制限を超える要求はキューに登録され、あとから処理されます。

注 : クローンボリュームには、ソースボリュームのボリュームアクセスグループメンバーは継承されません。

注 : オペレーティングシステムは、クローンボリュームの処理方法が異なります。ESXi は、クローンボリュームをボリュームコピーまたはスナップショットボリュームとして処理します。ボリュームは、新しいデータストアの作成に使用できるデバイスになります。クローンボリュームのマウントと Snapshot LUN の処理の詳細については、VMware のマニュアルで、VMFS データストアコピーのマウントと重複する VMFS データストアの管理についてを参照してください。

手順

1. 選択 NetApp Element Management > Management.

注 : 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. Volumesサブタブをクリックします。

3. [Active]ビューで、クローニングするボリュームのチェックボックスを選択します。

4. Actionsをクリックします。

5. 表示されるメニューでClone、をクリックします。

6. Clone Volumeダイアログボックスで、新しくクローニングされたボリュームのボリューム名を入力します。

ヒント : わかりやすい命名のベストプラクティスを使用してください。これは、環境で複数のクラスタやvCenter Serverを使用している場合に特に重要です。

7. クローンボリュームのサイズ(GBまたはGiB)を選択します。

注 : デフォルトのボリュームサイズの単位はGBです。GBまたはGiB単位のサイズを使用してボリュームを作成できます。

- ・ 1GB=1,000,000,000バイト
- ・ 1GiB=1,073,741,824バイト

注 : クローンのボリュームサイズを拡張すると、末尾に空きスペースが追加された新しいボリュームが作成されます。ボリュームの使用方法によっては、新しい空きスペースを使用するために、空きスペースでパーティションの拡張または新しいパーティションの作成が必要になる場合があります。

8. 新しいクローンボリュームに関連付けるアカウントを選択します。

9. 新しいクローンボリュームのアクセスタイプとして次のいずれかを選択します。

- **ReadWrite**
- **Read Only**
- **Locked**

10. 必要に応じて512eの設定を調整します。

注:

- デフォルトでは、すべての新しいボリュームについて、512バイトエミュレーションが有効になります。
- VMwareではディスクリソースに512eが必要です。512eが有効になっていない場合は、VMFSを作成できず、ボリュームの詳細がグレー表示されます。

11. OKをクリックします。

注: クローニング処理が完了するまでの時間は、ボリュームサイズおよび現在のクラスタの負荷によって異なります。クローンボリュームがボリュームリストに表示されない場合は、ページを更新してください。

関連概念

[複数クラスタを管理する場合のオブジェクト名のベストプラクティス](#) (31ページ)

クラスタコンポーネントを簡単に識別できるように、NetApp Element Plug-in for vCenter Serverに関連するすべてのオブジェクトに一貫したわかりやすい命名規則を使用する必要があります。これは、特にvCenter Serverやクラスタを複数使用する環境において重要となります。

関連タスク

[クラスタの追加](#) (32ページ)

NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、Elementソフトウェアを実行するクラスタを追加できます。クラスタへの接続が確立されると、そのクラスタをNetApp Element Management拡張ポイントを使用して管理できるようになります。

[アカウントの作成](#) (100ページ)

アカウントを作成し、ボリュームへのアクセスを許可することができます。作成したアカウントにつき、最大で2000個のボリュームを割り当てることができます。各アカウント名はシステム内で一意である必要があります。

[ボリュームの作成](#) (81ページ)

新しいボリュームを作成し、そのボリュームを指定したアカウントに関連付けることができます (ボリュームはすべてアカウントに関連付ける必要があります)。この関連付けにより、アカウントは、iSCSIイニシエータ経由でCHAPクレデンシャルを使用してボリュームにアクセスできます。作成中に、ボリュームのQoS設定を指定することもできます。

ボリュームのバックアップとリストアの処理

NetApp Elementソフトウェアベースのストレージの外部にあるオブジェクトストアコンテナとの間でボリュームの内容をバックアップおよびリストアするようにシステムを設定できます。

リモートのNetApp Elementソフトウェアベースのシステムとの間でデータをバックアップおよびリストアすることもできます。1つのボリューム上で、一度に最大2つのバックアップまたはリストアの処理を実行できます。

ボリュームのバックアップ処理

NetApp Elementストレージ、およびAmazon S3またはOpenStack Swiftと互換性のあるセカンドリオブジェクトストアに、Elementボリュームをバックアップできます。

関連タスク

[Amazon S3オブジェクトストアへのボリュームのバックアップ](#) (91ページ)

Amazon S3と互換性のある外部のオブジェクトストアにNetApp Elementボリュームをバックアップできます。

[OpenStack Swiftオブジェクトストアへのボリュームのバックアップ](#) (92ページ)

OpenStack Swiftと互換性のある外部のオブジェクトストアにNetApp Elementボリュームをバックアップできます。

[Elementソフトウェアを実行しているクラスタへのボリュームのバックアップ](#) (92ページ)

NetApp Elementソフトウェアを実行しているクラスタにあるボリュームをリモートのElementクラスタにバックアップできます。クラスタ間でバックアップまたはリストアを実行する際には、システムによってクラスタ間の認証に使用するキーが生成されます。ソース クラスタはこのボリュームの一括書き込みキーを使用してデスティネーション クラスタに対して認証し、デスティネーションボリュームへの書き込みがセキュリティで保護されます。バックアップまたはリストアを実行する際には、処理を開始する前に、デスティネーションボリュームからボリュームの一括書き込みキーを生成する必要があります。

Amazon S3オブジェクトストアへのボリュームのバックアップ

Amazon S3と互換性のある外部のオブジェクトストアにNetApp Elementボリュームをバックアップできます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Volumes]サブタブをクリックします。
3. [Active]ビューで、バックアップするボリュームのチェック ボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Back Up to]をクリックします。
6. ダイアログ ボックスの[Back up volume to]で、[Amazon S3]を選択します。
7. [with the following data format]でオプションを選択します。
 - **Native** : NetApp Elementソフトウェアベースのストレージシステムのみが読み取り可能な圧縮形式。
 - **Uncompressed** : 他のシステムと互換性がある非圧縮形式。
8. [Host name]フィールドにオブジェクトストアへのアクセスに使用するホスト名を入力します。
9. [Access key ID]フィールドにアカウントのアクセス キーIDを入力します。
10. [Secret access key]フィールドにアカウントのシークレット アクセス キーを入力します。
11. [Amazon S3 bucket]フィールドにバックアップの格納先とするS3バケットを入力します。
12. オプション: [Prefix]フィールドにバックアップ ボリュームの名前のプレフィックスを入力します。
13. オプション: [Nametag]フィールドにプレフィックスに付加するネームタグを入力します。
14. [OK]をクリックします。

OpenStack Swiftオブジェクトストアへのボリュームのバックアップ

OpenStack Swiftと互換性のある外部のオブジェクトストアにNetApp Elementボリュームをバックアップできます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。
注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。
2. [Volumes]サブタブをクリックします。
3. [Active]ビューで、バックアップするボリュームのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Back Up to]をクリックします。
6. ダイアログボックスの[Back up volume to]で、[OpenStack Swift]を選択します。
7. [with the following data format]でオプションを選択します。
 - **Native** : NetApp Elementソフトウェアベースのストレージシステムのみが読み取り可能な圧縮形式。
 - **Uncompressed** : 他のシステムと互換性がある非圧縮形式。
8. [URL]フィールドにオブジェクトストアへのアクセスに使用するURLを入力します。
9. [User name]フィールドにアカウントのユーザ名を入力します。
10. [Authentication key]フィールドにアカウントの認証キーを入力します。
11. [Container]フィールドにバックアップの格納先とするコンテナを入力します。
12. オプション: [Prefix]フィールドにバックアップボリュームの名前のプレフィックスを入力します。
13. オプション: [Nametag]フィールドにプレフィックスに付加するネームタグを入力します。
14. [OK]をクリックします。

Elementソフトウェアを実行しているクラスタへのボリュームのバックアップ

NetApp Elementソフトウェアを実行しているクラスタにあるボリュームをリモートのElementクラスタにバックアップできます。クラスタ間でバックアップまたはリストアを実行する際には、システムによってクラスタ間の認証に使用するキーが生成されます。ソースクラスタはこのボリュームの一括書き込みキーを使用してデスティネーションクラスタに対して認証し、デスティネーションボリュームへの書き込みがセキュリティで保護されます。バックアップまたはリストアを実行する際には、処理を開始する前に、デスティネーションボリュームからボリュームの一括書き込みキーを生成する必要があります。

手順

1. デスティネーションクラスタを含むvCenterから、[NetApp Element Management] > [Management]を選択します。
注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。
2. [Volumes]サブタブをクリックします。
3. [Active]ビューで、デスティネーションボリュームのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。

5. 表示されたメニューで[Restore from]をクリックします。
6. ダイアログボックスの[Restore from]で、[NetApp Element]を選択します。
7. [with the following data format]でオプションを選択します。
 - **Native** : NetApp Elementソフトウェアベースのストレージシステムのみが読み取り可能な圧縮形式。
 - **Uncompressed** : 他のシステムと互換性がある非圧縮形式。
8. [Generate Key]をクリックして、デスティネーションボリュームに対するボリュームの一括書き込みキーを生成します。
9. ボリュームの一括書き込みキーをクリップボードにコピーします。これは以降のソースクラスタの手順で使用します。
10. ソースクラスタを含むvCenterから、[NetApp Element Management] > [Management]を選択します。
11. [Volumes]サブタブをクリックします。
12. [Active]ビューで、デスティネーションボリュームのチェックボックスを選択します。
13. [Actions]をクリックします。
14. 表示されたメニューで[Back Up to]をクリックします。
15. ダイアログボックスの[Back up volume to]で、[NetApp Element]を選択します。
16. [with the following data format]で、デスティネーションクラスタと同じオプションを選択します。
17. [Remote cluster MVIP]フィールドにデスティネーションボリュームのクラスタの管理仮想IPアドレスを入力します。
18. [Remote cluster user name]フィールドにデスティネーションクラスタのクラスタ管理者のユーザ名を入力します。
19. [Remote cluster user password]フィールドにデスティネーションクラスタのクラスタ管理者のパスワードを入力します。
20. デスティネーションクラスタで生成したキーを[Bulk volume write key]フィールドに貼り付けます。
21. [OK]をクリックします。

ボリュームのリストア処理

OpenStack SwiftやAmazon S3などのオブジェクトストアにあるバックアップからボリュームをリストアするときは、元のバックアッププロセスのマニフェスト情報が必要です。NetApp ElementベースのストレージシステムにバックアップされているNetApp Elementボリュームをリストアする場合、マニフェスト情報は不要です。SwiftおよびS3からのリストアに必要なマニフェスト情報は、[Reporting]タブの[Event Log]で確認できます。

関連タスク

[Amazon S3オブジェクトストア上のバックアップからのボリュームのリストア \(94ページ\)](#)

プラグインを使用して、Amazon S3オブジェクトストア上のバックアップからボリュームをリストアできます。

[OpenStack Swiftオブジェクトストア上のバックアップからのボリュームのリストア \(94ページ\)](#)

プラグインを使用して、OpenStack Swiftオブジェクトストア上のバックアップからボリュームをリストアできます。

[Elementソフトウェアを実行しているクラスタ上のバックアップからのボリュームのリストア \(95ページ\)](#)

NetApp Elementソフトウェアを実行しているクラスタ上のバックアップからボリュームをリストアできます。クラスタ間でバックアップまたはリストアを実行する際には、システムによってクラスタ間の認証に使用するキーが生成されます。ソースクラスタはこのボリュームの一括書き込みキーを使用してデスティネーションクラスタに対して認証し、デスティネーションボリュームへの書き込みがセキュリティで保護されます。バックアップまたはリストアを実行する際には、処理を開始する前に、デスティネーションボリュームからボリュームの一括書き込みキーを生成する必要があります。

Amazon S3オブジェクトストア上のバックアップからのボリュームのリストア

プラグインを使用して、Amazon S3オブジェクトストア上のバックアップからボリュームをリストアできます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Reporting]を選択します。
注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。
2. [Event Log]サブタブをクリックします。
3. リストアする必要のあるバックアップを作成したバックアップイベントを選択します。
4. イベントの[Details]ボタンをクリックします。
5. 表示されたメニューで[View Details]をクリックします。
6. マニフェスト情報をクリップボードにコピーします。
7. [Management] > [Volumes]の順にクリックします。
8. [Active]ビューで、リストアするボリュームのチェックボックスを選択します。
9. [Actions]をクリックします。
10. 表示されたメニューで[Restore from]をクリックします。
11. [Restore Volume]ダイアログボックスの[Restore from]で、[Amazon S3]を選択します。
12. [with the following data format]でオプションを選択します。
 - **Native** : NetApp Elementソフトウェアベースのストレージシステムのみが読み取り可能な圧縮形式。
 - **Uncompressed** : 他のシステムと互換性がある非圧縮形式。
13. [Host name]フィールドにオブジェクトストアへのアクセスに使用するホスト名を入力します。
14. [Access key ID]フィールドにアカウントのアクセスキーIDを入力します。
15. [Secret access key]フィールドにアカウントのシークレットアクセスキーを入力します。
16. [Amazon S3 bucket]フィールドにバックアップの格納先とするS3バケットを入力します。
17. [Manifest]フィールドにマニフェスト情報を貼り付けます。
18. [OK]をクリックします。

OpenStack Swiftオブジェクトストア上のバックアップからのボリュームのリストア

プラグインを使用して、OpenStack Swiftオブジェクトストア上のバックアップからボリュームをリストアできます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Reporting]を選択します。

注 : 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Event Log]サブタブをクリックします。
3. リストアする必要のあるバックアップを作成したバックアップ イベントを選択します。
4. イベントの[Details]ボタンをクリックします。
5. 表示されたメニューで[View Details]をクリックします。
6. マニフェスト情報をクリップボードにコピーします。
7. [Management] > [Volumes]の順にクリックします。
8. [Active]ビューで、リストアするボリュームのチェック ボックスを選択します。
9. [Actions]をクリックします。
10. 表示されたメニューで[Restore from]をクリックします。
11. [Restore Volume]ダイアログ ボックスの[Restore from]で、[OpenStack Swift]を選択します。
12. [with the following data format]でオプションを選択します。
 - **Native** : NetApp Element ソフトウェアベースのストレージ システムのみが読み取り可能な圧縮形式。
 - **Uncompressed** : 他のシステムと互換性がある非圧縮形式。
13. [URL]フィールドにオブジェクト ストアへのアクセスに使用する URL を入力します。
14. [User name]フィールドにアカウントのユーザ名を入力します。
15. [Authentication key]フィールドにアカウントの認証キーを入力します。
16. [Container]フィールドにバックアップが格納されているコンテナの名前を入力します。
17. [Manifest]フィールドにマニフェスト情報を貼り付けます。
18. [OK]をクリックします。

Element ソフトウェアを実行しているクラスタ上のバックアップからのボリュームのリストア

NetApp Element ソフトウェアを実行しているクラスタ上のバックアップからボリュームをリストアできます。クラスタ間でバックアップまたはリストアを実行する際には、システムによってクラスタ間の認証に使用するキーが生成されます。ソース クラスタはこのボリュームの一括書き込みキーを使用してデスティネーション クラスタに対して認証し、デスティネーション ボリュームへの書き込みがセキュリティで保護されます。バックアップまたはリストアを実行する際には、処理を開始する前に、デスティネーション ボリュームからボリュームの一括書き込みキーを生成する必要があります。

手順

1. デスティネーション クラスタを含むvCenterから、[NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注 : 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。
2. [Volumes]サブタブをクリックします。
3. [Active]ビューで、リストアするボリュームのチェック ボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Restore from]をクリックします。
6. [Restore Volume]ダイアログ ボックスの[Restore from]で、[NetApp Element]を選択します。

7. [with the following data format]でオプションを選択します。
 - **Native** : NetApp Elementソフトウェアベースのストレージシステムのみが読み取り可能な圧縮形式。
 - **Uncompressed** : 他のシステムと互換性がある非圧縮形式。
8. [Generate Key]をクリックして、デスティネーションボリュームに対するボリュームの一括書き込みキーを生成します。
9. ボリュームの一括書き込みキーをクリップボードにコピーします。これは以降のソースクラスタの手順で使用します。
10. ソースクラスタを含むvCenterから、[NetApp Element Management] > [Management]を選択します。
11. [Volumes]サブタブをクリックします。
12. [Active]ビューで、リストアに使用するボリュームのチェックボックスを選択します。
13. [Actions]をクリックします。
14. 表示されたメニューで[Backup to]をクリックします。
15. ダイアログボックスの[Back up volume to]で、[NetApp Element]を選択します。
16. [with the following data format]で、バックアップに一致するオプションを選択します。
17. [Remote cluster MVIP]フィールドにデスティネーションボリュームのクラスタの管理仮想IPアドレスを入力します。
18. [Remote cluster user name]フィールドにデスティネーションクラスタのクラスタ管理者のユーザ名を入力します。
19. [Remote cluster user password]フィールドにデスティネーションクラスタのクラスタ管理者のパスワードを入力します。
20. デスティネーションクラスタで生成したキーを[Bulk volume write key]フィールドに貼り付けます。
21. [OK]をクリックします。

ボリュームの削除

ネットアップElement Management拡張ポイントを使用して、ネットアップElementクラスタから1つ以上のボリュームを削除できます。

タスク概要

削除したボリュームはすぐにページされるわけではありません。ボリュームを削除したあと約8時間はリストア可能です。システムがボリュームをページする前にボリュームをリストアするDeletedManagement > Volumesごとも、のビューからボリュームを手動でページすることもできます。ボリュームをリストアすると、そのボリュームがオンラインに戻り、iSCSI接続を再確立できます。



注意 : 管理サービスに関連付けられた永続ボリュームは、インストール時またはアップグレード時に作成され、新しいアカウントに割り当てられます。永続ボリュームを使用している場合は、ボリュームまたは関連するアカウントを変更または削除しないでください。



注意 : Snapshotの作成に使用しInactiveProtection > Snapshotsたボリュームが削除されると、そのSnapshotに関連付けられているSnapshotがページのビューに表示されます。削除されたInactive

スボリュームがページされると、ビュー内のスナップショットもシステムから削除されます。

手順

1. NetApp Element Management > Managementの順に選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. Volumesサブタブをクリックします。
3. 次の手順で1つ以上のボリュームを削除します。
 1. Activeビューから、削除する各ボリュームのチェックボックスをオンにします。
 2. Actionsをクリックします。
 3. 表示されるメニューでDelete、をクリックします。

注:プラグインでは、データストアを含むボリュームは削除できません。

4. 操作を確定します。
ボリュームがActiveビューからDeletedVolumesページのビューに移動します。

関連タスク

[削除したボリュームのリストア](#) (98ページ)

NetApp Elementシステムでは、削除したボリュームのうち、ページされていないボリュームをリストアできます。

ボリュームのページ

削除したボリュームを手動でページできます。

タスク概要

削除したボリュームは、8時間後に自動的にページされます。ただし、スケジュールされているページ時刻より前にボリュームをページする場合は、次の手順に従って手動でページできます。



注意:ページしたボリュームは、システムからただちに完全に削除されます。ボリューム内のデータはすべて失われます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Volumes]サブタブをクリックします。
3. ビュー フィルタを選択し、ドロップダウン リストから[Deleted]を選択します。
4. ページするボリュームを1つ以上選択します。
5. [Purge]をクリックします。
6. 操作を確定します。

削除したボリュームのリストア

NetApp Elementシステムでは、削除したボリュームのうち、ページされていないボリュームをリストアできます。

タスク概要

削除したボリュームは約8時間後に自動的にページされます。ページ済みのボリュームはリストアできません。

注 : 削除したあとにリストアしたボリュームは、ESXiで検出されません（データストアが存在する場合はデータストアも検出されません）。ESXi iSCSIアダプタから静的なターゲットを削除し、アダプタを再スキャンしてください。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注 : 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Volumes]サブタブをクリックします。
3. ビュー フィルタを選択し、ドロップダウン リストから[Deleted]を選択します。
4. リストアするボリュームを1つ以上選択します。
5. [Restore]をクリックします。
6. ビュー フィルタを選択し、ドロップダウン リストから[Active]を選択します。
7. ボリュームとすべての接続がリストアされたことを確認します。

アクセス グループへのボリュームの追加

ボリューム アクセス グループにボリュームを追加することができます。各ボリュームは、複数のボリューム アクセス グループに属することができます。各ボリュームが属しているグループは、[Active]ボリューム ビューで確認できます。

開始する前に

- クラスタが少なくとも1つ追加および実行されている必要があります。
- 少なくとも1つのアクセス グループが必要です。
- 少なくとも1つのアクティブなボリュームが必要です。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注 : 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Volumes]サブタブをクリックします。
3. アクセス グループに追加する各ボリュームのチェック ボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで、[Add to Access Group]を選択します。
6. 表示されたダイアログ ボックスで詳細を確認し、ドロップダウン リストからボリューム アクセス グループを選択します。
7. [OK]をクリックします。

関連タスク

[ボリュームの作成](#) (81ページ)

新しいボリュームを作成し、そのボリュームを指定したアカウントに関連付けることができます（ボリュームはすべてアカウントに関連付ける必要があります）。この関連付けにより、アカウントは、iSCSIイニシエータ経由でCHAPクレデンシャルを使用してボリュームにアクセスできます。作成中に、ボリュームのQoS設定を指定することもできます。

[アクセス グループの作成](#) (103ページ)

1つ以上のイニシエータを含むボリューム アクセス グループを作成できます。クライアントのFibre Channel (WWPN) イニシエータまたはiSCSI (IQN) イニシエータをボリューム アクセス グループ内のボリュームにマッピングすることで、ネットワークとボリュームの間の安全なデータI/O通信が実現します。

アクセス グループからのボリュームの削除

アクセス グループからボリュームを削除できます。

タスク概要

アクセス グループからボリュームを削除すると、グループはそのボリュームにアクセスできなくなります。



注意 : アクセス グループからボリュームを削除すると、ボリュームへのホストアクセスが中断される可能性があります。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注 : 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Volumes]サブタブをクリックします。
3. アクセス グループから削除する各ボリュームのチェック ボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Remove from Access Group]を選択します。
6. 表示されたダイアログ ボックスで詳細を確認し、選択した各ボリュームへのアクセスを中止するボリューム アクセス グループを選択します。
7. [OK]をクリックします。

複数のボリュームへのQoSポリシーの適用

既存のQoSポリシーを複数のボリュームに適用することができます。このプロセスは、ポリシーを1つ以上のボリュームに一括して適用する場合に使用します。

開始する前に

一括して適用するQoSポリシーを用意しておきます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。
2. [Volumes]サブタブをクリックします。
3. QoSポリシーを適用する各ボリュームのチェック ボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Apply QoS Policy]を選択します。
6. ダイアログ ボックスで、選択したボリュームに適用するQoSポリシーをドロップダウン リストから選択します。
7. [OK]をクリックします。

関連タスク

[QoSポリシーの作成](#) (107ページ)

ネットアップ Element Management拡張ポイントからQoSポリシーを作成し、ボリュームの作成時に適用することができます。

ボリュームのQoSポリシーの関連付けの変更

NetApp Element Management拡張ポイントを使用して、QoSポリシーのボリュームへの関連付けを解除したり、別のQoSポリシーやカスタムのQoS設定を選択したりできます。

開始する前に

変更するボリュームにQoSポリシーが関連付けられていることが前提です。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注 :複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Volumes]サブタブをクリックします。
3. 変更するQoSポリシーが含まれているボリュームのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Edit]を選択します。
6. ダイアログボックスの[Quality of Service]で、ボリュームに適用する新しいQoSポリシーまたはカスタム設定を選択します。
7. [Custom Settings]を選択した場合は、[Min IOPS]、[Max IOPS]、および[Burst IOPS]の値を変更します。

注 :[Reset Default QoS]をクリックすると、デフォルトのIOPS値に戻すことができます。

8. [OK]をクリックします。

ユーザ アカウントの管理

ユーザ アカウントは、NetApp Elementソフトウェアベースのネットワーク上のストレージリソースへのアクセスを制御するために使用します。ボリュームを作成するには、ユーザアカウントが少なくとも1つ必要です。ボリュームには、作成時にアカウントが割り当てられます。仮想ボリュームを作成した場合は、ストレージコンテナがアカウントになります。アカウントには、そのアカウントに関連付けられているボリュームへのアクセスに必要なCHAP認証が含まれています。アカウントに関連付けることのできるボリュームの最大数は2,000ですが、1つのボリュームが属することのできるアカウントは1つだけです。

ユーザ アカウントは、NetApp Element Management拡張ポイントで管理できます。

アカウントの作成

アカウントを作成し、ボリュームへのアクセスを許可することができます。作成したアカウント1つにつき、最大で2000個のボリュームを割り当てるすることができます。各アカウント名はシステム内で一意である必要があります。

開始する前に

クラスタが少なくとも1つ追加および実行されている必要があります。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Accounts]サブタブをクリックします。
3. [Create Account]をクリックします。
4. ユーザ名を入力します。

ヒント:わかりやすい命名のベストプラクティスを使用してください。これは、環境で複数のクラスタやvCenter Serverを使用している場合に特に重要です。

5. [CHAP Settings]セクションで次の手順を実行します。
 1. ノードセッションのCHAP認証用イニシエータシークレットを入力します。
 2. ノードセッションのCHAP認証用ターゲットシークレットを入力します。

注:イニシエータとターゲットには違うシークレットを指定する必要があります。これらのフィールドを空白にすると、システムによって認証クレデンシャルが生成されます。
6. [OK]をクリックします。

アカウントの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[Management]タブにある[Accounts]ページで、すべてのアカウントのリストを確認できます。

Account ID

システムによって生成されたアカウントのID。

User name

アカウントの作成時に指定した名前。

Number of Volumes

アカウントに割り当てられているアクティブボリュームの数。

Status

アカウントのステータス。

アカウントの編集

アカウントを編集して、ステータスまたはCHAPシークレットを変更できます。CHAP設定を変更すると、ホストと関連付けられたボリュームの間の接続が切断されることがあります。

タスク概要

管理ノードに永続ボリュームを使用している場合は、永続ボリュームに関連付けられているアカウントの名前を変更しないでください。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Accounts]サブタブをクリックします。
3. 編集するアカウントのチェックボックスを選択します。

4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Edit]をクリックします。
6. オプション: [Edit Account]で、アカウントのアクセスステータスを編集します。



注意: アクセスを[Locked]に変更すると、そのアカウントへのiSCSI接続はすべて停止され、そのアカウントにはアクセスできなくなります。アカウントに関連付けられているボリュームは維持されますが、iSCSIで検出できなくなります。

7. オプション: ノードセッションの認証に使用するイニシエータシークレットとターゲットシークレットのクレデンシャルを編集します。
注: クレデンシャルを変更しない場合、同じクレデンシャルが使用されます。クレデンシャルのフィールドを空白にすると、システムによって新しいパスワードが生成されます。
8. [OK]をクリックします。

アカウントの削除

ボリュームの関連付けを解除したアカウントは、NetApp Element Management拡張ポイントを使用して削除できます。

開始する前に

アカウントに関連付けられているボリュームを削除およびページするか、別のアカウントに割り当て直します。

タスク概要

管理ノードに永続ボリュームを使用している場合、永続ボリュームに関連付けられているアカウントは削除しないでください。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Accounts]サブタブをクリックします。
3. 削除するアカウントのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Delete]を選択します。
6. 操作を確定します。

関連タスク

[ボリュームの削除](#) (96ページ)

ネットアップElement Management拡張ポイントを使用して、ネットアップElementクラスタから1つ以上のボリュームを削除できます。

[ボリュームのページ](#) (97ページ)

削除したボリュームを手動でページできます。

ボリューム アクセス グループ[†]

ボリューム アクセス グループは、ユーザがiSCSIイニシエータまたはFibre Channelイニシエータを使用してアクセスできるボリュームの集まりです。

アクセス グループを作成するには、iSCSIイニシエータのIQNまたはFibre ChannelのWWPNをボリュームのグループにマッピングします。アクセス グループに追加した各IQNは、CHAP認証なしでグループ内の各ボリュームにアクセスできます。アクセス グループに追加した各WWPNは、アクセス グループ内のボリュームへのFibre Channelネットワークアクセスを許可します。

注 : ボリューム アクセス グループには次の制限があります。

- 1つのアクセス グループに含めることができるIQNまたはWWPNは最大64個です。
- 1つのアクセス グループに含めることができるボリュームは最大2,000個です。
- 1つのIQNまたはWWPNが属することのできるアクセス グループは1つだけです。
- 1つのボリュームが最大4つのアクセス グループに属することができます。

ボリューム アクセス グループは、NetApp Element Management拡張ポイントで管理できます。

アクセス グループの作成

1つ以上のイニシエータを含むボリューム アクセス グループを作成できます。クライアントのFibre Channel (WWPN) イニシエータまたはiSCSI (IQN) イニシエータをボリューム アクセス グループ内のボリュームにマッピングすることで、ネットワークとボリュームの間の安全なデータI/O通信が実現します。

手順

- [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注 : 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

- [Access Groups]サブタブをクリックします。
- [Create Access Group]をクリックします。
- ボリューム アクセス グループの名前を入力します。

ヒント : わかりやすい命名のベストプラクティスを使用してください。これは、環境で複数のクラスタやvCenter Serverを使用している場合に特に重要です。

- [Select an Initiator] ドロップダウン リストから未割り当てのIQNまたはWWPNを選択し、[Add Initiator]をクリックします。
注 : イニシエータは、ボリューム アクセス グループの作成後に追加または削除できます。
- [OK]をクリックします。

ボリューム アクセス グループの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[Management]タブにある[Access Groups]ページで、ボリューム アクセス グループの情報を確認できます。

ID

システムによって生成されたボリューム アクセス グループのID。

Name

ボリューム アクセス グループの作成時に指定した名前。

Active Volumes

ボリューム アクセス グループ内のアクティブ ボリュームの数。

Initiators

ボリューム アクセス グループに接続されているイニシエータの数。

アクセス グループの編集

NetApp Element Management拡張ポイントで、ボリューム アクセス グループの名前を編集したり、イニシエータの追加や削除を行ったりすることができます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注 :複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Access Groups]サブタブをクリックします。
3. 編集するボリューム アクセス グループのチェック ボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Edit]を選択します。
6. オプション: アクセス グループの名前を変更します。
7. オプション: イニシエータを追加または削除します。

注 :イニシエータを削除するときは、ごみ箱アイコンをクリックして削除します。

イニシエータを削除すると、そのイニシエータは該当するボリューム アクセス グループ内のボリュームにアクセスできなくなります。ボリュームへの通常のアカウント アクセスは引き続き可能です。

8. [OK]をクリックします。

アクセス グループの削除

NetApp Element Management拡張ポイントを使用して、ボリューム アクセス グループを削除できます。ボリューム アクセス グループを削除する前に、イニシエータIDを削除したり、グループとボリュームの関連付けを解除したりする必要はありません。アクセス グループを削除すると、ボリュームへのグループ アクセスが切断されます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注 :複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Access Groups]サブタブをクリックします。
3. 削除するボリューム アクセス グループのチェック ボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Delete]を選択します。
6. 操作を確定します。

イニシエータ

イニシエータはクライアントとボリューム間の通信のエントリ ポイントとして機能し、外部クライアントからクラスタ内のボリュームへのアクセスを可能にします。イニシエータを作成および削除したり、管理やボリューム アクセスを簡単にするためにわかりやすいエイリアスを指定したりすることができます。イニシエータをボリューム アクセス グループに追加すると、グループ内のすべてのボリュームへのアクセスが可能になります。

イニシエータは、NetApp Element Management拡張ポイントの[Management] > [Initiators] ページで確認できます。

イニシエータの作成

iSCSIまたはFibre Channelイニシエータを作成し、オプションでエイリアスを割り当てるこ
とができます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナ
ビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Initiators]サブタブをクリックします。
3. [Create Initiator]をクリックします。
4. 単一のイニシエータを作成するには、次の手順を実行します。
 1. [Create a Single Initiator]を選択します。
 2. イニシエータのIQNまたはWWPNを[IQN/WWPN]フィールドに入力します。
 - イニシエータIQNの有効な形式は、iqn.yyyy-mmです。yとmは数字で、続けて任
意の文字列を指定します。使用できる文字は、数字、小文字のアルファベット、
ピリオド (.)、コロン (:), ダッシュ (-) です。
形式の例を次に示します。

iqn.2010-01.com.solidfire:c2r9.fc0.2100000e1e09bb8b
 - Fibre ChannelイニシエータWWPNの有効な形式は、:Aa:bB:CC:dd:11:22:33:44
またはaabBCCdd11223344です。
形式の例を次に示します。

5f:47:ac:c0:5c:74:d4:02

3. イニシエータのフレンドリ名を[Alias]フィールドに入力します。
5. 複数のイニシエータを作成するには、次の手順を実行します。
 1. [Create Multiple Initiators]を選択します。
 2. 次のいずれかを実行します。
 - [Scan Hosts]をクリックして、vSphereホストをスキャンしてNetApp Elementクラ
スタで定義されていないイニシエータ値を検索します。
 - IQNまたはWWPNのリストをテキスト ボックスに入力し、[Add Initiators]をク
リックします。
 3. オプション: [Alias]で、エイリアスを追加する各エントリのフィールドをクリック
します。
 4. オプション: 必要に応じて、リストからイニシエータを削除します。
6. [OK]をクリックします。

イニシエータの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[Management]タブにある[Initiators]ページでは、イニシエータに関する情報を確認できます。

ID

システムによって生成されたイニシエータのID。

Name

イニシエータの作成時に指定した名前。

Alias

イニシエータに指定したフレンドリ名（該当する場合）。

Access Group

イニシエータが所属するボリューム アクセス グループ。

イニシエータの編集

既存のイニシエータのエイリアスを変更するか、既存のエイリアスがない場合はエイリアスを追加できます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注 :複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Initiators]サブタブをクリックします。
3. 編集するイニシエータのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Edit]をクリックします。
6. イニシエータの新しいエイリアスを[Alias]フィールドに入力します。
7. [OK]をクリックします。

イニシエータの削除

不要になったイニシエータを削除できます。イニシエータを削除すると、関連するすべてのボリューム アクセス グループから削除されます。該当するイニシエータを使用した接続は、接続をリセットするまでは有効なままでです。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注 :複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Initiators]サブタブをクリックします。
3. 削除するイニシエータのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Delete]を選択します。
6. 操作を確定します。

ボリューム アクセス グループへのイニシエータの追加

アクセス グループにイニシエータを追加すると、そのイニシエータはボリューム アクセス グループ内のボリュームにCHAP認証なしでアクセスできるようになります。ボリュ

ーム アクセス グループに追加されたイニシエータは、そのボリューム アクセス グループ内のすべてのボリュームにアクセスできます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注 :複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Initiators]サブタブをクリックします。
3. アクセス グループに追加するイニシエータのチェック ボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Add to Access Group]をクリックします。
6. [Add to Access Group]ダイアログで、ドロップダウン リストからアクセス グループを選択します。
7. [OK]をクリックします。

QoSポリシー

標準的なサービス品質設定をQoSポリシーとして作成および保存して、複数のボリュームに適用することができます。QoSポリシーは作成、編集、および削除できます。

QoS ポリシーは、データベース、アプリケーション、またはインフラサーバガリブートすることはほとんどなく、ストレージへのアクセスが常に同じである必要がある場合など、サービス環境に最適です。QoSIOC 自動化は、仮想デスクトップや専用のキオスクタイプの VM など、日常的または数回の再起動、電源投入、または電源オフが可能な軽用途の VM に最適です。QoSIOC 自動化ポリシーと QoS ポリシーは一緒に使用しないでください。QoSポリシーを使用する場合は、QoSIOCを有効にしないでください。QoSIOC は、ボリューム QoS 設定の QoS 値を上書きして調整します。

QoS ポリシーはManagement > QoS PoliciesネットアップElement Management 拡張ポイントからページに表示できます。

注 :QoSポリシーを使用するには、Element 10.0以降のクラスタを選択する必要があります。10.0より前のクラスタではQoSポリシーを使用できません。

QoSポリシーの作成

ネットアップ Element Management拡張ポイントからQoSポリシーを作成し、ボリュームの作成時に適用することができます。

開始する前に

注 :QoSIOC 自動化ポリシーと QoS ポリシーは一緒に使用しないでください。QoS ポリシーを使用する場合は、QoSIOCを有効にしないでください。QoSIOC は、ボリューム QoS 設定の QoS 値を上書きして調整します。

手順

1. NetApp Element Management > Managementの順に選択します。

注 :複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. QoS Policiesサブタブをクリックします。
3. Create QoS Policyをクリックします。
4. Policy Nameを入力します。

ヒント :わかりやすい命名のベストプラクティスを使用してください。これは、環境で複数のクラスタやvCenter Serverを使用している場合に特に重要です。

5. **Min IOPS**、**Max IOPS**、**Burst IOPS**およびの値を入力します。
6. **OK**をクリックします。

QoSポリシーの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[Management]タブにある[QoS Policies]ページで、QoSポリシーに関する情報を確認できます。

ID

システムによって生成されたQoSポリシーのID。

Name

ユーザが定義したQoSポリシーの名前。

Min IOPS

ボリュームに対して保証されている最小IOPS。

Max IOPS

ボリュームに対して許可されている最大IOPS。

Burst IOPS

ボリュームに対して短期間で許可されている最大IOPS。デフォルト値は15,000です。

Volumes

ポリシーを使用しているボリュームの数。数字をクリックすると、ポリシーが適用されたボリュームのリストが表示されます。

QoSポリシーの編集

NetApp Element Management拡張ポイントで、既存のQoSポリシーの名前を変更したり、ポリシーに関連付けられている値を編集したりできます。QoSポリシーの変更は、そのポリシーに関連付けられているすべてのボリュームに反映されます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。
注 :複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。
2. [QoS Policies]サブタブをクリックします。
3. 編集するQoSポリシーのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Edit]を選択します。
6. [Edit QoS Policy]ダイアログボックスで、必要に応じて次のプロパティを変更します。
 - Policy Name
 - Min IOPS
 - Max IOPS
 - Burst IOPS
注 :[Reset Default QoS]をクリックすると、デフォルトのIOPS値に戻すことができます。
7. [OK]をクリックします。

QoSポリシーの削除

NetApp Element Management拡張ポイントから、不要になったQoSポリシーを削除できます。QoSポリシーを削除すると、そのポリシーに関連付けられているすべてのボリュームのQoS設定は維持されますが、ポリシーとの関連付けは解除されます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [QoS Policies]サブタブをクリックします。
3. 削除するQoSポリシーのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Delete]を選択します。
6. 操作を確定します。

データ保護

[Protection]タブでは、データのコピーが必要な場所に確実に作成されて格納されるようにするためのタスクを実行できます。具体的には、ボリュームSnapshot、グループSnapshot、およびSnapshotスケジュールの作成と管理、リモートクラスタ間のレプリケーションのためのボリュームペア関係とクラスタペア関係の作成です。

ボリュームSnapshot

ボリュームSnapshotは、ボリュームのポイントインタイムコピーです。ボリュームSnapshotの作成は少量のシステムリソースとスペースしか使用しないため、クローニングよりも短い時間で完了します。Snapshotを使用して、Snapshotが作成された時点の状態にボリュームをロールバックできます。ただし、Snapshotはボリュームメタデータの単なるレプリカであるため、マウントや書き込みはできません。

SnapshotをリモートのNetApp Elementクラスタにレプリケートして、ボリュームのバックアップコピーとして使用できます。レプリケートしたSnapshotを使用して、ボリュームを特定の時点にロールバックできます。また、レプリケートしたSnapshotからボリュームのクローンを作成できます。

ボリュームSnapshotは、[NetApp Element Management] > [Management] > [Volumes]ページで作成できます。作成したボリュームSnapshotは、[NetApp Element Management] > [Protection] > [Snapshots]ページで管理できます。

ボリュームSnapshotの作成

アクティブボリュームのSnapshotを作成すると、任意の時点におけるボリュームイメージを保持できます。Snapshotを今すぐ作成するか、スケジュールを作成してボリュームのSnapshotがあとで自動的に作成されるようにすることができます。1つのボリュームに最大32個のSnapshotを作成できます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Volumes]サブタブをクリックします。
3. [Active]ビューで、Snapshotに使用するボリュームのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Create Snapshot]を選択します。
6. オプション: [Create Snapshot]ダイアログボックスで、Snapshotの名前を入力します。

ヒント:わかりやすい命名のベストプラクティスを使用してください。これは、環境で複数のクラスタやvCenter Serverを使用している場合に特に重要です。

注:Snapshotの名前を入力しなかった場合、デフォルトではSnapshotの作成日時が名前として使用されます。

7. オプション: 親ボリュームがペアリングされている場合にレプリケーションにSnapshotも含まれるようにするには、[Include snapshot in replication when paired]チェックボックスを選択します。
8. Snapshotの保持期間として次のいずれかを選択します。
 - **Keep forever**: Snapshotをシステム上に無期限に保持します。

- **Set retention period** : Snapshotをシステム上に保持する期間（日数、時間、または分）を設定します。

注 : 保持期間には、(Snapshotの作成時間からではなく) 現在の時刻からの期間を指定します。

9. 単一のSnapshotを今すぐ作成するには、[Take snapshot now]を選択します。
10. スケジュールを設定してあとでSnapshotを作成するには、次の手順を実行します。
 1. [Create snapshot schedule]を選択します。
 2. スケジュール名を入力します。
 3. スケジュールタイプをリストから選択し、スケジュールの詳細を設定します。
 4. オプション: スケジュールしたSnapshotの作成を定期的に繰り返すには、[Recurrent Schedule]チェックボックスを選択します。
11. [OK]をクリックします。

ボリュームSnapshotの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Snapshots]ページで、クラスタ上のボリュームSnapshotに関する情報を確認できます。

次のビューでSnapshotをフィルタすることもできます。

- **Individual** : グループSnapshotのメンバーではないボリュームSnapshot。
- **Members** : グループSnapshotのメンバーであるボリュームSnapshot。
- **Inactive** : 削除されたがまだページされていないボリュームから作成されたボリュームSnapshot。

ID

システムによって生成されたSnapshotのID。

Snapshot UUID

Snapshotの一意のID。

Name

Snapshotのユーザが定義した名前またはシステムのデフォルト名。

Size

ユーザが定義したSnapshotのサイズ。

Volume ID

Snapshotの作成元のボリュームのID。

Volume Name

ユーザが定義したボリュームの名前。

Account

ボリュームに関連付けられているアカウント。

Volume Size

Snapshotの作成元のボリュームのサイズ。

Create Date

Snapshotが作成された日時。

Expiration Date

保持期間の定義に従ってSnapshotが削除される日時。

Group Snapshot ID

Snapshotが属するグループのID(他のボリュームSnapshotとグループ化されている場合)。

Remote Replication

NetApp Elementソフトウェアを実行しているリモート クラスタへのSnapshotのレプリケーションが有効かどうかを示します。

有効な値は次のとおりです。

- `True` : Snapshotのリモートレプリケーションが有効です。
- `False` : Snapshotのリモートレプリケーションが無効です。

Remote Status

NetApp Elementソフトウェアを実行しているリモート クラスタ上のSnapshotのステータスを示します。

有効な値は次のとおりです。

- `Present` : リモート クラスタにSnapshotが存在します。
- `Not Present` : リモート クラスタにSnapshotが存在しません。
- `Syncing` : ターゲット クラスタがSnapshotをレプリケート中です。
- `Deleted` : ターゲットがSnapshotをレプリケートしたあとで削除しました。

Snapshotの編集

Snapshotのレプリケーション設定または保持期間を変更できます。指定した保持期間は、新しい間隔の開始時点からの期間です。保持期間には、(Snapshotの作成時間からではなく) 現在の時刻からの期間を指定します。間隔は、分、時間、および日数で指定できます。

手順

1. NetApp Element Management > Protectionの順に選択します。

注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. Snapshotsサブタブで、次の 2 つのビューのいずれかを選択します。

- `Individual` : グループスナップショットのメンバーではないボリュームスナップショット。
- `Members` : グループスナップショットのメンバーであるボリュームスナップショット。

3. 編集するボリュームSnapshotのチェックボックスを選択します。

4. Actionsをクリックします。

5. 表示されるメニューでEdit、を選択します。

6. オプション: `Include snapshot in replication when paired`このチェックボックスをオンにすると、親ボリュームがペアになったときに、スナップショットがレプリケーションでキャプチャされます。

注: Flash ベースの vSphere Web クライアントからプラグインを使用している場合は、ペアリングが機能しないときにスナップショットをレプリケーションに含めるように設定を変更します。代わりData Protection > Snapshots > Editに、HTML5 vSphere Web クライアントからプラグインを使用するか、Element UI 内の設定を変更できます ()。

7. オプション: Snapshotの保持期間として次のいずれかを選択します。

- **Keep forever** : システム上の Snapshot を無期限に保持します。
- **Set retention period** : システムがスナップショットを保持する期間（日数、時間数、または分数）を決定します。

注 : 保持期間には、(Snapshotの作成時間からではなく) 現在の時刻からの期間を指定します。

8. OKをクリックします。

Snapshotからのボリュームのクローニング

ボリュームのSnapshotから新しいボリュームを作成できます。この処理では、Snapshotの作成時点でボリュームに含まれていたデータを使用して新しいボリュームをクローニングします。ボリュームの他のSnapshotに関する情報も新しく作成されたボリュームに保存されます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。

注 : 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Snapshots]サブタブで、次の2つのうちのどちらかのビューを選択します。
 - **Individual** : グループSnapshotのメンバーではないボリュームSnapshot。
 - **Members** : グループSnapshotのメンバーであるボリュームSnapshot。
3. ボリュームとしてクローニングするボリュームSnapshotのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで、[Clone Volume from Snapshot]をクリックします。
6. [Clone Volume from Snapshot]ダイアログボックスで、ボリューム名を入力します。
7. 新しいボリュームの合計サイズを入力し、単位 (GBまたはGiB) を選択します。
8. ボリュームのアクセスタイプを選択します。
 - **Read Only** : 読み取り処理のみ可能です。
 - **Read / Write** : 読み取りと書き込みが可能です。
 - **Locked** : 読み取りも書き込みもできません。
 - **Replication Target** : レプリケートされたボリュームペアのターゲットボリュームとして指定されます。
9. 新しいボリュームに関連付けるユーザ アカウントをリストから選択します。
10. [OK]をクリックします。
11. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。
12. [Volumes]サブタブをクリックします。
13. [Active]ビューで、新しいボリュームがリストに表示されていることを確認します。

注 : 新しいボリュームがリストに表示されるまで、必要に応じてページを更新します。

Snapshotへのボリュームのロールバック

ボリュームはSnapshotにいつでもロールバックできます。そのSnapshotの作成後にボリュームに対して行われた変更はすべて元に戻ります。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Snapshots]サブタブで、次の2つのうちのどちらかのビューを選択します。
 - **Individual**: グループSnapshotのメンバーではないボリュームSnapshot。
 - **Members**: グループSnapshotのメンバーであるボリュームSnapshot。
3. ボリュームのロールバックに使用するボリュームSnapshotのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Rollback Volume to Snapshot]を選択します。
6. オプション: Snapshotにロールバックする前にボリュームの現在の状態を保存するには、次の手順を実行します。
 1. [Rollback to Snapshot]ダイアログボックスで、[Save volume's current state as a snapshot]を選択します。
 2. 新しいSnapshotの名前を入力します。
7. [OK]をクリックします。

ボリュームSnapshotのバックアップ処理

統合型バックアップ機能を使用して、ボリュームSnapshotをバックアップできます。Snapshotは、NetApp Elementソフトウェアを実行しているクラスタから外部のオブジェクトストア、またはElementベースの別のクラスタにバックアップできます。Snapshotを外部のオブジェクトストアにバックアップする場合は、オブジェクトストアに接続していて、読み取りおよび書き込み処理が許可されている必要があります。

関連タスク

[Amazon S3オブジェクトストアへのボリュームSnapshotのバックアップ](#) (114ページ)
Amazon S3と互換性のある外部のオブジェクトストアにNetApp Element Snapshotをバックアップできます。

[OpenStack SwiftオブジェクトストアへのボリュームSnapshotのバックアップ](#) (115ページ)

OpenStack Swiftと互換性のあるセカンダリオブジェクトストアにNetApp Element Snapshotをバックアップできます。

[Elementソフトウェアを実行しているクラスタへのボリュームSnapshotのバックアップ](#) (116ページ)

NetApp Elementソフトウェアを実行しているクラスタにあるボリュームSnapshotをリモートのElementクラスタにバックアップできます。

Amazon S3オブジェクトストアへのボリュームSnapshotのバックアップ

Amazon S3と互換性のある外部のオブジェクトストアにNetApp Element Snapshotをバックアップできます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。

注 : 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Snapshots]サブタブで、バックアップするボリュームSnapshotのチェックボックスを選択します。
3. [Actions]をクリックします。
4. 表示されたメニューで[Backup to]をクリックします。
5. ダイアログの[Back up volume to]で、[Amazon S3]を選択します。
6. [with the following data format]でオプションを選択します。
 - Native : NetApp Elementソフトウェアベースのストレージシステムのみが読み取り可能な圧縮形式。
 - Uncompressed : 他のシステムと互換性がある非圧縮形式。
7. [Host name]フィールドにオブジェクトストアへのアクセスに使用するホスト名を入力します。
8. [Access key ID]フィールドにアカウントのアクセスキーIDを入力します。
9. [Secret access key]フィールドにアカウントのシークレットアクセスキーを入力します。
10. [Amazon S3 Bucket]フィールドにバックアップの格納先とするS3バケットを入力します。
11. オプション: [Prefix]フィールドにバックアップ名のプレフィックスを入力します。
12. オプション: [Nametag]フィールドにプレフィックスに付加するネームタグを入力します。
13. [OK]をクリックします。

OpenStack SwiftオブジェクトストアへのボリュームSnapshotのバックアップ

OpenStack Swiftと互換性のあるセカンダリオブジェクトストアにNetApp Element Snapshotをバックアップできます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。
- 注 :** 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。
2. [Snapshots]サブタブで、バックアップするボリュームSnapshotのチェックボックスを選択します。
3. [Actions]をクリックします。
4. 表示されたメニューで[Backup to]をクリックします。
5. ダイアログボックスの[Back up volume to]で、[OpenStack Swift]を選択します。
6. [with the following data format]でオプションを選択します。
 - Native : NetApp Elementソフトウェアベースのストレージシステムのみが読み取り可能な圧縮形式。
 - Uncompressed : 他のシステムと互換性がある非圧縮形式。
7. [URL]フィールドにオブジェクトストアへのアクセスに使用するURLを入力します。
8. [User name]フィールドにアカウントのユーザ名を入力します。
9. [Authentication key]フィールドにアカウントの認証キーを入力します。
10. [Container]フィールドにバックアップの格納先とするコンテナを入力します。

11. オプション: [Prefix]フィールドにバックアップボリュームの名前のプレフィックスを入力します。
12. オプション: [Nametag]フィールドにプレフィックスに付加するネームタグを入力します。
13. [OK]をクリックします。

Elementソフトウェアを実行しているクラスタへのボリュームSnapshotのバックアップ¹

NetApp Elementソフトウェアを実行しているクラスタにあるボリュームSnapshotをリモートのElementクラスタにバックアップできます。

開始する前に

バックアップに使用するSnapshotと同じかそれ以上のサイズのデスティネーションクラスタにボリュームを作成する必要があります。

タスク概要

クラスタ間でバックアップまたはリストアを実行する際には、システムによってクラスタ間の認証に使用するキーが生成されます。ソースクラスタはこのボリュームの一括書き込みキーを使用してデスティネーションクラスタに対して認証し、デスティネーションボリュームへの書き込みがセキュリティで保護されます。バックアップまたはリストアを実行する際には、処理を開始する前に、デスティネーションボリュームからボリュームの一括書き込みキーを生成する必要があります。

手順

1. デスティネーションクラスタを含むvCenterから、[NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Volumes]サブタブで、デスティネーションボリュームのチェックボックスを選択します。
 3. [Actions]をクリックします。
 4. 表示されたメニューで[Restore from]をクリックします。
 5. ダイアログボックスの[Restore from]で、[NetApp Element]を選択します。
 6. [with the following data format]でオプションを選択します。
 - **Native** : NetApp Elementソフトウェアベースのストレージシステムのみが読み取り可能な圧縮形式。
 - **Uncompressed** : 他のシステムと互換性がある非圧縮形式。
 7. [Generate Key]をクリックして、デスティネーションボリュームに対するボリュームの一括書き込みキーを生成します。
 8. ボリュームの一括書き込みキーをクリップボードにコピーします。これは以降のソースクラスタの手順で使用します。
 9. ソースクラスタを含むvCenterから、[NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。
- 注:**複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。
10. バックアップに使用するSnapshotのチェックボックスを選択します。
 11. [Actions]をクリックします。
 12. 表示されたメニューで[Backup to]をクリックします。
 13. ダイアログボックスの[Back up volume to]で、[NetApp Element]を選択します。

14. [with the following data format]で、デスティネーションクラスタと同じオプションを選択します。
15. [Remote cluster MVIP]フィールドにデスティネーションボリュームのクラスタの管理仮想IPアドレスを入力します。
16. [Remote cluster user name]フィールドにリモートクラスタのユーザ名を入力します。
17. [Remote cluster user password]フィールドにリモートクラスタのパスワードを入力します。
18. デスティネーションクラスタで生成したキーを[Bulk volume write key]フィールドに貼り付けます。
19. [OK]をクリックします。

Snapshotの削除

NetApp Element Management拡張ポイントを使用して、NetApp Elementソフトウェアを実行しているクラスタからボリュームSnapshotを削除できます。削除したSnapshotは、システムからただちに削除されます。

タスク概要

レプリケート中のSnapshotをソースクラスタから削除できます。ターゲットクラスタと同期中のSnapshotを削除すると、同期レプリケーションが完了した時点でソースクラスタからSnapshotが削除されます。ターゲットクラスタからは削除されません。

ターゲットにレプリケート済みのSnapshotを、ターゲットクラスタから削除することもできます。削除したSnapshotは、ターゲットがソースクラスタでSnapshotが削除されたことを検知するまで、ターゲットの削除済みSnapshotのリストに保持されます。ソースSnapshotが削除されたことをターゲットが検知すると、ターゲットはそのSnapshotのレプリケーションを停止します。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Snapshots]サブタブで、次の2つのうちのどちらかのビューを選択します。

- **Individual**: グループSnapshotに属していないボリュームSnapshotのリスト。
- **Inactive**: 削除されたがまだページされていないボリュームから作成されたボリュームSnapshotのリスト。

注: [Snapshots]サブタブでは、グループSnapshotの個々のメンバーを削除することはできません。この場合はグループSnapshotを削除する必要があります。グループSnapshotを削除する際のオプションで、グループSnapshotのメンバーを個別のSnapshotに変換する（グループSnapshotの関連付けを解除する）ことができます。

3. 削除するボリュームSnapshotのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Delete]を選択します。
6. 操作を確定します。

グループSnapshot

関連する一連のボリュームのグループSnapshotを作成して、各ボリュームのメタデータのポイントインタイム コピーを保持できます。グループSnapshotをバックアップまたはロ

ールバックとして使用して、ボリューム グループの状態を希望する時にリストアすることができます。

グループSnapshotの作成

ボリューム グループのSnapshotを今すぐ作成するか、スケジュールを作成してボリューム グループのSnapshotがあとで自動的に作成されるようにすることができます。1つのグループSnapshotには一度に最大32個のボリュームのSnapshotを含めることができます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Volumes]サブタブをクリックします。
3. [Active]ビューで、Snapshotに使用する各ボリュームのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Create Group Snapshot]を選択します。
6. オプション: [Create Group Snapshot]ダイアログ ボックスで、グループSnapshotの名前を入力します。

ヒント: わかりやすい命名のベストプラクティスを使用してください。これは、環境で複数のクラスタやvCenter Serverを使用している場合に特に重要です。

注: グループSnapshotの名前を入力しなかった場合、デフォルトではSnapshotの作成日時が名前として使用されます。

7. オプション: 親ボリュームがペアリングされている場合にレプリケーションにSnapshotも含まれるようにするには、[Include snapshot in replication when paired]チェックボックスを選択します。
8. Snapshotの保持期間として次のいずれかを選択します。
 - **Keep forever**: Snapshotをシステム上に無期限に保持します。
 - **Set retention period**: Snapshotをシステム上に保持する期間（日数、時間、または分）を設定します。
9. 単一のSnapshotを今すぐ作成するには、[Take group snapshot now]を選択します。
10. スケジュールを設定してあとでSnapshotを作成するには、次の手順を実行します。
 1. [Create snapshot schedule]を選択します。
 2. スケジュール名を入力します。
 3. スケジュールタイプをリストから選択し、スケジュールの詳細を設定します。
 4. オプション: スケジュールしたSnapshotの作成を定期的に繰り返すには、[Recurrent Schedule]チェックボックスを選択します。
11. [OK]をクリックします。

グループSnapshotの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Snapshots]ページで、グループSnapshotに関する情報を確認できます。

Snapshot Group ID

システムによって生成されたグループSnapshotのID。

Unique ID

グループSnapshotの一意のID。

Snapshot Group Name

グループSnapshotのユーザが定義した名前またはシステムのデフォルト名。

Create Date

グループSnapshotが作成された日時。

Status

Snapshotの現在のステータス。

有効な値は次のとおりです。

- Preparing : Snapshotは使用準備中で、まだ書き込みができません。
- Done : Snapshotの準備が完了し、使用可能な状態です。
- Active : Snapshotはアクティブです。

Number of Volumes

グループSnapshot内のボリュームの数。

グループSnapshotの編集

グループSnapshotのレプリケーション設定または保持期間を変更できます。指定した保持期間は、新しい間隔の開始時点からの期間です。保持期間には、(Snapshotの作成時間からではなく) 現在の時刻からの期間を指定します。間隔は、分、時間、および日数で指定できます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。

注 : 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Group Snapshots]サブタブをクリックします。
3. 編集するグループSnapshotのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Edit]を選択します。
6. オプション: 親ボリュームがペアリングされている場合にレプリケーションにSnapshotも含まれるようにするには、[Include snapshot in replication when paired]チェックボックスを選択します。
7. オプション: Snapshotの保持期間として次のいずれかを選択します。
 - Keep forever : Snapshotをシステム上に無期限に保持します。
 - Set retention period : Snapshotをシステム上に保持する期間（日数、時間、または分）を設定します。

注 : 保持期間には、(Snapshotの作成時間からではなく) 現在の時刻からの期間を指定します。

8. [OK]をクリックします。

グループSnapshotからのボリュームのクローニング

ボリュームのグループをポイントインタイムのグループSnapshotからクローニングできます。作成したボリュームは、システム内の他のボリュームと同様に使用できます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。

注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Group Snapshots]サブタブをクリックします。
3. ボリュームのクローンに使用するグループSnapshotのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Clone Volumes from Group Snapshot]を選択します。
6. オプション: [Clone Volumes From Group Snapshot]ダイアログボックスで、新しいボリューム名のプレフィックスを入力します。
注: このプレフィックスは、新しいクローンボリュームを既存のボリュームと区別するために、グループSnapshotから作成されるすべてのボリュームに適用されます。
7. オプション: クローンを割り当てる別のアカウントを選択します。アカウントを選択しない場合、新しいボリュームは現在のボリュームアカウントに割り当てられます。
8. オプション: クローン内のボリュームに適用する別のアクセス方法を選択します。アクセス方法を選択しない場合、現在のボリュームアクセス方法が使用されます。
 - **Read/Write**:すべての読み取りと書き込みが許可されます。
 - **Read Only**:すべての読み取りが許可されます。書き込みは許可されません。
 - **Locked**:管理者アクセスのみが許可されます。
 - **Replication Target**:レプリケートされたボリュームペアのターゲットボリュームとして指定されます。
9. [OK]をクリックします。

注: クローニング処理が完了するまでの時間は、ボリュームサイズおよびクラスタの現在の負荷によって異なります。

グループSnapshotへのボリュームのロールバック

一連のアクティブボリュームをグループSnapshotにロールバックできます。この処理では、グループSnapshot内の関連付けられているすべてのボリュームが、グループSnapshotが作成された時点の状態にリストアされます。ボリュームサイズも、元のSnapshotに記録されているサイズにリストアされます。ボリュームがページ化されている場合は、そのボリュームのすべてのSnapshotもページ時に削除されています。削除されたボリュームSnapshotはリストアされません。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。

注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Group Snapshots]サブタブをクリックします。

3. ボリュームのクローンに使用するグループSnapshotのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Rollback Volumes to Group Snapshot]を選択します。
6. オプション: Snapshotにロールバックする前にボリュームの現在の状態を保存するには、次の手順を実行します。
 1. [Rollback To Snapshot]ダイアログボックスで、[Save volumes' current state as a group snapshot]を選択します。
 2. 新しいグループSnapshotの名前を入力します。
7. [OK]をクリックします。

グループSnapshotの削除

システムからグループSnapshotを削除できます。グループSnapshotを削除する場合は、グループに関連付けられているすべてのSnapshotについて、削除するか個別のSnapshotとして保持するかを選択できます。

タスク概要

グループSnapshotに含まれているボリュームまたはSnapshotを削除すると、そのグループSnapshotにロールバックできなくなります。ただし、各ボリュームを個別にロールバックすることは可能です。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。
注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。
2. [Group Snapshots]サブタブをクリックします。
3. 削除するグループSnapshotのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Delete]をクリックします。
6. 確認のダイアログボックスで、次のいずれかを実行します。
 - グループSnapshotとグループ内のSnapshotをすべて削除するには、[Delete group snapshot and all group snapshot members]を選択します。
 - グループSnapshotを削除し、グループ内のSnapshotは保持するには、[Retain group snapshot members as individual snapshots]を選択します。
7. 操作を確定します。

Snapshotスケジュール

指定した間隔でSnapshotを自動的に作成するように、ボリュームのSnapshotのスケジュールを設定できます。1つのボリュームのSnapshotまたはグループのSnapshotを自動的に実行するスケジュールを設定できます。

ボリュームがレプリケートされている場合、Snapshotスケジュールの作成時に、作成されたSnapshotをリモートのNetApp Elementストレージシステムに格納するように設定できます。

注: スケジュールはUTC+0時間を使用して作成されます。タイムゾーンに基づいて、Snapshotが実行される実際の時刻の調整が必要になる場合があります。

Snapshotスケジュールの作成

ボリュームのSnapshotのスケジュールを設定し、指定した間隔でSnapshotを自動的に作成できます。

タスク概要

Snapshotスケジュールには、曜日または日にちに基づく間隔を設定できます。次のSnapshotを作成するまでの日数、時間、および分を指定することもできます。Snapshotのスケジュールを5分以外の間隔で設定した場合、Snapshotは5分単位に繰り上げた時間で実行されます。たとえば、12:42:00 UTCに実行するようにSnapshotのスケジュールを設定した場合、12:45:00 UTCに実行されます。Snapshotのスケジュールを5分未満の間隔で実行するように設定することはできません。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。

注 :複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Schedules]サブタブをクリックします。
3. [Create Schedule]をクリックします。
4. [Create Schedule]ダイアログ ボックスで、[Volume IDs CSV]フィールドに、Snapshot処理に含めるボリュームIDまたは複数のボリュームIDをカンマで区切って入力します。
5. 新しいスケジュール名を入力します。
6. スケジュール タイプをリストから選択し、スケジュールの詳細を設定します。
7. オプション: Snapshotスケジュールを無期限に繰り返すには、[Recurring Schedule]を選択します。
8. オプション: [New Snapshot Name]フィールドに、新しいSnapshotの名前を入力します。

注 :Snapshotの名前を入力しなかった場合、デフォルトではSnapshotの作成日時が名前として使用されます。

9. オプション: 親ボリュームがペアリングされている場合にレプリケーションにSnapshotも含まれるようにするには、[Include snapshot in replication when paired]チェック ボックスを選択します。
10. Snapshotの保持期間として次のいずれかを選択します。
 - **Keep forever** : Snapshotをシステム上に無期限に保持します。
 - **Set retention period** : Snapshotをシステム上に保持する期間（日数、時間、または分）を設定します。

注 :保持期間には、(Snapshotの作成時間からではなく) 現在の時刻からの期間を指定します。
11. [OK]をクリックします。

Snapshotスケジュールの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Schedules]ページでは、Snapshotスケジュールに関する情報を確認できます。

ID

システムによって生成されたスケジュールのID。

Type

スケジュールのタイプを示します。現時点でサポートされているタイプは Snapshotのみです。

Name

スケジュールの作成時に指定した名前。

Frequency

スケジュールを実行する頻度。頻度は時間と分、曜日、または日にちで設定できます。

Recurring

スケジュールが1回だけ実行されるか、定期的に実行されるかを示します。

Paused

スケジュールが手動で一時停止されているかどうかを示します。

Volume IDs

スケジュールの実行時に使用されるボリュームのIDを表示します。

Last Run

最後にスケジュールが実行された日時を表示します。

Last Run Status

スケジュールの前回の実行結果を表示します。SuccessまたはFailureのいずれかです。

Snapshotスケジュールの編集

既存のSnapshotスケジュールを変更できます。変更後、次回のスケジュール実行時に更新された設定が使用されます。元のスケジュールで作成されたSnapshotはストレージシステムに保持されます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。

注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Schedules]サブタブをクリックします。
3. 編集するSnapshotスケジュールのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Edit]を選択します。
6. [Volume IDs CSV]フィールドで、現在Snapshot処理の対象となっているボリュームID、または複数のボリュームIDをカンマで区切ったリストを変更します。
7. オプション: アクティブなスケジュールを一時停止したり、一時停止したスケジュールを再開したりするには、[Manually Pause Schedule]チェックボックスを選択します。
8. 必要に応じて、[New Schedule Name]フィールドに別のスケジュール名を入力します。
9. 必要に応じて、現在のスケジュールタイプを次のいずれかに変更します。
 1. **Days of Week**: Snapshotを作成する曜日（複数選択可）と時刻を選択します。
 2. **Days of Month**: Snapshotを作成する日にち（複数選択可）と時刻を選択します。
 3. **Time Interval**: Snapshotを作成する間隔（日数、時間、分）を選択します。
10. オプション: Snapshotスケジュールを無期限に繰り返すには、[Recurrent Schedule]を選択します。

11. オプション: [New Snapshot Name] フィールドで、スケジュールの定義対象とする Snapshot の名前を入力または変更します。
注: このフィールドを空白のままにすると、Snapshot の作成日時が名前として使用されます。
12. オプション: 親ボリュームがペアリングされている場合にレプリケーションに Snapshot も含まれるようにするには、[Include snapshots in replication when paired] チェック ボックスを選択します。
13. オプション: Snapshot の保持期間として次のいずれかを選択します。
 - **Keep forever**: Snapshot をシステム上に無期限に保持します。
 - **Set retention period**: Snapshot をシステム上に保持する期間（日数、時間、または分）を設定します。
注: 保持期間には、（Snapshot の作成時間からではなく）現在の時刻からの期間を指定します。
14. [OK] をクリックします。

Snapshot スケジュールのコピー

Snapshot スケジュールのコピーを作成して、新しいボリュームに割り当てたり他の目的に使用したりできます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Protection] を選択します。
注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。
2. [Schedules] サブタブをクリックします。
3. コピーする Snapshot スケジュールのチェック ボックスを選択します。
4. [Actions] をクリックします。
5. 表示されたメニューで [Copy] をクリックします。
[Copy Schedule] ダイアログ ボックスが、スケジュールの現在の設定が入力された状態で表示されます。
6. オプション: コピーしたスケジュールの名前を入力し、設定を変更します。
7. [OK] をクリックします。

Snapshot スケジュールの削除

Snapshot スケジュールを削除できます。スケジュールを削除すると、以降のスケジュールされた Snapshot は実行されません。過去にスケジュールで作成された Snapshot はストレージ システム上に保持されます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Protection] を選択します。
注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。
2. [Schedules] サブタブをクリックします。
3. 削除する Snapshot スケジュールのチェック ボックスを選択します。
4. [Actions] をクリックします。
5. 表示されたメニューで [Delete] をクリックします。

6. 操作を確定します。

リアルタイムのリモート レプリケーションのためのクラスタとボリュームのペアリング設定

NetApp Elementソフトウェアを実行するクラスタでは、リアルタイム レプリケーションを使用してボリューム データのリモート コピーを迅速に作成できます。1つのストレージ クラスタを最大4つの他のストレージ クラスタとペアリングすることができます。フェイルオーバーやフェイルバックの際には、クラスタペアのどちらかのクラスタからボリュームのデータを同期または非同期でレプリケートできます。リアルタイムのリモート レプリケーションを利用するには、2つのNetApp Elementクラスタをペアリングしてから、各クラスタのボリュームをペアリングする必要があります。

開始する前に

- ・ プラグインにクラスタを少なくとも1つ追加しておきます。
- ・ 管理およびストレージ両方のネットワークのすべてのノードIPアドレスが、ペアリングするクラスタ間で相互にルーティングされている必要があります。
- ・ すべてのペア ノードでMTUが同じでなければならず、クラスタ間でエンドツーエンドでサポートされている必要があります。
- ・ クラスタのNetApp Elementソフトウェアのバージョンの違いが1メジャー バージョン以内である必要があります。それよりも離れている場合、データレプリケーションを実行するには一方のクラスタをアップグレードする必要があります。

注: ネットアップは、データのレプリケーション時にWANアクセラレータ アプライアンスを使用することを認定していません。データをレプリケートする2つのクラスタ間にこのアプライアンスを配置すると、圧縮および重複排除の妨げとなる場合があります。WANアクセラレータ アプライアンスを本番環境に導入する前に、影響を十分に検証してください。

手順

1. クラスタのペアリング (126ページ)

リアルタイム レプリケーション機能を使用するには、最初に2つのクラスタをペアリングする必要があります。2つのクラスタをペアリングして接続したあと、一方のクラスタのアクティブなボリュームをもう一方のクラスタに継続的にレプリケートするように設定することで継続的なデータ保護 (CDP) を実現できます。両方のクラスタにクラスタ管理者としてアクセスできる場合は、ターゲット クラスタのMVIPを使用してソースとターゲットのクラスタをペアリングできます。クラスタペアの一方のクラスタにしかクラスタ管理者としてアクセスできない場合は、ターゲット クラスタでペアリング キーを使用してクラスタをペアリングします。

2. ボリュームのペアリング (129ページ)

クラスタペアのクラスタ間の接続を確立したら、一方のクラスタのボリュームをもう一方のクラスタのボリュームとペアリングできます。両方のクラスタのクレデンシャルがわかっている場合は、それらを使用してボリュームをペアリングできます。ソース クラスタのクレデンシャルしかわからない場合は、ペアリング キーを使用してボリュームをペアリングできます。両方のクラスタのクレデンシャルを把握している場合は、リモート クラスタにレプリケーション ターゲット ボリュームを作成してソース クラスタとペアリングすることもできます。ボリューム ペアリング関係を確立したら、どちらのボリュームをレプリケーション ターゲットにするかを指定する必要があります。

3. ボリューム レプリケーションの検証 (138ページ)

ボリュームがレプリケートされたら、ソース ボリュームとターゲット ボリュームがアクティブになっていることを確認する必要があります。状態がActiveの場合は、ボリュームをレプリケーション ターゲットにするかを指定する必要があります。

ムがペアリングされ、ソースボリュームからターゲットボリュームにデータが送信されて同期されています。

4. レプリケーション後のボリューム関係の削除 (138ページ)

レプリケーションが完了してボリュームペアリング関係が不要になったら、ボリューム関係を削除できます。

5. ボリューム関係の管理 (138ページ)

レプリケーションの一時停止、ボリュームペアリングの反転、レプリケーションモードの変更、ボリュームペアの削除、クラスタペアの削除など、さまざまな方法でボリューム関係を管理できます。

クラスタのペアリング

リアルタイムレプリケーション機能を使用するには、最初に2つのクラスタをペアリングする必要があります。2つのクラスタをペアリングして接続したあと、一方のクラスタのアクティブなボリュームをもう一方のクラスタに継続的にレプリケートするように設定することで継続的なデータ保護(CDP)を実現できます。両方のクラスタにクラスタ管理者としてアクセスできる場合は、ターゲットクラスタのMVIPを使用してソースとターゲットのクラスタをペアリングできます。クラスタペアの一方のクラスタにしかクラスタ管理者としてアクセスできない場合は、ターゲットクラスタでペアリングキーを使用してクラスタをペアリングします。

開始する前に

- ペアリングするクラスタの一方または両方に対するクラスタ管理者権限が必要です。
- クラスタ間のラウンドトリップレイテンシが2,000ミリ秒未満である必要があります。
- クラスタのNetApp Elementソフトウェアのバージョンの違いが1メジャー バージョン以内である必要があります。
- ペアクラスタのすべてのノードIPを相互にルーティングする必要があります。

注: クラスタをペアリングするには、管理ネットワーク上のノードどうしが完全に接続されている必要があります。レプリケーションを実行するには、ストレージクラスタネットワーク上の個々のノードが接続されている必要があります。

タスク概要

ボリュームのレプリケーション用に、1つのNetApp Elementクラスタを最大4つの他のクラスタとペアリングすることができます。同じクラスタグループに含まれるクラスタどうしをペアリングすることもできます。

手順

1. クレデンシャルを使用したクラスタのペアリング (127ページ)

一方のクラスタのMVIPを使用してもう一方のクラスタとの接続を確立することにより、リアルタイムレプリケーション用に2つのクラスタをペアリングできます。この方法を使用するには、両方のクラスタに対するクラスタ管理者アクセスが必要です。

2. ペアリングキーを使用したクラスタのペアリング (128ページ)

ローカルクラスタにはクラスタ管理者としてアクセスできるが、リモートクラスタにはアクセスできない場合は、ペアリングキーを使用してクラスタをペアリングします。ローカルクラスタで生成したペアリングキーをリモートサイトのクラスタ管理者に安全な方法で送信して接続を確立し、リアルタイムレプリケーション用にクラスタをペアリングします。

3. クラスタペア接続の検証 (129ページ)

クラスタペアリングが完了したら、クラスタペアの接続を検証して、レプリケーションが成功したかどうかを確認することができます。

クレデンシャルを使用したクラスタのペアリング

一方のクラスタのMVIPを使用してもう一方のクラスタとの接続を確立することにより、リアルタイム レプリケーション用に2つのクラスタをペアリングできます。この方法を使用するには、両方のクラスタに対するクラスタ管理者アクセスが必要です。

タスク概要

クラスタをペアリングする前に、クラスタ管理者のユーザ名とパスワードを使用してクラスタアクセスを認証します。MVIPがわからない場合やクラスタへのアクセスが許可されていない場合は、ペアリングキーを生成し、そのキーを使用して2つのクラスタをペアリングできます。詳細については、ペアリングキーを使用したクラスタのペアリングに関するプラグインのドキュメントを参照してください。

手順

- ローカルクラスタを含むvCenterから、[NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

- [Cluster Pairs]サブタブをクリックします。
- [Create Cluster Pairing]をクリックします。
- [Create Cluster Pairing]ダイアログボックスで、以下のいずれかを選択します。
 - Registered Cluster:** この方法は、ペアリングするリモートクラスタがNetApp Element Plug-in for vCenter Serverの同じインスタンスで制御されている場合に選択します。
 - Credentialed Cluster:** この方法は、リモートクラスタにNetApp Element Plug-in for vCenter Serverの外部で設定された既知のクレデンシャルがある場合に選択します。
- [Registered Cluster]を選択した場合は、使用可能なクラスタのリストからクラスタを選択して[Pair]をクリックします。
- [Credentialed Cluster]を選択した場合は、次の手順を実行します。
 - リモートクラスタのMVIPアドレスを入力します。
 - クラスタ管理者のユーザ名を入力します。
 - クラスタ管理者のパスワードを入力します。
 - [Start Pairing]をクリックします。
- タスクが完了して[Cluster Pairs]ページに戻ったら、クラスタペアが接続されていることを確認します。
- オプション: リモートクラスタで、[NetApp Element Management] > [Protection] > [Cluster Pairs]を選択するかElement Web UIを使用して、クラスタペアが接続されていることを確認します。

関連タスク

[ペアリングキーを使用したクラスタのペアリング](#) (128ページ)

ローカルクラスタにはクラスタ管理者としてアクセスできるが、リモートクラスタにはアクセスできない場合は、ペアリングキーを使用してクラスタをペアリングします。ローカルクラスタで生成したペアリングキーをリモートサイトのクラスタ管理者に安全な方法で送信して接続を確立し、リアルタイム レプリケーション用にクラスタをペアリングします。

[クラスタのペアリング](#) (126ページ)

リアルタイムレプリケーション機能を使用するには、最初に2つのクラスタをペアリングする必要があります。2つのクラスタをペアリングして接続したあと、一方のクラスタのアクティブなボリュームをもう一方のクラスタに継続的にレプリケートするように設定することで継続的なデータ保護(CDP)を実現できます。両方のクラスタにクラスタ管理者としてアクセスできる場合は、ターゲットクラスタのMVIPを使用してソースとターゲットのクラスタをペアリングできます。クラスタペアの一方のクラスタにしかクラスタ管理者としてアクセスできない場合は、ターゲットクラスタでペアリングキーを使用してクラスタをペアリングします。

ペアリングキーを使用したクラスタのペアリング

ローカルクラスタにはクラスタ管理者としてアクセスできるが、リモートクラスタにはアクセスできない場合は、ペアリングキーを使用してクラスタをペアリングします。ローカルクラスタで生成したペアリングキーをリモートサイトのクラスタ管理者に安全な方法で送信して接続を確立し、リアルタイムレプリケーション用にクラスタをペアリングします。

タスク概要

この手順では、ローカルサイトとリモートサイトでvCenterを使用し、2つのクラスタをペアリングする方法について説明します。vCenter Plug-inで制御されていないクラスタについては、Element Web UIを使用してクラスタのペアリングを開始または完了することができます。Element Web UIからクラスタのペアリングを開始または完了する詳しい手順については、NetApp Elementソフトウェアのユーザガイドを参照してください。

手順

1. ローカルクラスタを含むvCenterから、[NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Cluster Pairs]サブタブをクリックします。
3. [Create Cluster Pairing]をクリックします。
4. [Create Cluster Pairing]ダイアログボックスで、[Inaccessible Cluster]を選択します。
5. [Generate Key]をクリックします。

注:この操作により、ペアリング用のテキストキーが生成され、ローカルクラスタにクラスタペアが未設定の状態で作成されます。この手順を途中で中止した場合は、クラスタペアを手動で削除する必要があります。

6. クラスタペアリングキーをクリップボードにコピーします。
7. [Close]をクリックします。
8. このペアリングキーをリモートクラスタサイトのクラスタ管理者に渡します。

注:クラスタペアリングキーには、リモートレプリケーション用にボリューム接続を許可するためのMVIPのバージョン、ユーザ名、パスワード、およびデータベース情報が含まれています。このキーの取り扱いには十分に注意し、ユーザ名やパスワードが誤って外部に漏れたり不正に使用されたりしないように適切に管理してください。



注意:ペアリングキーの文字はいつさい変更しないでください。変更するとキーは無効になります。

9. リモートクラスタを含むvCenterから、[NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。

注 : 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

注 : Element UIを使用してペアリングを実行することもできます。

10. [Cluster Pairs]サブタブをクリックします。
11. [Complete Cluster Pairing]をクリックします。

注 : ロード中のスピナー アイコンが消えてから次の手順に進みます。ペアリングプロセス中に予期しないエラーが発生した場合は、ローカル クラスタとリモート クラスタで未設定のクラスタ ペアがあれば手動で削除し、ペアリングをもう一度実行してください。

12. ローカル クラスタのペアリング キーを[Cluster Pairing Key]フィールドに貼り付けます。
13. [Pair Cluster]をクリックします。
14. タスクが完了して[Cluster Pair]ページに戻ったら、クラスタ ペアが接続されていることを確認します。
15. リモート クラスタで、[NetApp Element Management] > [Protection]を選択するか Element UIを使用して、クラスタ ペアが接続されていることを確認します。

関連タスク

[クレデンシャルを使用したクラスタのペアリング](#) (127ページ)

一方のクラスタのMVIPを使用してもう一方のクラスタとの接続を確立することにより、リアルタイム レプリケーション用に2つのクラスタをペアリングできます。この方法を使用するには、両方のクラスタに対するクラスタ管理者アクセスが必要です。

[クラスタのペアリング](#) (126ページ)

リアルタイム レプリケーション機能を使用するには、最初に2つのクラスタをペアリングする必要があります。2つのクラスタをペアリングして接続したあと、一方のクラスタのアクティブなボリュームをもう一方のクラスタに継続的にレプリケートするように設定することで継続的なデータ保護 (CDP) を実現できます。両方のクラスタにクラスタ管理者としてアクセスできる場合は、ターゲット クラスタのMVIPを使用してソースとターゲットのクラスタをペアリングできます。クラスタ ペアの一方のクラスタにしかクラスタ管理者としてアクセスできない場合は、ターゲット クラスタでペアリング キーを使用してクラスタをペアリングします。

クラスタ ペア接続の検証

クラスタ ペアリングが完了したら、クラスタ ペアの接続を検証して、レプリケーションが成功したかどうかを確認することができます。

手順

1. ローカル クラスタで、[Data Protection] > [Cluster Pairs]の順に選択します。
2. [Cluster Pairs]ウィンドウで、クラスタ ペアが接続されていることを確認します。
3. ローカル クラスタに戻り、[Cluster Pairs]ウィンドウでクラスタ ペアが接続されていることを確認します。

ボリュームのペアリング

クラスタ ペアのクラスタ間の接続を確立したら、一方のクラスタのボリュームをもう一方のクラスタのボリュームとペアリングできます。両方のクラスタのクレデンシャルがわかっている場合は、それらを使用してボリュームをペアリングできます。ソース クラスタのクレデンシャルしかわからない場合は、ペアリング キーを使用してボリュームをペアリングできます。両方のクラスタのクレデンシャルを把握している場合は、リモート クラスタにレプリケーション ターゲット ボリュームを作成してソース クラスタとペア

リングすることもできます。ボリューム ペアリング関係を確立したら、どちらのボリュームをレプリケーション ターゲットにするかを指定する必要があります。

開始する前に

- ・ クラスタペアのクラスタ間の接続を確立しておきます。
- ・ ペアリングするクラスタの一方または両方に対するクラスタ管理者権限が必要です。

手順

1. クレデンシャルを使用したボリュームのペアリング (130ページ)

ローカルボリュームをリモートクラスタの別のボリュームとペアリングできます。この方法は、ボリュームをペアリングする両方のクラスタにクラスタ管理者としてアクセスできる場合に使用します。リモートクラスタのボリュームのボリュームIDを使用して接続を開始します。

2. ターゲットボリュームの作成およびローカルボリュームとのペアリング (133ページ)

2つ以上のローカルボリュームをリモートクラスタの関連するターゲットボリュームとペアリングできます。このプロセスでは、選択した各ローカルソースボリュームに対して、リモートクラスタにレプリケーションターゲットボリュームが作成されます。この方法は、ボリュームをペアリングする両方のクラスタにクラスタ管理者としてアクセスでき、リモートクラスタがプラグインで制御されている場合に使用します。リモートクラスタの各ボリュームのボリュームIDを使用して接続が開始されます。

3. ペアリングキーを使用したボリュームのペアリング (134ページ)

ペアリングキーを使用して、ローカルボリュームをリモートクラスタの別のボリュームとペアリングできます。この方法は、クラスタ管理者としてアクセスできるのがソースクラスタだけの場合に使用します。ペアリングキーを生成し、そのキーをリモートクラスタで使用してボリュームをペアリングします。

4. ペアリングされたボリュームに対するレプリケーションのソースとターゲットの割り当て (136ページ)

ボリュームのペアリング中にレプリケーションターゲットにするボリュームを割り当てていない場合、設定は完了していません。この手順を使用して、ソースボリュームとそのレプリケーションターゲットボリュームを割り当てることができます。ボリュームペアのどちらのボリュームをレプリケーションのソースまたはターゲットにしてもかまいません。この手順は、ソースボリュームが使用できなくなったときに、データをソースボリュームからリモートターゲットボリュームにリダイレクトする場合にも使用できます。

クレデンシャルを使用したボリュームのペアリング

ローカルボリュームをリモートクラスタの別のボリュームとペアリングできます。この方法は、ボリュームをペアリングする両方のクラスタにクラスタ管理者としてアクセスできる場合に使用します。リモートクラスタのボリュームのボリュームIDを使用して接続を開始します。

開始する前に

- ・ リモートクラスタのクラスタ管理者のクレデンシャルが必要です。
- ・ 該当するボリュームを含むクラスタがペアリングされていることを確認します。
- ・ このプロセスで新しいボリュームを作成する場合を除き、リモートボリュームのIDが必要です。
- ・ ローカルボリュームをソースにする場合は、ボリュームのアクセスモードが[Read/Write]に設定されていることを確認します。

手順

1. ローカルクラスタを含むvCenterから、[NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注 :複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Volumes]サブタブをクリックします。
3. [Active]ビューで、ペアリングするボリュームのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Volume Pairing]をクリックします。
6. [Volume Pairing]ダイアログボックスで、以下のいずれかを選択します。

- **Volume Creation** : この方法は、リモートクラスタにレプリケーションターゲットボリュームを作成する場合に選択します。この方法は、NetApp Element Plug-in for vCenter Serverで制御されているリモートクラスタでのみ使用できます。
- **Volume Selection** : この方法は、ターゲットボリュームを含むリモートクラスタがNetApp Element Plug-in for vCenter Serverで制御されている場合に選択します。
- **Volume ID** : この方法は、ターゲットボリュームを含むリモートクラスタにNetApp Element Plug-in for vCenter Serverの外部で設定された既知のクレデンシャルがある場合に選択します。

7. ドロップダウンリストから[Replication Mode]を選択します。
 - **Real-time (Synchronous)** : 書き込みはソースクラスタとターゲットクラスタの両方でコミットされたあとにクライアントに通知されます。
 - **Real-time (Asynchronous)** : 書き込みはソースクラスタでコミットされたあとにクライアントに通知されます。
 - **Snapshots Only** : ソースクラスタで作成されたSnapshotだけがレプリケートされます。ソースボリュームのアクティブな書き込みはレプリケートされません。

8. ペアリングモードのオプションとして[Volume Creation]を選択した場合は、次の手順を実行します。

1. ドロップダウンリストからペアクラスタを選択します。

注 :この操作により、次の手順で選択する、クラスタで使用可能なアカウントが設定されます。

2. レプリケーションターゲットボリュームを含むターゲットクラスタ上のアカウントを選択します。
3. レプリケーションターゲットボリューム名を入力します。

注 :このプロセスではボリュームサイズを調整できません。

9. ペアリングモードのオプションとして[Volume Selection]を選択した場合は、次の手順を実行します。

1. ドロップダウンリストからペアクラスタを選択します。

注 :次の手順で選択する、クラスタ上の使用可能なボリュームが表示されます。

2. オプション: リモートボリュームをボリュームペアリングのターゲットとして設定する場合は、[set remote volume to Replication Target]オプションをクリックします。ローカルボリュームが読み取り/書き込みに設定されていれば、ローカルボリュームがペアのソースになります。



注意 :レプリケーションターゲットとして既存のボリュームを割り当てると、そのボリュームのデータは上書きされます。レプリ

ケーションターゲットには新しいボリュームを使用することを推奨します。

注: レプリケーションのソースとターゲットは、[Volumes] > [Actions] > [Edit] からペアリングプロセスを実行してあとで割り当てることもできます。ペアリングを完了するには、ソースとターゲットを割り当てる必要があります。

3. 使用可能なボリュームのリストからボリュームを選択します。
10. ペアリングモードのオプションとして[Volume ID]を選択した場合は、次の手順を実行します。
 1. ドロップダウンリストからペアクラスタを選択します。
 2. クラスタがプラグインに登録されていない場合は、クラスタ管理者のユーザIDを入力します。
 3. クラスタがプラグインに登録されていない場合は、クラスタ管理者のパスワードを入力します。
 4. ボリュームIDを入力します。
 5. リモートボリュームをボリュームペアリングのターゲットとして設定する場合は、[set remote volume to Replication Target]オプションをクリックします。ローカルボリュームが読み取り/書き込みに設定されていれば、ローカルボリュームがペアのソースになります。



注意: レプリケーションターゲットとして既存のボリュームを割り当てる場合、そのボリュームのデータは上書きされます。レプリケーションターゲットには新しいボリュームを使用することを推奨します。

注: レプリケーションのソースとターゲットは、[Volumes] > [Actions] > [Edit] からペアリングプロセスを実行してあとで割り当てることもできます。ペアリングを完了するには、ソースとターゲットを割り当てる必要があります。

11. [Pair]をクリックします。

注: ペアリング操作を確定すると、2つのクラスタでボリュームを接続するプロセスが開始されます。ペアリングプロセス中は、[Volume Pairs]ページの[Volume Status]列で進捗メッセージを確認できます。



注意: レプリケーションターゲットにするボリュームをまだ割り当てていない場合、ペアリングの設定は完了していません。ソースとターゲットが割り当たるまで、ボリュームペアにはPausedMisconfiguredと表示されます。ボリュームペアリングを完了するには、ソースとターゲットを割り当てる必要があります。

12. いずれかのクラスタで、[Protection] > [Volume Pairs]を選択します。

13. ボリュームペアリングのステータスを確認します。

関連タスク

[ペアリングされたボリュームに対するレプリケーションのソースとターゲットの割り当て \(136ページ\)](#)

ボリュームのペアリング中にレプリケーションターゲットにするボリュームを割り当てていない場合、設定は完了していません。この手順を使用して、ソースボリュームとそのレプリケーションターゲットボリュームを割り当てることができます。ボリュームペアのどちらのボリュームをレプリケーションのソースまたはターゲットにしてもかま

いません。この手順は、ソース ボリュームが使用できなくなったときに、データをソース ボリュームからリモート ターゲット ボリュームにリダイレクトする場合にも使用できます。

関連資料

[ボリュームペアリングに関するメッセージ](#) (142ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Volume Pairs]ページで、最初のペアリングプロセス中に表示されるメッセージを確認できます。メッセージは[Volume Status]列に表示され、ペアリングのソースとターゲットの両方で表示することができます。

[ボリュームペアリングに関する警告](#) (142ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Volume Pairs]ページで、ボリュームをペアリングしたあとに表示される警告メッセージを確認できます。メッセージは[Volume Status]列に表示され、ペアリングのソースとターゲットの両方で表示することができます。

ターゲット ボリュームの作成およびローカル ボリュームとのペアリング

2つ以上のローカル ボリュームをリモート クラスタの関連するターゲット ボリュームとペアリングできます。このプロセスでは、選択した各ローカル ソース ボリュームに対して、リモート クラスタにレプリケーション ターゲット ボリュームが作成されます。この方法は、ボリュームをペアリングする両方のクラスタにクラスタ管理者としてアクセスでき、リモート クラスタがプラグインで制御されている場合に使用します。リモート クラスタの各ボリュームのボリュームIDを使用して接続が開始されます。

開始する前に

- リモート クラスタのクラスタ管理者のクレデンシャルが必要です。
- 該当するボリュームを含むクラスタがプラグインを使用してペアリングされていることを確認します。
- リモート クラスタがプラグインで制御されていることを確認します。
- 各ローカル ボリュームのアクセス モードが[Read/Write]に設定されていることを確認します。

手順

- ローカル クラスタを含むvCenterから、[NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

- [Volumes]サブタブをクリックします。
- [Active]ビューで、ペアリングする2つ以上のボリュームのチェック ボックスを選択します。
- [Actions]をクリックします。
- 表示されたメニューで[Volume Pairing]をクリックします。
- [Multiple Volume Pairing with Target Volume Creation]ダイアログ ボックスで、ドロップダウン リストから[Replication Mode]を選択します。
 - Real-time (Synchronous)**: 書き込みはソース クラスタとターゲット クラスタの両方でコミットされたあとにクライアントに通知されます。
 - Real-time (Asynchronous)**: 書き込みはソース クラスタでコミットされたあとにクライアントに通知されます。
 - Snapshots Only**: ソース クラスタで作成されたSnapshotだけがレプリケートされます。ソース ボリュームのアクティブな書き込みはレプリケートされません。

7. ドロップダウンリストからペアクラスタを選択します。
8. レプリケーションターゲットボリュームを含むターゲットクラスタ上のアカウントを選択します。
9. オプション: ターゲットクラスタの新しいボリューム名に使用するプレフィックスまたはサフィックスを入力します。

注: 指定したプレフィックスまたはサフィックスを含むサンプルのボリューム名が表示されます。

10. [Create Pairs]をクリックします。

注: ペアリング操作を確定すると、2つのクラスタでボリュームを接続するプロセスが開始されます。ペアリングプロセス中は、[Volume Pairs]ページの[Volume Status]列で進捗メッセージを確認できます。プロセスが完了すると、リモートクラスタに新しいターゲットボリュームが作成されて接続されます。

11. いずれかのクラスタで、[Protection] > [Volume Pairs]を選択します。

12. ボリュームペアリングのステータスを確認します。

関連資料

[ボリュームペアリングに関するメッセージ](#) (142ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Volume Pairs]ページで、最初のペアリングプロセス中に表示されるメッセージを確認できます。メッセージは[Volume Status]列に表示され、ペアリングのソースとターゲットの両方で表示することができます。

[ボリュームペアリングに関する警告](#) (142ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Volume Pairs]ページで、ボリュームをペアリングしたあとに表示される警告メッセージを確認できます。メッセージは[Volume Status]列に表示され、ペアリングのソースとターゲットの両方で表示することができます。

ペアリングキーを使用したボリュームのペアリング

ペアリングキーを使用して、ローカルボリュームをリモートクラスタの別のボリュームとペアリングできます。この方法は、クラスタ管理者としてアクセスできるのがソースクラスタだけの場合に使用します。ペアリングキーを生成し、そのキーをリモートクラスタで使用してボリュームをペアリングします。

開始する前に

該当するボリュームを含むクラスタがペアリングされていることを確認します。

ベストプラクティス: ソースボリュームを[Read/Write]に設定し、ターゲットボリュームを[Replication Target]に設定します。ターゲットボリュームは、データが格納されておらず、かつサイズ、512e、QoSなどの特性がソースボリュームとまったく同じである必要があります。レプリケーションターゲットとして既存のボリュームを割り当てると、そのボリュームのデータは上書きされます。ターゲットボリュームにはソースボリュームと同じかそれ以上のサイズのボリュームを使用できますが、ソースボリュームより小さいボリュームは使用できません。

タスク概要

この手順では、ローカルサイトとリモートサイトでvCenterを使用し、2つのボリュームをペアリングする方法について説明します。vCenter Plug-inで制御されていないボリュームについては、Element Web UIを使用してボリュームのペアリングを開始または完了することができます。Element Web UIからボリュームのペアリングを開始または完了する詳しい手順については、NetApp Elementソフトウェアのユーザガイドを参照してください。

注 :ボリュームペアリングキーには、暗号化されたボリューム情報が格納されており、機密情報が含まれている場合があります。このキーは必ず安全な方法で共有してください。

手順

1. ローカルクラスタを含むvCenterから、[NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注 :複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Volumes]サブタブをクリックします。
3. [Active]ビューで、ペアリングするボリュームのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Volume Pairing]をクリックします。
6. [Volume Pairing]ダイアログボックスで、[Inaccessible Cluster]を選択します。
7. [Replication Mode]をリストから選択します。

- **Real-time (Synchronous)** : 書き込みはソースクラスタとターゲットクラスタの両方でコミットされたあとにクライアントに通知されます。
- **Real-time (Asynchronous)** : 書き込みはソースクラスタでコミットされたあとにクライアントに通知されます。
- **Snapshots Only** : ソースクラスタで作成されたSnapshotだけがレプリケートされます。ソースボリュームのアクティブな書き込みはレプリケートされません。

8. [Generate Key]をクリックします。

注 :この操作により、ペアリング用のテキストキーが生成され、ローカルクラスタにボリュームペアが未設定の状態で作成されます。この手順を途中で中止した場合は、ボリュームペアを手動で削除する必要があります。

9. ペアリングキーをクリップボードにコピーします。
10. [Close]をクリックします。
11. このペアリングキーをリモートクラスタサイトのクラスタ管理者に渡します。

注 :ボリュームペアリングキーの取り扱いには十分に注意し、誤って外部に漏れたり不正に使用されたりしないように適切に管理してください。



注意 :ペアリングキーの文字はいつさい変更しないでください。変更するとキーは無効になります。

12. リモートクラスタを含むvCenterから、[NetApp Element Management] > [Management]を選択します。

注 :複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

13. [Volumes]サブタブをクリックします。
14. [Active]ビューで、ペアリングするボリュームのチェックボックスを選択します。
15. [Actions]をクリックします。
16. 表示されたメニューで[Volume Pairing]をクリックします。
17. [Volume Pairing]ダイアログボックスで、[Complete Cluster Pairing]を選択します。
18. もう一方のクラスタのペアリングキーを[Pairing Key]ボックスに貼り付けます。
19. [Complete Pairing]をクリックします。

注 :ペアリング操作を確定すると、2つのクラスタでボリュームを接続するプロセスが開始されます。ペアリングプロセス中は、[Volume Pairs]ページの[Volume Status]列で進捗メッセージを確認できます。ペアリングプロセス中に予期しないエラーが発生した場合は、ローカルクラスタとリモートクラスタで未設定のクラスタペアがあれば手動で削除し、ペアリングをもう一度実行してください。



注意 :レプリケーションターゲットにするボリュームをまだ割り当てていない場合、ペアリングの設定は完了していません。ソースとターゲットが割り当てられるまで、ボリュームペアにはPausedMisconfiguredと表示されます。ボリュームペアリングを完了するには、ソースとターゲットを割り当てる必要があります。

20. いずれかのクラスタで、[Protection] > [Volume Pairs]を選択します。
21. ボリュームペアリングのステータスを確認します。

注 :ペアリングキーを使用してペアリングされたボリュームは、リモート側のペアリングプロセスが完了してから表示されます。

関連タスク

[ペアリングされたボリュームに対するレプリケーションのソースとターゲットの割り当て](#) (136ページ)

ボリュームのペアリング中にレプリケーションターゲットにするボリュームを割り当てていない場合、設定は完了していません。この手順を使用して、ソースボリュームとそのレプリケーションターゲットボリュームを割り当てることができます。ボリュームペアのどちらのボリュームをレプリケーションのソースまたはターゲットにしてもかまいません。この手順は、ソースボリュームが使用できなくなったときに、データをソースボリュームからリモートターゲットボリュームにリダイレクトする場合にも使用できます。

関連資料

[ボリュームペアリングに関するメッセージ](#) (142ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Volume Pairs]ページで、最初のペアリングプロセス中に表示されるメッセージを確認できます。メッセージは[Volume Status]列に表示され、ペアリングのソースとターゲットの両方で表示することができます。

[ボリュームペアリングに関する警告](#) (142ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Volume Pairs]ページで、ボリュームをペアリングしたあとに表示される警告メッセージを確認できます。メッセージは[Volume Status]列に表示され、ペアリングのソースとターゲットの両方で表示することができます。

ペアリングされたボリュームに対するレプリケーションのソースとターゲットの割り当て

ボリュームのペアリング中にレプリケーションターゲットにするボリュームを割り当てていない場合、設定は完了していません。この手順を使用して、ソースボリュームとそのレプリケーションターゲットボリュームを割り当てることができます。ボリュームペアのどちらのボリュームをレプリケーションのソースまたはターゲットにしてもかまいません。この手順は、ソースボリュームが使用できなくなったときに、データをソースボリュームからリモートターゲットボリュームにリダイレクトする場合にも使用できます。

開始する前に

ソースボリュームとターゲットボリュームを含むクラスタへのアクセス権が必要です。

タスク概要

この手順では、ローカルサイトとリモートサイトでvCenterを使用し、2つのクラスタ間にソースボリュームとレプリケーションボリュームを割り当てる方法について説明します。vCenter Plug-inで制御されていないボリュームについては、Element Web UIを使用してソースボリュームまたはレプリケーションボリュームを割り当てるすることができます。Element Web UIからクラスタペアの一端を削除する詳しい手順については、NetApp Elementソフトウェアのユーザガイドを参照してください。

レプリケーションソースボリュームには読み取り/書き込みのアカウントアクセスが設定されます。レプリケーションターゲットボリュームには、レプリケーションソースのみが読み取り/書き込みアクセスできます。

ベストプラクティス: ターゲットボリュームは、データが格納されておらず、かつサイズ、512e、QoSなどの特性がソースボリュームとまったく同じである必要があります。ターゲットボリュームにはソースボリュームと同じかそれ以上のサイズのボリュームを使用できますが、ソースボリュームより小さいボリュームは使用できません。

手順

1. NetApp Element Management拡張ポイントで、レプリケーションソースとして使用するペアリングされたボリュームが含まれているクラスタを選択します。
2. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。
3. [Volumes]サブタブをクリックします。
4. [Active]ビューで、編集するボリュームのチェックボックスを選択します。
5. [Actions]をクリックします。
6. 表示されたメニューで[Edit]を選択します。
7. [Access]ドロップダウンリストで[Read/Write]を選択します。



注意: ソースとターゲットの割り当てを逆にしている場合、新しいレプリケーションターゲットが割り当てられるまでボリュームペアには PausedMisconfigured と表示されます。アクセスを変更すると、ボリュームレプリケーションが一時停止し、データの転送が中止されます。これらの変更が両方のサイトで調整されていることを確認してください。

8. [OK]をクリックします。
9. NetApp Element Management拡張ポイントで、レプリケーションターゲットとして使用するペアリングされたボリュームが含まれているクラスタを選択します。
10. [NetApp Element Management] > [Management]を選択します。
11. [Volumes]サブタブをクリックします。
12. [Active]ビューで、編集するボリュームのチェックボックスを選択します。
13. [Actions]をクリックします。
14. 表示されたメニューで[Edit]を選択します。
15. [Access]ドロップダウンリストで[Replication Target]を選択します。



注意: レプリケーションターゲットとして既存のボリュームを割り当てるとき、そのボリュームのデータは上書きされます。レプリケーションターゲットには新しいボリュームを使用することを推奨します。

16. [OK]をクリックします。

関連資料

[ボリュームペアリングに関するメッセージ](#) (142ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Volume Pairs]ページで、最初のペアリングプロセス中に表示されるメッセージを確認できます。メッセージは[Volume Status]列に表示され、ペアリングのソースとターゲットの両方で表示することができます。

[ボリュームペアリングに関する警告](#) (142ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Volume Pairs]ページで、ボリュームをペアリングしたあとに表示される警告メッセージを確認できます。メッセージは[Volume Status]列に表示され、ペアリングのソースとターゲットの両方で表示することができます。

ボリュームレプリケーションの検証

ボリュームがレプリケートされたら、ソースボリュームとターゲットボリュームがアクティブになっていることを確認する必要があります。状態がActiveの場合は、ボリュームがペアリングされ、ソースボリュームからターゲットボリュームにデータが送信されて同期されています。

手順

1. ペアリングのどちらかのクラスタで、[NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Volume Pairs]サブタブをクリックします。

3. ボリュームのステータスがActiveであることを確認します。

レプリケーション後のボリューム関係の削除

レプリケーションが完了してボリュームペアリング関係が不要になったら、ボリューム関係を削除できます。

手順

ボリュームペアリング関係を削除する手順を実行します。[ボリュームペアの削除](#) (140ページ)

ボリューム関係の管理

レプリケーションの一時停止、ボリュームペアリングの反転、レプリケーションモードの変更、ボリュームペアの削除、クラスタペアの削除など、さまざまな方法でボリューム関係を管理できます。

関連タスク

[レプリケーションの一時停止](#) (139ページ)

ボリュームペアのプロパティを編集して、レプリケーションを手動で一時停止することができます。

[レプリケーションモードの変更](#) (139ページ)

ボリュームペアのプロパティを編集して、ボリュームペア関係のレプリケーションモードを変更することができます。

[ボリュームペアの削除](#) (140ページ)

2つのボリューム間のペア関係を解除するには、ボリュームペアを削除します。

関連資料

[ボリュームペアの詳細](#) (141ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Volume Pairs]ページで、ペアリング済み、またはペアリング中のボリュームに関する情報を確認できます。

レプリケーションの一時停止

ボリュームペアのプロパティを編集して、レプリケーションを手動で一時停止することができます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。

注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Volume Pairs]サブタブをクリックします。
3. 編集するボリュームペアのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Edit]を選択します。
6. [Edit Volume Pair]ペインで、レプリケーションプロセスを手動で一時停止または開始します。



注意: ボリュームレプリケーションを手動で一時停止または再開すると、データの転送が中止または再開されます。これらの変更が両方のサイトで調整されていることを確認してください。

7. [Save Changes]をクリックします。

レプリケーションモードの変更

ボリュームペアのプロパティを編集して、ボリュームペア関係のレプリケーションモードを変更することができます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。

注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Volume Pairs]サブタブをクリックします。
3. 編集するボリュームペアのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Edit]を選択します。
6. [Edit Volume Pair]ペインで、新しいレプリケーションモードを選択します。



注意: レプリケーションモードの変更はすぐに反映されます。これらの変更が両方のサイトで調整されていることを確認してください。

- **Real-time (Synchronous)**: 書き込みはソースクラスタとターゲットクラスタの両方でコミットされたあとにクライアントに通知されます。
- **Real-time (Asynchronous)**: 書き込みはソースクラスタでコミットされたあとにクライアントに通知されます。

- **Snapshots Only** : ソース クラスタで作成されたSnapshotだけがレプリケートされます。ソース ボリュームのアクティブな書き込みはレプリケートされません。

7. [Save Changes]をクリックします。

ボリュームペアの削除

2つのボリューム間のペア関係を解除するには、ボリュームペアを削除します。

タスク概要

この手順では、ローカルサイトとリモートサイトでvCenterを使用し、2つのボリュームのペアリング関係を削除する方法について説明します。vCenter Plug-inで制御されていないボリュームについては、Element Web UIを使用してボリュームペアを削除することができます。Element Web UIからボリュームペアを削除する詳しい手順については、NetApp Elementソフトウェアのユーザガイドを参照してください。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Volume Pairs]サブタブをクリックします。

3. 削除するボリュームペアのチェックボックスを選択します。

4. [Actions]をクリックします。

5. 表示されたメニューで[Delete]を選択します。

6. [Delete Volume Pair]ダイアログボックスで、各ボリュームペアの詳細を確認します。

注: プラグインで管理されていないクラスタの場合、ローカルクラスタ側のボリュームペア関係のみが削除されます。ペアリング関係を完全に削除するには、リモートクラスタ側のボリュームペア関係を手動で削除する必要があります。

7. (プラグインで管理されているクラスタ向け、オプション) [Change Replication Target Access to]チェックボックスを選択し、レプリケーションターゲットボリューム用の新しいアクセスモードを選択します。新しいアクセスモードは、ボリュームペアリング関係の削除後に適用されます。

8. [Yes]をクリックします。

クラスタペアの削除

ローカルサイトとリモートサイトでvCenterを使用して、2つのクラスタ間のクラスタペアリング関係を削除できます。クラスタペアリング関係を完全に削除するには、ローカルとリモートの両方のクラスタからクラスタペアを削除する必要があります。

タスク概要

vCenter Plug-inを使用してクラスタペアを削除できます。vCenter Plug-inで制御されないクラスタについては、Element Web UIを使用してクラスタペアを削除することもできます。Element Web UIを使用してクラスタペアを削除する詳しい手順については、NetApp Elementソフトウェアのユーザガイドを参照してください。

手順

1. いずれかのクラスタで、[NetApp Element Management] > [Protection]を選択します。

2. [Cluster Pairs]サブタブをクリックします。

3. 削除するクラスタペアのチェックボックスを選択します。

4. [Actions]をクリックします。

5. 表示されたメニューで[Delete]をクリックします。

6. 操作を確定します。

注 :この操作では、ローカルクラスタ側のクラスタペアのみが削除されます。ペアリング関係を完全に削除するには、リモートクラスタ側のクラスタペアを手動で削除する必要があります。

7. クラスタペアリングのリモートクラスタで同じ手順を実行します。

ボリュームペアの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Volume Pairs]ページで、ペアリング済み、またはペアリング中のボリュームに関する情報を確認できます。

[Volume Status]列に、ペアリングおよび進捗に関するメッセージが表示されます。

Local Volume ID

システムによって生成されたボリュームのID。

Local Volume Name

ボリュームの作成時に指定した名前。ボリューム名は最大223文字で、使用できる文字はa~z、0~9、およびダッシュ (-) です。

Account

ボリュームに割り当てられているアカウントの名前。

Volume Replication status

ボリュームのレプリケーションステータス。

Snapshot Replication status

Snapshotボリュームのレプリケーションステータス。

Mode

クライアントの書き込みレプリケーション方法を示します。有効な値は次のとおりです。

- Asynchronous
- Snapshot-Only
- Synchronous

Local Volume Access

ボリュームペアリングのローカル側のアクセスモード。

Direction

ボリュームデータの方向を示します。

- ➡アイコンは、クラスタの外部のターゲットにデータを書き出していることを示します。
- ⬅アイコンは、外部のソースからローカルボリュームにデータが書き込まれていることを示します。

Remote Cluster

ボリュームが配置されているリモートクラスタの名前。

Remote Volume ID

リモートクラスタのボリュームのボリュームID。

Remote Volume Name

リモートボリュームの作成時に指定した名前。

関連資料

[ボリュームペアリングに関するメッセージ](#) (142ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Volume Pairs]ページで、最初のペアリングプロセス中に表示されるメッセージを確認できます。メッセージは[Volume Status]列に表示され、ペアリングのソースとターゲットの両方で表示することができます。

[ボリュームペアリングに関する警告](#) (142ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Volume Pairs]ページで、ボリュームをペアリングしたあとに表示される警告メッセージを確認できます。メッセージは[Volume Status]列に表示され、ペアリングのソースとターゲットの両方で表示することができます。

ボリュームペアリングに関するメッセージ

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Volume Pairs]ページで、最初のペアリングプロセス中に表示されるメッセージを確認できます。メッセージは[Volume Status]列に表示され、ペアリングのソースとターゲットの両方で表示することができます。

PausedDisconnected

ソースレプリケーションまたは同期RPCがタイムアウトし、リモートクラスタへの接続が失われました。クラスタへのネットワーク接続を確認してください。

ResumingConnected*

リモートレプリケーションの同期がアクティブになりました。同期処理が開始され、データを待っている状態です。

ResumingRRSync*

ペアクラスタにボリュームメタデータのSingle Helixコピーを作成しています。

ResumingLocalSync*

ペアクラスタにボリュームメタデータのDouble Helixコピーを作成しています。

ResumingDataTransfer*

データ転送が再開されました。

Active

ボリュームがペアリングされ、ソースボリュームからターゲットボリュームにデータが送信されて同期されています。

Idle

実行中のレプリケーションアクティビティはありません。

*この処理はターゲットボリュームで開始され、ソースボリュームには表示されない場合があります。

関連資料

[ボリュームペアリングに関する警告](#) (142ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Volume Pairs]ページで、ボリュームをペアリングしたあとに表示される警告メッセージを確認できます。メッセージは[Volume Status]列に表示され、ペアリングのソースとターゲットの両方で表示することができます。

ボリュームペアリングに関する警告

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Volume Pairs]ページで、ボリュームをペアリングしたあとに表示される警告メッセージを確認できます。メッ

セージは[Volume Status]列に表示され、ペアリングのソースとターゲットの両方で表示することができます。

特に記載がないかぎり、これらのメッセージはペアリングのソースとターゲットの両方に表示されます。

PausedClusterFull

ターゲットクラスタがいっぱいのため、ソースレプリケーションと一緒にデータ転送を続行できません。このメッセージは、ペアのソースにのみ表示されます。

PausedExceededMaxSnapshotCount

ターゲットボリュームに格納されたSnapshotの数が最大数に達しており、Snapshotをこれ以上レプリケートできません。

PausedManual

ローカルボリュームが手動で一時停止されています。レプリケーションを再開するには、一時停止を解除する必要があります。

PausedManualRemote

リモートボリュームが手動で一時停止されています。レプリケーションを再開するには、リモートボリュームの一時停止を手動で解除する必要があります。

PausedMisconfigured

ソースとターゲットがアクティブになるのを待っています。手動でレプリケーションを再開する必要があります。

PausedQoS

ターゲットQoSの受信IOを維持できませんでした。レプリケーションは自動で再開されます。このメッセージは、ペアのソースにのみ表示されます。

PausedSlowLink

低速リンクが検出されたため、レプリケーションが停止しました。レプリケーションは自動で再開されます。このメッセージは、ペアのソースにのみ表示されます。

PausedVolumeSizeMismatch

ソースボリュームよりも小さいターゲットボリュームが使用されています。

PausedXCopy

ソースボリュームに対してSCSI XCOPYコマンドを実行中です。このコマンドが完了するまでレプリケーションを再開できません。このメッセージは、ペアのソースにのみ表示されます。

StoppedMisconfigured

永続的な設定エラーが検出されました。リモートボリュームがバージされたかペアが解除されました。対処方法はなく、新しいペアリングを確立する必要があります。

関連資料

[ボリュームペアリングに関するメッセージ](#) (142ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントの[Protection]タブにある[Volume Pairs]ページで、最初のペアリングプロセス中に表示されるメッセージを確認できます。メッセージは[Volume Status]列に表示され、ペアリングのソースとターゲットの両方で表示することができます。

クラスタ管理

NetApp Element Management拡張ポイントの[Cluster]タブから、クラスタ全体の設定を表示および変更したり、クラスタ固有のタスクを実行したりできます。

ドライブ

各ノードには1つ以上の物理ドライブが搭載され、クラスタのデータの一部が格納されます。クラスタにドライブが追加されると、そのドライブの容量とパフォーマンスがクラスタで使用されるようになります。

ストレージノードには、次のタイプのドライブが含まれます。

ボリュームメタデータ ドライブ

クラスタ内の各ボリューム、クローン、またはSnapshotの定義情報を圧縮して格納します。システム内のメタデータ ドライブの合計容量により、ボリュームとしてプロビジョニング可能なストレージの最大容量が決まります。プロビジョニング可能なストレージの最大容量は、クラスタのブロック ドライブに実際に格納されるデータ量とは関係ありません。ボリューム メタデータ ドライブには、Double Helixデータ保護を使用してデータがクラスタ内に重複して格納されます。

注:一部のシステムイベントログおよびエラーメッセージでは、ボリューム メタデータ ドライブではなくスライス ドライブと表記される場合があります。

ブロック ドライブ

サーバーアプリケーションボリューム用に、重複排除済みのデータ ブロックを圧縮して格納します。ブロック ドライブはシステムのストレージ容量の大部分を占めます。データの書き込み要求に加えて、クラスタにすでに格納されているデータの読み取り要求の大部分がブロック ドライブで発生します。格納可能なデータの最大容量は、システム内のブロック ドライブの合計容量に、圧縮、シンプロビジョニング、および重複排除の効果を加味して決まります。

クラスタへの使用可能ドライブの追加

NetApp Element Management拡張ポイントを使用して、クラスタにドライブを追加できます。クラスタにノードを追加したり、既存のノードに新しいドライブを設置すると、ドライブが自動的にAvailableとして登録されます。それぞれのドライブがクラスタに参加できるようにするには、ドライブをクラスタに追加しておく必要があります。

タスク概要

次の場合、ドライブは[Available]リストに表示されません。

- ドライブがActive、Removing、Erasing、Failedのいずれかの状態である。
- ドライブが含まれているノードがPending状態である。

手順

- [NetApp Element Management] > [Cluster]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

- [Drives]サブタブで、ドロップダウンリストから[Available]を選択して使用可能なドライブのリストを表示します。
- 次の手順でドライブを追加します。
 - 追加する各ドライブのチェック ボックスを選択します。

2. [Add Drives]をクリックします。
4. 追加するドライブの詳細を確認し、操作を確定します。

ドライブの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[Cluster]タブにある[Drives]ページの[Active]ビューで、クラスタ内のアクティブ ドライブのリストを確認できます。ドロップダウン フィルタで使用可能なオプションを選択すると、ビューを切り替えることができます。

クラスタを最初に初期化した時点では、アクティブ ドライブのリストは空です。新しい クラスタを作成したら、[Available]タブに表示されている、クラスタに割り当てられていないドライブを追加できます。アクティブ ドライブのリストに表示される項目は次のとおりです。

Drive ID

ドライブに割り当てられている連番。

Drive State

ドライブのステータス。

有効な値は次のとおりです。

- Active : クラスタで使用されているドライブです。
- Available : クラスタに追加できるドライブです。
- Removing : ドライブは現在削除中です。このドライブに以前保存されていたデータをクラスタ内の他のドライブに移行しています。
- Erasing : ドライブは完全消去中です。このドライブ上のデータは完全に消去されます。
- Failed : 障害が発生したドライブです。このドライブに以前保存されていたデータは、クラスタ内の他のドライブに移行されました。ドライブの自己診断によりそのドライブでエラーが発生したことがノードに通知された場合、あるいはドライブとの通信が5分半以上停止した場合、ドライブは障害状態になります。

Node ID

ノードがクラスタに追加された際に割り当てられたノード番号。

Node Name

ドライブが配置されているノードの名前。

Slot

ドライブが物理的に配置されているスロットの番号。

Capacity (GB)

ドライブのサイズ (GB)。

Serial

SSDのシリアル番号。

Wear Remaining

摩耗レベル インジケータ。

Type

ドライブ タイプはblockまたはmetadataです。

ドライブの削除

NetApp Element Management拡張ポイントを使用して、クラスタからドライブを削除できます。この操作は、クラスタの容量を減らしたり、サービス寿命の終わりに近づいているドライブの交換準備を行ったりするときに実行します。削除したドライブはオフラインになります。ドライブ上のデータは、削除され、ドライブがクラスタから削除される前にすべてクラスタ内の他のドライブに移行されます。システム内の他のアクティブ ドライブへのデータ移行には、クラスタの容量の使用状況やアクティブなI/Oに応じて、数分から1時間かかります。

タスク概要

Failed状態のドライブを削除しても、ドライブの状態はAvailableまたはActiveには戻りません。そのドライブはクラスタで使用できなくなります。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Cluster]を選択します。
2. 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。
3. ドロップダウンリストから[All]を選択して、すべてのドライブのリストを表示します。
4. 次の手順でドライブを削除します。
 1. 削除する各ドライブのチェックボックスを選択します。
 2. [Remove Drives]をクリックします。
5. 操作を確定します。

注: アクティブ ドライブを削除するための十分な容量がない場合は、ドライブの削除を確定した時点でエラー メッセージが表示されます。

ノード

ノードは、クラスタにグループ化され、ブロックストレージまたはコンピューティングリソースとしてアクセスされるハードウェアです。

NetApp HCIストレージノード

NetApp HCIストレージノードは、NetApp HCIシステムのストレージリソースを提供するハードウェアです。ノード上のドライブには、データの格納用と管理用にブロックスペースとメタデータスペースが確保されます。各ノードには、NetApp Elementソフトウェアの工場出荷時のイメージが含まれています。NetApp HCIストレージノードは、NetApp Element Management拡張ポイントを使用して管理できます。

NetApp HCIコンピューティングノード

NetApp HCIコンピューティングノードは、NetApp HCI環境における仮想化に必要なリソース（CPU、メモリ、ネットワークなど）を提供するノードハードウェアです。各サーバがVMware ESXiを実行するため、NetApp HCIコンピューティングノードの管理（ホストの追加と削除）はプラグインの外部（vSphereの[Hosts and Clusters]メニュー）で行う必要があります。

SolidFireストレージノード

SolidFireオールフラッシュアレイストレージノードは、CIP1 Bond10Gネットワークインターフェイスを通じて相互に通信するドライブの集まりです。ノード上のドライブには、データの格納用と管理用にブロックスペースとメタデータスペースが確保されます。新しいストレージノードで構成されるクラスタを作成したり、または既存のクラスタにストレージノードを追加して、ストレージの容量およびパフォーマンスを拡張できます。

ストレージノードには次のような特徴があります。

- 各ノードには固有名前が付けられます。管理者が名前を指定しない場合、ノードにはデフォルトで「SF-XXXX」という名前が付けられます。XXXXは、システムによってランダムに生成される任意の4文字です。
- 各ノードに高性能な専用のNon-Volatile Random Access Memory (NVRAM; 不揮発性RAM) 書き込みキャッシュが搭載されており、システム全体のパフォーマンスの向上と書き込みレイテンシの低減が実現します。
- 各ノードは2つの独立したリンクで2つのネットワークに接続され、冗長性とパフォーマンスが確保されます。それぞれのノードに各ネットワークのIPアドレスが必要です。
- クラスタに対するノードの追加や削除は、サービスを中断することなくいつでも実行できます。

SolidFire Fibre Channelノード

SolidFire Fibre ChannelノードはFibre Channelスイッチへの接続を提供し、Fibre ChannelスイッチはFibre Channelクライアントに接続できます。Fibre Channelノードは、Fibre ChannelプロトコルとiSCSIプロトコルの間のプロトコルコンバータとして機能するため、新規または既存のあらゆるSolidFireクラスタへのFibre Channel接続を追加できます。

Fibre Channelノードには次の特徴があります。

- Fibre Channelスイッチがファブリックの状態を管理し、相互接続が最適化されます。
- 2つのポート間のトラフィックはスイッチ経由でのみ送信され、他のポートには送信されません。
- ポートの障害は分離され、他のポートの動作には影響しません。
- 1つのファブリック内で複数のポートペアが同時に通信することができます。

Fibre Channelノードはペアで追加され、アクティブ / アクティブモードで動作します（すべてのFibre Channelノードがクラスタのトラフィックをアクティブに処理します）。

SolidFireクラスタでのFibre Channel接続には、少なくとも2つのFibre Channelノードが必要です。NetApp Elementソフトウェア9.0以降を実行しているクラスタでは、最大4つのFibre Channelノードがサポートされます。

クラスタへのノードの追加

クラスタを作成する場合やストレージの追加が必要な場合に、ストレージノードを追加できます。

開始する前に

- 追加するノードのセットアップ、電源投入、設定を完了しておきます。
- ソフトウェアの互換性を確保するために、ソフトウェアのメジャー バージョン番号とマイナー バージョン番号の両方がクラスタ内の各ノードで一致している必要があります。たとえば、Elementバージョン9.0とバージョン9.1は互換性がありません。

注: 追加するノードのNetApp Elementソフトウェアのメジャー バージョンまたはマイナー バージョンがクラスタで実行されているバージョンと異なる場合、クラスタマスターで実行されているNetApp Elementソフトウェアのバージョンに非同期で更新されます。更新されたノードは、自動的にクラスタに追加されます。この非同期プロセスの実行中、ノードの状態はpendingActiveになります。

タスク概要

ノードは、初回の電源投入時に初期設定を行う必要があります。ノードのセットアップと設定が完了すると、ノードの設定時に指定したクラスタにノードが登録され、NetApp

Element Management拡張ポイントの[Cluster] > [Nodes]ページにある選択可能なノードのリストに表示されます。

既存のクラスタには、大小さまざまな容量のノードを追加できます。

手順は、NetApp Elementソフトウェアを実行しているFibre Channelノードまたはストレージノードを追加する場合と同じです。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Cluster]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Nodes]サブタブをクリックします。
3. ドロップダウンリストから[Pending]を選択して、ノードのリストを表示します。
4. ノードを追加するには、次の手順を実行します。
 1. 追加する各ノードのチェックボックスを選択します。
 2. [Add Node]をクリックします。
5. 追加するノードの詳細を確認し、操作を確定します。

操作が完了すると、ノードがクラスタのアクティブノードのリストに表示されます。

ノードの詳細

NodesClusterNetApp Element Managementクラスタ内のノードのリストは、タブの拡張ポイントのページで表示できます。Activeアクティブなノードのリストを表示するには、Viewを選択する必要があります。PendingPendingActiveAllドロップダウンフィルタを使用して、「」、「」、および「」オプションを選択して、表示を変更できます。

Node ID

システムによって生成されたノードのID。

ノード名

システムによって生成されたか管理者が割り当てたノード名。

注:2ノードクラスタの監視ノードの場合、ESXiホストがプラグインを実行しているvCenterで管理されていると、ESXiホストのIPがかっこ内に表示されます。

Node State

ノードのステータス。

有効な値は次のとおりです。

- **Active** : ノードはクラスタのアクティブなメンバーであり、別のクラスタに追加できません。
- **Pending** : ノードは特定の名前付きクラスタで保留中で、追加できます。
- **PendingActive** : ノードは現在、工場出荷時のソフトウェアイメージに返却されていますが、クラスタのアクティブなメンバーではありません。完了するActiveと、状態に移行します。

Available 4k IOPS

ノードに設定されたIOPSが表示されます。

Node Role

クラスタ内でのノードのロールを示します。

有効な値は次のとおりです。

- **Cluster Master** : クラスタ全体の管理タスクを実行し、MVIPとSVIPを含むノード。
- **Ensemble Node** : クラスタに参加するノード。クラスタのサイズに応じて、3つまたは5つのアンサンブルノードがあります。
- **Fibre Channel** : クラスタ内のファイバチャネルノード。

ノード タイプ

ノードのモデルタイプが表示されます。

注: 仮想ノードタイプは `sfVirt` と表示されます。

Active Drives

ノード内のアクティブドライブの数。

Management IP

ノードに割り当てられた管理IP（MIP）アドレス。1GbEまたは10GbEネットワークの管理タスクで使用されます。

Storage IP

ノードに割り当てられたストレージIP（SIP）アドレス。iSCSIネットワークの検出およびすべてのデータネットワークトラフィックに使用されます。

Management VLAN ID

管理ローカルエリアネットワークの仮想ID。

Storage VLAN

ストレージローカルエリアネットワークの仮想ID。

バージョン

各ノードで実行されているNetApp Elementソフトウェアのバージョン。

クラスタからのノードの削除

ノードのストレージが不要になったときや、ノードのメンテナンスが必要なときは、サービスを中断することなくクラスタからノードを削除できます。

開始する前に

ノード内のすべてのドライブをクラスタから削除しておきます。*RemoveDrives*のプロセスが完了してすべてのデータがノードから移行されるまで、ノードを削除することはできません。

タスク概要

NetApp ElementクラスタでのFibre Channel接続には、少なくとも2つのFibre Channelノードが必要です。Fibre Channelノードが1つしか接続されていない場合、別のFibre Channelノードをクラスタに追加するまで[Event Log]にアラートが記録されます。ただしFibre Channelのすべてのネットワークトラフィックは、Fibre Channelノードが1つしかない状態でも引き続き処理されます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Cluster]を選択します。

注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Nodes]サブタブをクリックします。
3. 1つ以上のノードを削除するには、次の手順を実行します。
 1. [Active]ビューで、削除する各ノードのチェックボックスを選択します。

2. [Actions]をクリックします。
3. [Remove]を選択します。
4. 操作を確定します。

クラスタから削除されたノードは、[Pending]のノードリストに表示されます。

関連タスク

[ドライブの削除](#) (146ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントを使用して、クラスタからドライブを削除できます。この操作は、クラスタの容量を減らしたり、サービス寿命の終わりに近づいているドライブの交換準備を行ったりするときに実行します。削除したドライブはオフラインになります。ドライブ上のデータは、削除され、ドライブがクラスタから削除される前にすべてクラスタ内の他のドライブに移行されます。システム内の他のアクティブ ドライブへのデータ移行には、クラスタの容量の使用状況やアクティブなI/Oに応じて、数分から1時間かかります。

クラスタ ノードの再起動

NetApp Element Management拡張ポイントを使用して、クラスタ内の1つ以上のアクティブ ノードを再起動できます。

開始する前に

同時に複数のノードを再起動する場合は、I/Oを停止し、すべてのiSCSIセッションを切断しておきます。

タスク概要

クラスタを再起動するには、すべてのクラスタ ノードを選択します。



注意: このメソッドは、ノードのすべてのネットワークサービスをリスタートします。このため、ネットワーク接続が一時的に失われます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Cluster]を選択します。
注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。
2. [Nodes]サブタブをクリックします。
3. [Active]ビューで、再起動する各ノードのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. [Restart]を選択します。
6. 操作を確定します。

クラスタ ノードのシャットダウン

NetApp Element Management拡張ポイントを使用して、クラスタ内の1つ以上のアクティブ ノードをシャットダウンできます。クラスタをシャットダウンするには、すべてのクラスタ ノードを選択して同時にシャットダウンします。

開始する前に

同時に複数のノードをシャットダウンする場合は、I/Oを停止し、すべてのiSCSIセッションを切断しておきます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Cluster]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Nodes]サブタブをクリックします。
3. [Active]ビューで、シャットダウンする各ノードのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. [Shutdown]を選択します。
6. 操作を確定します。

注:ノードが何らかの理由でシャットダウン状態になって5分半以上が経過すると、NetApp Elementソフトウェアはノードが再びクラスタに参加することはない判断します。Double Helixデータ保護は、レプリケートされた個々のブロックを別のノードに書き込んでデータをレプリケートするタスクを開始します。ノードがシャットダウンしていた時間によっては、ノードがオンラインに戻ったあとにドライブを再度クラスタに追加する必要があります。

関連タスク

[クラスタノードの再起動](#) (150ページ)

NetApp Element Management拡張ポイントを使用して、クラスタ内の1つ以上のアクティブノードを再起動できます。

関連情報

[Powering off and powering on a NetApp HCI system](#)

VLANの管理

NetApp Elementストレージの仮想ネットワークを使用すると、別々の論理ネットワークに属する複数のクライアント間のトラフィックを1つのNetApp Elementクラスタに接続できます。Elementでは、仮想ネットワークを実装する基盤テクノロジとしてVLANを使用しています。

NetApp Element Plug-in for vCenterでは、選択したクラスタのVLANを管理できます。VLANの作成、表示、編集、削除が可能です。VLANの管理オプションは、NetApp Element Management拡張ポイントからのみ使用できます。

VLANの作成

クラスタ構成に新しい仮想ネットワークを追加すると、マルチテナント環境からNetApp Elementソフトウェアを実行しているクラスタに接続できるようになります。

開始する前に

- ESXiホストにiSCSIソフトウェアアダプタが1つ必要です。
- VLAN用にホストまたはスイッチが設定されている必要があります。
- クラスタノード上の仮想ネットワークに割り当てるIPアドレス範囲を特定しておきます。
- NetApp Elementのすべてのストレージトラフィックのエンドポイントとして使用するストレージネットワークIP (SVIP) アドレスを特定しておきます。



注意:この構成では、次の条件を考慮する必要があります。

- VRFは、VLANの作成時にのみ有効にすることができます。非VRFに戻す場合は、VLANを削除して再作成する必要があります。

- VRFが有効でないVLANでは、SVIPと同じサブネットにイニシエータが含まれている必要があります。
- VRFが有効なVLANでは、SVIPと同じサブネットにイニシエータが含まれている必要はなく、ルーティングがサポートされます。

タスク概要

仮想ネットワークを追加すると、各ノードのインターフェイスが作成され、そのそれぞれに仮想ネットワークIPアドレスが必要となります。新しい仮想ネットワークを作成する際に指定するIPアドレスの数は、クラスタ内のノードの数以上であることが必要です。仮想ネットワークアドレスはまとめてプロビジョニングされ、個々のノードに自動的に割り当てられます。仮想ネットワークアドレスをクラスタ内のノードに手動で割り当てる必要はありません。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Cluster]を選択します。

注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Network]サブタブをクリックします。
3. [Create VLAN]をクリックします。
4. [Create VLAN]ダイアログ ボックスで、VLANの名前を入力します。
5. VLANタグを整数で入力します。
6. ストレージ クラスタのストレージ仮想IP（SVIP）アドレスを入力します。
7. 必要に応じて、ネットマスクを調整します。

デフォルトは

255.255.255.0

です。

8. オプション: VLANの説明を入力します。
9. オプション: [Enable Virtual Routing and Forwarding]チェック ボックスを選択します。

注: 仮想ルーティング / 転送 (VRF) を有効にすると、ルーティング テーブルの複数のインスタンスをルータ内に共存させ、同時に使用することができます。この機能はストレージ ネットワークでのみ使用できます。

1. 仮想ネットワークのゲートウェイのIPアドレスを入力します。
10. VLANに含めるホストを選択します。

注: vCenterリンク モードを使用している場合は、クラスタが割り当てられている vCenter Serverから使用可能なホストのみを選択できます。

11. ストレージ ノードのIPアドレス ブロックを次の手順で設定します。

注: 少なくとも1つのIPアドレス ブロックを作成する必要があります。

1. [Create Block]をクリックします。
2. IP範囲の開始アドレスを入力します。
3. アドレス ブロックに含めるIPアドレスの数を入力します。

注: IPアドレスの総数は、ストレージ クラスタのノードの数と一致しなければなりません。

4. エントリの外部をクリックして値を受け入れます。
12. [OK]をクリックしてVLANを作成します。

仮想ネットワークの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[Cluster]タブにある[Network]ページで、VLANに関するネットワーク情報を確認できます。

ID

Elementシステムによって割り当てられたVLANネットワークの一意のID。

VLAN Name

VLANネットワークにユーザが割り当てた一意の名前。

VLAN Tag

仮想ネットワークの作成時に割り当てられたVLANタグ。

SVIP

仮想ネットワークに割り当てられたストレージ仮想IPアドレス。

IPs Used

仮想ネットワークで使用される仮想ネットワークIPアドレスの範囲。

仮想ネットワークの編集

VLAN名、ネットマスク、IPアドレス ブロックのサイズなどのVLAN属性を変更できます。

タスク概要

VLANのVLANタグおよびSVIPは変更できません。ゲートウェイ属性を変更できるのはVRF VLANのみです。iSCSI、リモートレプリケーション、またはその他のネットワークセッションの実行中は、変更に失敗することがあります。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Cluster]を選択します。
注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。
2. [Network]サブタブをクリックします。
3. 編集するVLANのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Edit]をクリックします。
6. 表示されたメニューで、VLANの新しい属性を入力します。
7. 仮想ネットワークに連続しないIPアドレス ブロックを追加するには、[Create Block]をクリックします。
8. [OK]をクリックします。

仮想ネットワークの削除

VLANオブジェクトとそのIPブロックを完全に削除できます。VLANに割り当てられていたアドレス ブロックは、割り当てが解除されて、別の仮想ネットワークに再割り当てできるようになります。

手順

1. [NetApp Element Management] > [Cluster]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Network]サブタブをクリックします。
3. 削除するVLANのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Delete]をクリックします。
6. 操作を確定します。

仮想ボリューム

NetApp Element Management拡張ポイントから、仮想ボリュームおよび仮想ボリュームに関連付けられたストレージコンテナ、プロトコルエンドポイント、バインド、およびホストの情報を確認して、タスクを実行できます。Virtual Volumes機能をクラスタで使用できるように事前に有効にしておく必要があります。

vSphere Virtual Volumes (VVol) 機能の設定

NetApp Element Plug-in for vCenter Serverで仮想ボリューム (VVol) 機能を使用するには、初期設定手順を実行する必要があります。

開始する前に

NetApp ElementクラスタがVVolに対応したESXi 6.0以降の環境に接続されている必要があります。

手順

1. NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、NetApp Elementクラスタの仮想ボリューム機能を有効にします。
2. VASA ProviderをvCenterに登録します。
3. NetApp Element Management拡張ポイントを使用して、ストレージコンテナおよび関連付けるVVolデータストアを作成します。
4. ストレージコンテナの作成時にデータストアを作成しなかった場合は、vCenterでVVolデータストアを作成してストレージコンテナに関連付けます。

関連タスク

[Virtual Volumesの有効化](#) (35ページ)

NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、vSphere Virtual Volumes (VVol) 機能を手動で有効にする必要があります。ElementシステムのVVol機能はデフォルトでは無効になっており、新規インストール時やアップグレード時に自動的に有効になることはありません。VVol機能の有効化は1度だけ実行します。

[ネットアップ Element VASA Providerの登録](#) (156ページ)

vCenterでクラスタのVVol機能が認識されるように、ネットアップ Element VASA ProviderをvCenterに登録する必要があります。vCenterへのVASA Providerの登録は1度だけ実行します。

[ストレージコンテナの作成](#) (163ページ)

ストレージコンテナはNetApp Element Management拡張ポイントの[VVols]タブで作成できます。VVolを使用する仮想マシンのプロビジョニングを開始するためには、少なくとも1つのストレージコンテナを作成する必要があります。

[VVolデータストアの作成](#) (157ページ)

NetApp Elementクラスタ上のストレージコンテナを表す仮想ボリュームデータストアをvCenterで作成する必要があります。VVolデータストアは、ストレージコンテナ作成ウィザードまたは以下のプロセスを使用して作成できます。VVolを使用する仮想マシンのプロビジョニングを開始するためには、少なくとも1つのVVolデータストアを作成する必要があります。

ネットアップ Element VASA Providerの登録

vCenterでクラスタのVVol機能が認識されるように、ネットアップ Element VASA Provider をvCenterに登録する必要があります。vCenterへのVASA Providerの登録は1度だけ実行します。

開始する前に

- ・ エレメントストレージクラスタバージョン 9.2 以降で VVol 機能を有効にしている。
- ・ vCenter 6.xが必要です。
- ・ ESXi 6.xが必要です。

タスク概要

ここでは、vSphere 6.7の場合の手順を説明しています。インストールされているvSphereのバージョンによっては、vSphereのユーザインターフェイスが多少異なる場合があります。 詳細については、VMware vCenterのドキュメントを参照してください。



注意: ネットアップ Element VASA Providerを複数の vCenterインスタンスに登録しないでください。
vCenterでのSSLの処理に制約があるため、ネットアップ Element VASA Providerは1つのvCenterにしか登録できません。1つのvCenterに複数のネットアップ Elementクラスタを作成できますが、2つのvCenterインスタンス間でクラスタを共有することはできません。

注: VASA Provider を vCenter にすでに登録している場合は、複数の vCenter 向けの VASA サポートをアップグレードパッチとして利用できます。インストールするにネットアップElementは、 VASA 39 マニフェストの指示に従って、 NetApp ソフトウェアダウンロードサイトから .tar.gz ファイルをダウンロードします。 NetApp Element VASA Provider は、 NetApp 証明書を使用します。このパッチでは、 VASA および VVol で使用する複数の vCenter をサポートするために、証明書は vCenter によって変更されずに使用されます。 証明書は変更しないでください。カスタム SSL 証明書は VASA ではサポートされていません。

手順

1. vSphere Client で**HomeHosts and Clusters**、をクリックします。
2. ネットアップElement VASA Provider を登録する vCenter インスタンスを選択します。
3. **Configure > Storage Providers**をクリックします。
4. から**Storage Providers**、 [Add] アイコンをクリックします。
New Storage Providerダイアログボックスが表示されます。
5. 次の情報を入力します。
 - ・ VASA Providerの名前。
 - ・ VASA ProviderのURL。

注: VASA ProviderのURLは、vCenter Plug-inでVVolを有効にすると提供されます。 URL は次の場所にもあります。

- ・ vCenter プラグイン : を選択**NetApp Element Configuration > ClustersActionsDetails**し、有効にするクラスタのをクリックして、をクリックします。
- ・ Element UI: From <https://MVIP/cluster> 、 Select**Cluster > Settings** の順に選択します。

- ネットアップ Elementクラスタの管理用アカウントのユーザ名。
- ネットアップ Elementクラスタの管理用アカウントのパスワード。
- OKVASA プロバイダを追加する場合にクリックします。

6. プロンプトが表示されたら、SSLのサムプリントを承認します。

これでネットアップ Element VASA Providerが登録され、ステータスがConnectedになります。

注 : プロバイダの初回登録後にプロバイダの最新のステータスを表示するには、ストレージプロバイダを更新します。でプロバイダーが有効NetApp Element Configuration > Clustersになっていることを確認することもできます。Actions有効にするクラスタのをクリックしDetails、をクリックします。

VVolデータストアの作成

NetApp Elementクラスタ上のストレージコンテナを表す仮想ボリュームデータストアをvCenterで作成する必要があります。VVolデータストアは、ストレージコンテナ作成ウィザードまたは以下のプロセスを使用して作成できます。VVolを使用する仮想マシンのプロビジョニングを開始するためには、少なくとも1つのVVolデータストアを作成する必要があります。

開始する前に

- VVol機能が有効になっているNetApp Elementソフトウェアがクラスタで実行されている必要があります。
- 仮想環境にストレージコンテナが存在している必要があります。
- VASA ProviderをvCenterに登録する必要があります。

注 : 場合によっては、vCenterでNetApp Elementストレージを再スキャンし、ストレージコンテナを検出する必要があります。

手順

1. vCenterのナビゲータビューで、ストレージクラスタを右クリックし、[Storage] > [Datastores] > [New Datastore]を選択します。
2. [New Datastore]ダイアログボックスで、作成するデータストアのタイプとして[VVol]を選択します。
3. [Datastore name]フィールドにデータストアの名前を入力します。
4. [Backing Storage Container]リストからNetApp Elementストレージコンテナを選択します。
5. データストアへのアクセスを必要とするホストを選択します。
6. [Next]をクリックします。
7. 設定を確認し、[Finish]をクリックしてVVolデータストアを作成します。

関連タスク

[Virtual Volumesの有効化](#) (35ページ)

NetApp Element Configuration拡張ポイントを使用して、vSphere Virtual Volumes (VVol) 機能を手動で有効にする必要があります。ElementシステムのVVol機能はデフォルトでは無効になっており、新規インストール時やアップグレード時に自動的に有効になることはありません。VVol機能の有効化は1度だけ実行します。

[ネットアップ Element VASA Providerの登録](#) (156ページ)

vCenterでクラスタのVVol機能が認識されるように、ネットアップ Element VASA Provider をvCenterに登録する必要があります。vCenterへのVASA Providerの登録は1度だけ実行します。

[ストレージコンテナの作成](#) (163ページ)

ストレージコンテナはNetApp Element Management拡張ポイントの[VVols]タブで作成できます。VVolを使用する仮想マシンのプロビジョニングを開始するためには、少なくとも1つのストレージコンテナを作成する必要があります。

仮想ボリュームの詳細の表示

NetApp Element Management拡張ポイントでは、クラスタ上のすべてのアクティブな仮想ボリュームに関する全般的な情報を確認できます。また、各仮想ボリュームに固有な情報(効率性、パフォーマンス、QoSなど)および関連付けられているSnapshot、親仮想マシン、バインド、タスクステータスも確認できます。

開始する前に

- VVolの有効化およびVASA Providerの登録を完了しておきます。
- 仮想ボリュームを少なくとも1つ作成しておきます。
- 仮想ボリュームの詳細が表示されるようにVMの電源をオンにしておきます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [VVols]を選択します。

複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Virtual Volumes]タブで、特定の仮想ボリュームを検索します。

3. 確認する仮想ボリュームのチェックボックスを選択します。

4. [Actions]をクリックします。

5. 表示されたメニューで[Details]を選択します。

関連タスク

[vSphere Virtual Volumes \(VVol\) 機能の設定](#) (155ページ)

NetApp Element Plug-in for vCenter Serverで仮想ボリューム (VVol) 機能を使用するには、初期設定手順を実行する必要があります。

仮想ボリュームの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[VVols]タブにある[Virtual Volumes]ページで、クラスタ上のすべてのアクティブな仮想ボリュームに関する情報を確認できます。

Virtual Machine ID

仮想マシンのUUID。

Name

仮想ボリュームに割り当てられている名前。

Type

仮想ボリュームのタイプ (Config、Data、Memory、Swap、またはOther)。

Container

仮想ボリュームを所有するストレージコンテナのUUID。

Volume ID

基盤となるボリュームのID。

Virtual Volume ID

仮想ボリュームのUUID。

個々の仮想ボリュームの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[VVols]タブにある[Virtual Volumes]ページでは、個々の仮想ボリュームを選択してその詳細を表示し、仮想ボリューム情報を確認できます。

[General Details]セクションには次の情報が表示されます。

Name

仮想ボリュームに割り当てられている名前。

Volume ID

基盤となるボリュームのID。

Virtual Volume ID

仮想ボリュームのUUID。

Virtual Volume Type

仮想ボリュームのタイプ（Config、Data、Memory、Swap、またはOther）。

Status

VVolタスクのステータス。

Storage Container

仮想ボリュームを所有するストレージコンテナのUUID。

Size

ボリュームのサイズ（GBまたはGiB）。

Access

仮想ボリュームに割り当てられている読み取り / 書き込み権限。

[Efficiency]セクションには次の情報が表示されます。

Compression

ボリュームの圧縮による削減率。

Deduplication

ボリュームの重複排除による削減率。

Thin Provisioning

ボリュームのシンプロビジョニングによる削減率。

Last Updated

前回の削減率更新日時。

[Performance]セクションには、次の詳細が表示されます。

Account ID

関連付けられているアカウントの一意のアカウントID。

Actual IOPS

過去500ミリ秒の、ボリュームに対する実際のIOPS。

Async Delay

ボリュームが最後にリモートクラスタと同期されてからの時間。

Average IOP Size

過去500ミリ秒の、ボリュームに対する最新のI/Oの平均サイズ（バイト）。

Burst IOPS Size

ユーザが利用可能なIOPクレジットの合計数。ボリュームが最大IOPSに到達していない場合、クレジットは蓄積されます。

Client Queue Depth

ボリュームに対する未処理の読み取りおよび書き込み処理の数。

Last Updated

前回のパフォーマンス更新日時。

Latency USec

過去500ミリ秒の、ボリュームに対する処理が完了するまでの平均時間（マイクロ秒）。値「0」（ゼロ）はボリュームに対するI/Oがなかったことを意味します。

Non-Zero Blocks

前回のガベージコレクション完了後、データが含まれる4KiBブロックの総数。

Performance Utilization

消費されているクラスタIOPSの割合。たとえば、25万IOPSのクラスタが10万IOPSで実行されている場合、消費率は40%です。

Read Bytes

ボリュームの作成以降にボリュームから読み込んだ累積バイト総数。

Read Latency USec

過去500ミリ秒の、ボリュームに対する読み取り処理が完了するまでの平均時間（マイクロ秒）。

Read Operations

ボリューム作成以降にボリュームに対して行った読み取り処理の合計数。

Thin Provisioning

ボリュームのシンプロビジョニングによる削減率。

Throttle

0~1の浮動小数点数。データの再レプリケーション、一時的なエラー、Snapshotの作成のために、クライアントの処理量をmaxIOPS未満に抑えている割合。

Total Latency USec

ボリュームに対する読み取りおよび書き込み処理が完了するまでの時間（マイクロ秒）。

Unaligned Reads

512eボリュームの場合、4kセクターの境界に沿っていない読み取り処理の数。アライインされていない読み取りが多数ある場合は、パーティションのアライメントが適切でない可能性があります。

Unaligned Writes

512eボリュームの場合、4kセクターの境界に沿っていない書き込み処理の数。アライインしていない書き込みが多数ある場合は、パーティションのアライメントが適切でない可能性があります。

Volume ID

システムによって生成されたボリュームのID。

Volume Size

ボリュームのサイズ（バイト）。

Volume Utilization

クライアントによるボリュームの使用率を示すパーセンテージ。

有効な値は次のとおりです。

- 0 : クライアントはボリュームを使用していません。
- 100 : クライアントは最大値まで使用しています。
- >100 : クライアントはバースト値を使用しています。

Write Bytes

ボリュームの作成以降にボリュームに書き込まれた累積バイト総数。

Write Latency USec

過去500ミリ秒の、ボリュームに対する書き込み処理が完了するまでの平均時間（マイクロ秒）。

Write Operations

ボリュームの作成以降にボリュームに対して行った書き込み処理の累積総数。

Zero Blocks

前回のガベージコレクション完了後、データが含まれない4KiBブロックの総数。

Used Capacity

使用済み容量の割合。

[Quality of Service]セクションには、次の詳細が表示されます。

I/O Size

IOPSのサイズ（KB）。

Min IOPS

クラスタがボリュームに提供する平常時の最小IOPS。ボリュームに設定されたMin IOPSは、そのボリュームに対して最低限保証されるパフォーマンス レベルです。
パフォーマンスがこのレベルを下回ることはありません。

Max IOPS

クラスタがボリュームに提供する平常時の最大IOPS。クラスタのIOPSレベルが非常に高い場合も、IOPSパフォーマンスはこのレベル以下に抑えられます。

Burst IOPS

短時間のバースト時に許容される最大IOPS。ボリュームがMax IOPS未満で動作している間は、バーストクレジットが蓄積されます。パフォーマンス レベルが非常に高くなつて最大レベルに達した場合、ボリュームでIOPSの短時間のバーストが許容されます。

Max Bandwidth

ブロック サイズの増加に対応するために使用が許可される最大帯域幅。

[Virtual Machine]セクションには、次の詳細が表示されます。

Virtual Machine ID

仮想マシンのUUID。

VM Name

仮想マシンの名前。

Guest OS Type

仮想ボリュームに関連付けられたオペレーティング システム。

Virtual Volumes

仮想ボリュームのUUIDおよびVM名のリスト。

[Bindings]セクションには次の見出しがあります。

Host

仮想ボリュームをホストしていて、クラスタが認識しているESXiホストのUUID。

Protocol Endpoint ID

クラスタ内の各ノードに対応するプロトコルエンドポイントID。

PE Type

プロトコルエンドポイントのタイプ (NetApp Elementソフトウェアで使用可能なプロトコルはSCSIのみです)。

[Tasks]セクションには、次の詳細が表示されます。

Operation

タスクが実行している処理のタイプ。

値は次のとおりです。

- `unknown` : 不明なタスク処理です。
- `prepare` : タスクは仮想ボリュームを準備中です。
- `snapshot` : タスクは仮想ボリュームのSnapshotの作成中です。
- `rollback` : タスクは仮想ボリュームをSnapshotにロールバック中です。
- `clone` : タスクは仮想ボリュームのクローンを作成中です。
- `fastClone` : タスクは仮想ボリュームの高速クローンを作成中です。
- `copyDiffs` : タスクは仮想ボリュームに異なるブロックをコピー中です。

Status

仮想ボリューム タスクの現在のステータス。

値は次のとおりです。

- `Error` : タスクは失敗し、エラーが返されました。
- `Queued` : タスクは実行待ちです。
- `Running` : タスクは現在実行中です。
- `Success` : タスクは正常に完了しました。

Task ID

タスクの一意のID。

ストレージ コンテナ

ストレージ コンテナは、NetApp Elementアカウントにマッピングされた論理構成要素であり、レポートの作成やリソースの割り当てに使用されます。このコンテナには、ストレージシステムが仮想ボリュームに提供できる物理ストレージ容量またはアグリゲートのストレージ機能がプールされます。vSphereで作成されたVVolデータストアは、個々のストレージ コンテナにマッピングされます。1つのストレージ コンテナには、NetApp Element クラスタから使用可能なリソースがデフォルトですべて含まれています。マルチテンナーをより詳細に管理する必要がある場合は、複数のストレージ コンテナを作成できます。

ストレージコンテナは従来のアカウントと同じように機能し、仮想ボリュームとトラデイショナルボリュームの両方を格納できます。クラスタごとに最大4つのストレージコンテナがサポートされます。VVol機能を使用するには、少なくとも1つのストレージコンテナが必要です。NetApp Element Management拡張ポイントの[VVols] > [Storage Containers]ページで、ストレージコンテナの作成、削除、および詳細の表示を行うことができます。vCenterではVVolの作成時にストレージコンテナを検出できます。

ストレージコンテナの作成

ストレージコンテナはNetApp Element Management拡張ポイントの[VVols]タブで作成できます。VVolを使用する仮想マシンのプロビジョニングを開始するためには、少なくとも1つのストレージコンテナを作成する必要があります。

開始する前に

- クラスタでVVol機能を有効にしておきます。
- 仮想ボリューム用のNetApp Element VASA ProviderをvCenterに登録しておきます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [VVols]を選択します。

注: 複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

2. [Storage Containers]サブタブをクリックします。

3. [Create Storage Container]をクリックします。

4. [Create a New Storage Container]ダイアログボックスにストレージコンテナ情報を入力します。

1. ストレージコンテナの名前を入力します。

ヒント: わかりやすい命名のベストプラクティスを使用してください。これは、環境で複数のクラスタやvCenter Serverを使用している場合に特に重要です。

2. CHAP用のイニシエータシークレットとターゲットシークレットを設定します。

ベストプラクティス: シークレットを自動生成するには、[CHAP Settings]フィールドを空白のままにしてください。

3. オプション: データストアの名前を入力します。[Create a datastore]チェックボックスはデフォルトで選択されます。

注: vSphereでストレージコンテナを使用するにはVVolデータストアが必要です。ここでデータストアを作成しない場合は、あとでvSphereの新しいデータストアウィザードを使用してデータストアを作成する必要があります。

4. データストアのホストを1つ以上選択します。

注: vCenterリンクモードを使用している場合は、クラスタが割り当てられているvCenter Serverから使用可能なホストのみを選択できます。

5. [OK]をクリックします。

5. 新しいストレージコンテナが[Storage Containers]サブタブのリストに表示されていることを確認します。

注: NetApp ElementアカウントIDは自動的に作成されてストレージコンテナに割り当てられるため、アカウントを手動で作成する必要はありません。

6. オプション: [Create a datastore]を選択した場合は、関連するデータストアもvCenterの選択したホストに作成されていることを確認します。

関連概念

[複数クラスタを管理する場合のオブジェクト名のベストプラクティス](#) (31ページ)

クラスタコンポーネントを簡単に識別できるように、NetApp Element Plug-in for vCenter Serverに関するすべてのオブジェクトに一貫したわかりやすい命名規則を使用する必要があります。これは、特にvCenter Serverやクラスタを複数使用する環境において重要となります。

関連タスク

[vSphere Virtual Volumes \(VVVol\) 機能の設定](#) (155ページ)

NetApp Element Plug-in for vCenter Serverで仮想ボリューム (VVVol) 機能を使用するには、初期設定手順を実行する必要があります。

ストレージ コンテナの詳細の表示

NetApp Element Management拡張ポイントでは、クラスタ上のすべてのアクティブなストレージコンテナに関する情報を確認できます。効率とパフォーマンスの指標、関連付けられた仮想ボリュームなど、各ストレージ コンテナの詳細も確認できます。

開始する前に

- クラスタでVVVol機能を有効にしておきます。
- 少なくとも1つのストレージ コンテナが選択可能である必要があります。

手順

- [NetApp Element Management] > [VVols]を選択します。

注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。

- [Storage Containers]タブをクリックします。
- 確認するストレージ コンテナのチェックボックスを選択します。
- [Actions]をクリックします。
- 表示されたメニューで[Details]を選択します。

関連タスク

[vSphere Virtual Volumes \(VVVol\) 機能の設定](#) (155ページ)

NetApp Element Plug-in for vCenter Serverで仮想ボリューム (VVVol) 機能を使用するには、初期設定手順を実行する必要があります。

ストレージ コンテナの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[VVols]タブにある[Storage Containers]ページでは、クラスタ上のすべてのアクティブなストレージ コンテナに関する情報を確認できます。

Account ID

ストレージ コンテナに関連付けられたNetApp ElementアカウントのID。

Name

ストレージ コンテナの名前。

Status

ストレージ コンテナのステータス。

有効な値は次のとおりです。

- Active : ストレージ コンテナが使用中です。
- Locked : ストレージ コンテナがロックされています。

Volume Count

ストレージコンテナアカウントに関連付けられたアクティブな仮想ボリュームの数。

個々のストレージコンテナの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[VVols]タブにある[Storage Containers]ページでは、個々のストレージコンテナを選択してその詳細を表示し、ストレージコンテナ情報を確認できます。

[General Details]セクションには次の情報が表示されます。

Account ID

ストレージコンテナに関連付けられたクラスタアカウントのID。

Storage container ID

仮想ボリュームのストレージコンテナのUUID。

Storage Container Name

関連付けられているストレージコンテナの名前。

Datastore Name

関連付けられているデータストアの名前。

Status

ストレージコンテナのステータス。

有効な値は次のとおりです。

- Active : ストレージコンテナは使用中です。
- Locked : ストレージコンテナはロックされています。

Protocol Endpoint Type

プロトコルエンドポイントのタイプ (NetApp Elementソフトウェアで使用可能なプロトコルはSCSIのみです)。

Initiator Secret

イニシエータの一意のCHAPシークレット。

Target Secret

ターゲットの一意のCHAPシークレット。

Number of Volumes

ストレージコンテナアカウントに関連付けられたボリュームの数。

[Efficiency]セクションには次の情報が表示されます。

Compression

アカウント内のボリュームの圧縮による削減率。

Deduplication

アカウント内のボリュームの重複排除による削減率。

Thin Provisioning

アカウント内のボリュームのシンプロビジョニングによる削減率。

Missing Volumes

効率性に関するデータを照会できなかったボリューム。

Last Updated

前回の削減率更新日時。

[Performance Metrics]セクションには次の情報が表示されます。

Read Bytes

アカウント内のすべてのボリュームから読み取られたバイト数の累積合計。

Read Operations

アカウント作成以降にアカウント内のすべてのボリュームに対して行った読み取り処理の合計数。

Write Bytes

アカウント内のすべてのボリュームに書き込まれたバイト数の累積合計。

Write Operations

アカウント作成以降にアカウント内のすべてのボリュームに対して行った書き込み処理の合計数。

Unaligned Reads

アカウント内のすべての512eボリューム（仮想ボリュームはデフォルトで512e）について、4kセクターの境界に沿っていない読み取り処理の数。アラインされていない読み取りが多数ある場合は、パーティションのアライメントが適切でない可能性があります。

Unaligned Writes

アカウント内のすべての512eボリューム（仮想ボリュームはデフォルトで512e）について、4kセクターの境界に沿っていない書き込み処理の数。アラインしていない書き込みが多数ある場合は、パーティションのアライメントが適切でない可能性があります。

Non-Zero Blocks

前回のガベージコレクション完了後、データが含まれる4KiBブロックの総数。

Zero Blocks

前回のガベージコレクション完了後、データが含まれない4KiBブロックの総数。

Last Updated

前回のパフォーマンス更新日時。

[Virtual Volumes]セクションには次の情報が表示されます。

Volume ID

基盤となるボリュームのID。

Virtual Volume ID

仮想ボリュームのUUID。

Name

仮想ボリュームの名前。

Status

VVolタスクのステータス。

ストレージ コンテナの削除

NetApp Element Management拡張ポイントからストレージ コンテナを削除できます。

開始する前に

- 既存のストレージ コンテナが削除可能である必要があります。
- すべてのボリュームをストレージ コンテナから削除しておく必要があります。

手順

1. [NetApp Element Management] > [VVols]を選択します。
注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。
2. [Storage Containers]タブをクリックします。
3. 削除するストレージコンテナのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Delete]を選択します。
6. 操作を確定します。
7. [Storage Containers]サブタブでストレージコンテナのリストを更新して、ストレージコンテナが削除されていることを確認します。

プロトコル エンドポイント

VMware ESXiホストは、論理I/Oプロキシ（プロトコル エンドポイント）を使用して仮想ボリュームと通信します。ESXiホストは、I/O処理を実行するために仮想ボリュームをプロトコル エンドポイントにバインドします。ホスト上の仮想マシンがI/O処理を実行すると、関連付けられているプロトコル エンドポイントがバインドされている仮想ボリュームにI/Oを転送します。

NetApp Elementクラスタ内のプロトコル エンドポイントは、SCSI管理論理ユニットとして機能します。各プロトコル エンドポイントはクラスタによって自動的に作成されます。クラスタ内のノードごとに、対応するプロトコル エンドポイントが作成されます。たとえば、4ノード クラスタの場合には4つのプロトコル エンドポイントが作成されます。

NetApp ElementソフトウェアでサポートされているプロトコルはiSCSIだけです。Fibre Channelプロトコルはサポートされません。

ユーザがプロトコル エンドポイントを削除または変更することはできません。プロトコル エンドポイントはアカウントには関連付けられず、またボリューム アクセス グループに追加することはできません。

NetApp Element Management拡張ポイントの[VVols] > [Protocol Endpoints]ページでは、プロトコル エンドポイント情報を確認できます。

プロトコル エンドポイントの詳細の表示

NetApp Element Management拡張ポイントでは、クラスタ上のすべてのプロトコル エンドポイントに関する情報を確認できます。

手順

1. [NetApp Element Management] > [VVols]を選択します。
注:複数のクラスタが追加されている場合は、このタスクに使用するクラスタがナビゲーションバーで選択されていることを確認してください。
2. [Protocol Endpoints]タブをクリックします。
クラスタ上のすべてのプロトコル エンドポイントに関する情報が表示されます。
3. 確認するプロトコル エンドポイントのチェックボックスを選択します。
4. [Actions]をクリックします。
5. 表示されたメニューで[Details]を選択します。

プロトコル エンドポイントの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[VVols]タブにある[Protocol Endpoint]ページでは、クラスタ上のすべてのプロトコルエンドポイントに関する情報を確認できます。

Primary Provider

プライマリプロトコルエンドポイントプロバイダのID。

Secondary Provider

セカンダリプロトコルエンドポイントプロバイダのID。

Protocol Endpoint ID

プロトコルエンドポイントのUUID。

Status

プロトコルエンドポイントのステータス。

有効な値は次のとおりです。

- Active : プロトコルエンドポイントは使用中です。
- Start : プロトコルエンドポイントは起動中です。
- Failover : プロトコルエンドポイントはフェイルオーバーしました。
- Reserved : プロトコルエンドポイントはリザーブされています。

Provider Type

プロトコルエンドポイントプロバイダのタイプ。

有効な値は次のとおりです。

- Primary
- Secondary

SCSI NAA Device ID

プロトコルエンドポイントのSCSIデバイスのグローバル意識別子 (NAA IEEE Registered Extended形式)。

個々のプロトコル エンドポイントの詳細

NetApp Element Management拡張ポイントの[VVols]タブにある[Protocol Endpoint]ページでは、個々のプロトコルエンドポイントを選択してその詳細を表示し、プロトコルエンドポイント情報を確認できます。

注 : 仮想ボリュームの詳細は、VMの電源がオンになっているときにのみ表示されます。

Primary Provider ID

プライマリプロトコルエンドポイントプロバイダのID。

Secondary Provider ID

セカンダリプロトコルエンドポイントプロバイダのID。

Protocol Endpoint ID

プロトコルエンドポイントのUUID。

Status

プロトコルエンドポイントのステータス。

有効な値は次のとおりです。

- Active : プロトコルエンドポイントは使用中です。
- Start : プロトコルエンドポイントは起動中です。
- Failover : プロトコルエンドポイントはフェイルオーバーしました。

- Reserved : プロトコルエンドポイントはリザーブされています。

Provider Type

プロトコルエンドポイントプロバイダのタイプ。

有効な値は次のとおりです。

- Primary
- Secondary

SCSI NAA Device ID

プロトコルエンドポイントのSCSIデバイスのグローバル意識別子（NAA IEEE Registered Extended形式）。

[Hosts]セクションには次の情報が表示されます。

Host Name

ESXiホストの名前。

Host Address

ESXiホストのIPアドレスまたはDNS名。

Initiator

仮想ボリュームのホストのイニシエータIQN。

Virtual Volume Host ID

仮想ボリュームをホストしていて、クラスタが認識しているESXiホストのUUID。

[Virtual Volumes]セクションには次の情報が表示されます。

Volume ID

基盤となるボリュームのID。

Virtual Volume ID

仮想ボリュームのUUID。

Name

仮想マシンの名前。

Status

VVolタスクのステータス。

vCenter Plug-inの登録解除

ご使用のインストール環境に対応する手順を使用して、NetApp Element Plug-in for vCenter Serverの登録を解除できます。プラグインの登録解除は無効にした場合と同じ効果がありますが、関連するファイルやフォルダは削除されません。

開始する前に

- ・ プラグインの登録を解除するためのvCenter Administratorロールの権限。
- ・ 管理ノードのIPアドレス。
- ・ プラグインの登録を解除するvCenterのURLとクレデンシャル。

タスク概要

注 : vCenter Serverでプラグインパッケージの登録を解除しても、ローカルにインストールされているプラグインパッケージファイルは削除されません。すべてのプラグインファイルを削除するには、プラグインの削除手順を参照してください。

手順

プラグインの登録を解除するには、インストールされているバージョンに応じた手順に従ってください。

- ・ バージョン3.0 以降：
 - ・ vCenter Plug-in登録ユーティリティを使用してプラグインの登録を解除します。
 1. 登録用TCPポートを含む管理ノードのIPアドレスをブラウザに入力します ([https://\[management node IP\]:9443](https://[management node IP]:9443))。
 2. [Unregister Plug-in]をクリックします。
 3. 次の情報を入力します。

Ordered List Number 0

プラグインを登録したvCenterサービスのIPアドレスまたはFQDNサーバー名。

Ordered List Number 0

vCenter Administratorのユーザ名。

Ordered List Number 0

vCenter Administratorのパスワード。

4. [Unregister]をクリックします。

- ・ バージョン2.7～バージョン3.0（3.0を除く）：
 - ・ ブラウザでvCenter Managed Object Browser (MOB) インターフェイスを使用して、登録を手動で解除します。
 1. MOBのURL ([https://\[vcenter\]/mob](https://[vcenter]/mob)) を入力します。
 2. [Content] > [Extension Manager] > [UnregisterExtension]の順にクリックします。
 3. 「com.solidfire」と入力します。
 4. [Invoke Method]をクリックします。
 - ・ PowerCLIを使用して登録を解除します。

```
Connect-VIServer -Server $vcenter -User administrator@vsphere.local
-Password xxxxXXx -Force -ErrorAction Stop -SaveCredentials
$em = Get-View ExtensionManager
$em.ExtensionList | ft -property Key
$em.UnregisterExtension("com.solidfire")
$em.UpdateViewData()
$em.ExtensionList | ft -property Key
Disconnect-VIServer * -Confirm:$false
```

- バージョン2.6.1以前：
 1. ブラウザで、登録ユーティリティのURLを入力するか、プログラムディレクトリから探します。
 - `https://<FDVA or management node IP>:8443`
 - `/opt/solidfire/vcp/bin/vcp-reg.sh`
 2. [vCenter Plugin Register/Unregister]ウィンドウで、[Unregister]をクリックします。

関連タスク

[vCenter Plug-inの削除](#) (172ページ)

vCenter Plug-in 2.5以降では、vCenter Serverからファイルを手動で削除する必要があります。

vCenter Plug-inの削除

vCenter Plug-in 2.5以降では、vCenter Serverからファイルを手動で削除する必要があります。

開始する前に

- 既存のプラグインの登録を解除し、vCSAまたはvCenter ServerへのSSH、RDP、またはその他の適切な接続を確立しておきます。

タスク概要

次のプロセスを実行して、プラグインに関連付けられたすべてのファイルを削除する必要があります。

手順

- vCenter Serverを実行しているサーバに管理者としてログインし、コマンドプロンプトを開きます。

- vCenter Serverのサービスを停止します。

- Windows :

- (Flashクライアントの場合) 次のコマンドを入力します。

```
C:\Program Files\VMware\vCenter Server\vmmon>.\vmmon-cli --stop vsphere-client
```

- (HTML5クライアントの場合) 次のコマンドを入力します。

```
C:\Program Files\VMware\vCenter Server\vmmon>.\vmmon-cli --stop vsphere-client
C:\Program Files\VMware\vCenter Server\vmmon>.\vmmon-cli --stop vsphere-ui
```

- vCenter Server Appliance (vCSA) : 次のコマンドを使用します。

- (Flashクライアントの場合) 次のコマンドを入力します。

```
service-control --stop vsphere-client
```

- (HTML5クライアントの場合) 次のコマンドを入力します。

```
service-control --stop vsphere-client
service-control --stop vsphere-ui
```

- SolidFireのフォルダとファイルを次の場所から削除します。

- Windows : エクスプローラを使用して、C:\ProgramData\VMwareとC:\Program Files\VMwareで「SolidFire」を検索します。

注: ProgramDataフォルダは非表示になっています。このフォルダにアクセスするには、ファイルの完全パスを入力する必要があります。

- vCSA : 次のコマンドを使用します。

```
find / -name "*solidfire*" -exec rm -rf {} \;
```

- vCenter Serverのサービスを開始します。

- Windows :

- (Flashクライアントの場合) 次のコマンドを入力します。

```
C:\Program Files\VMware\vCenter Server\vmmon>.\vmmon-cli --start vsphere-client
```

- (HTML5クライアントの場合) 次のコマンドを入力します。

```
C:\Program Files\VMware\vCenter Server\vmmon>.\vmmon-cli --start vsphere-client  
C:\Program Files\VMware\vCenter Server\vmmon>.\vmmon-cli --start vsphere-ui
```

- vCSA : 次のコマンドを使用します。

- (Flashクライアントの場合) 次のコマンドを入力します。

```
service control --start vsphere-client
```

- (HTML5クライアントの場合) 次のコマンドを入力します。

```
service control --start vsphere-client  
service-control --start vsphere-ui
```

関連タスク

[vCenter Plug-inの登録解除](#) (170ページ)

ご使用のインストール環境に対応する手順を使用して、NetApp Element Plug-in for vCenter Serverの登録を解除できます。プラグインの登録解除は無効にした場合と同じ効果がありますが、関連するファイルやフォルダは削除されません。

トラブルシューティング

NetApp Element Plug-in for vCenter Serverで発生する代表的な問題とその解決方法を理解しておき必要があります。

プラグインの登録は成功するがWeb Clientにアイコンが表示されない

説明

登録に成功したと表示されますが、プラグインのアイコンがvSphere Web Clientに表示されません。

対処方法

- vSphere Web Clientからログアウトし、再度ログインします。必要に応じて、ブラウザを閉じて開き直します。
- ブラウザ キャッシュをクリアします。
- vCenterで、Windows管理ツールの[サービス]メニューからvSphere Web Clientサービスを再起動するか、vCenterをリブートします。
- 必要なデフォルトの管理者権限がすべてvCenter Administratorロールに関連付けられていることを確認します。
- プラグインのZIPファイルがvCenterにダウンロードされていることを確認します。

1. vCenterでvsphere_client_virgo.logを開きます。vCenterバージョン6.5および6.7のログ ファイルは次の場所にあります。

- Flashクライアントの場合 : /var/log/vmware/vsphere-client/logs/vsphere_client_virgo.log
- HTML5クライアントの場合 : /var/log/vmware/vsphere-ui/logs/vsphere_client_virgo.log

2. ZIPのダウンロードに失敗したというエラー メッセージが表示された場合は、ZIPをもう一度ダウンロードします。

注 : URLがアクセス不能または無効な場合は修正する必要があります。修正したURLでプラグインの登録を更新するか、プラグインの登録を解除して登録し直してください。allowHTTP設定を変えずにHTTP URLを指定した場合も、ZIPのダウンロードが失敗することがあります。

- ネットワークポートを確認します。vCenterから管理ノードに必要なポート経由で双方向にアクセスできることを確認します。
- vCenterのMOB拡張レコード (<https://<vccenterIP>/mob/?moid=ExtensionManager&doPath=extensionList%5b%22com%2esolidfire%22%5d%2eserver>) でプラグインのZIPのダウンロードURLを確認します。

1. このURLをブラウザに貼り付けます。

2. プラグインのZIPをダウンロードできるかどうかを確認します。

- プラグインのZIPをダウンロードできる場合は、次の手順に進みます。
- プラグインのZIPをダウンロードできない場合は、vCenter Serverと管理ノード間のネットワークに問題がないか確認してください。

3. プラグインをダウンロードできない場合は、MOBレコード内のserverThumbprintを、ブラウザに表示されているZIP URLの証明書SHA-1と比較します。

1. MOBの登録レコードに含まれているURLまたはSHA-1が正しくない場合や古い場合は、プラグインの登録を解除して再登録します。
2. 問題が解決せず、ZIPに到達できない場合は、ZIP URLを調べて、使用されている管理ノードアドレスに問題がないか確認します。場合によっては、ZIPファイルをダウンロードできるように、プラグインの登録ユーティリティを使用してURLをカスタマイズする必要があります。

関連タスク

[社内（ダークサイト）のHTTPサーバ用のvCenterプロパティの変更](#) (22ページ)

vCenter Plug-inの登録時に社内（ダークサイト）のHTTPサーバのURLをカスタマイズする場合は、vSphere Web Clientのプロパティ ファイルを変更する必要があります。

関連資料

[ネットワークポート要件](#) (9ページ)

システムをリモートから管理し、クライアントがデータセンターの外部からリソースに接続できるようにするために、データセンターのエッジ ファイアウォールで次のTCPポートを許可する必要があります。システムの使用方法によっては、一部のポートは不要な場合もあります。

登録画面からプラグインを登録中にエラーが発生する

説明

登録ユーティリティを使用してプラグインをvCenter Serverに登録する際にエラーが発生します。キーがcom.solidfireのプラグインがすでにインストールされています。

対処方法

登録ユーティリティで、[Register Plug-in]ではなく[Update Plug-in]を使用します。

登録画面からプラグインを更新中にエラーが発生する

説明

登録ユーティリティを使用してプラグインをvCenter Serverに対して更新する際にエラーが発生します。更新対象となるキーがcom.solidfireのプラグインがインストールされていません。

対処方法

登録ユーティリティで、[Update Plug-in]ではなく[Register Plug-in]を使用します。

ネットアップの拡張機能をアップグレードできないというエラー メッセージが表示される

メッセージ

```
org.springframework.transaction.CannotCreateTransactionException:  
Could not open JPA EntityManager for transaction; nested exception  
is javax.persistence.PersistenceException:  
org.hibernate.exception.GenericJDBCException: Could not open  
connection.
```

説明

Windows vCenter Serverをバージョン6.0から6.5にアップグレードしているときに、ネットアップの拡張機能をアップグレードできない、または新しいvCenter Serverでは動作しない可能性があるという警告が表示されます。アップグレードの完了後

にvSphere Web Clientにログインし、vCenter Plug-inの拡張ポイントを選択すると、エラーが発生します。このエラーは、ランタイムデータベースを格納するディレクトリがバージョン6.0から6.5に変更されたために発生します。vCenter Plug-inが実行時に必要なファイルを作成できません。

対処方法

1. プラグインの登録を解除します。
2. プラグインのファイルを削除します。
3. vCenterをリブートします。
4. プラグインを登録します。
5. vSphere Web Clientにログインします。

関連タスク

[vCenter Plug-inの登録解除](#) (170ページ)

ご使用のインストール環境に対応する手順を使用して、NetApp Element Plug-in for vCenter Serverの登録を解除できます。プラグインの登録解除は無効にした場合と同じ効果がありますが、関連するファイルやフォルダは削除されません。

[vCenter Plug-inの削除](#) (172ページ)

vCenter Plug-in 2.5以降では、vCenter Serverからファイルを手動で削除する必要があります。

[vCenterへのvCenter Plug-inの登録](#) (19ページ)

vCenter Plug-inパッケージをvSphere Web Clientに導入するには、vCenter Serverでパッケージを拡張機能として登録します。登録が完了すると、vSphere環境に接続されたすべてのvSphere Web Clientでこのプラグインを利用できるようになります。

プラグインの削除は完了するがアイコンが残る

説明

vCenter Plug-inパッケージファイルを削除したあとも、vSphere Web Clientにプラグインのアイコンが表示されます。

対処方法

vSphere Web Clientからログアウトし、再度ログインします。必要に応じて、ブラウザを閉じて開き直します。vSphere Web Clientからログアウトしても問題が解決しない場合は、必要に応じてvCenter Server Webサービスをリブートします。また、他のユーザが既存のセッションを使用している場合もあります。すべてのユーザセッションを終了する必要があります。

管理者パスワードの変更後にプラグインを登録解除または削除できない

説明

プラグインの登録時に使用したvCenterの管理者パスワードを変更すると、vCenter Plug-inの登録解除や削除ができなくなります。

対処方法

バージョン2.6では、vCenter Plug-inの[Register/Unregister]ページに移動します。Updateボタンをクリックして、vCenterのIPアドレス、ユーザID、パスワードを変更します。

プラグイン2.7以降mNode Settingsの場合は、プラグインのvCenter管理者パスワードを更新します。

Plug-in 4.4以降QoSSIOC Settingsの場合は、プラグインのvCenter管理者パスワードを更新します。

プラグインの管理タスクが失敗するか、またはESXiホストからボリュームにアクセスできない

説明

データストアの作成、クローニング、共有のタスクが失敗する、あるいはESXiホストからボリュームにアクセスできません。

対処方法

- データストア処理用のESXiホストにソフトウェアiSCSI HBAがあつて有効になっていることを確認します。
- ボリュームが削除されていないか、または間違ったボリューム アクセス グループに割り当てられていないかを確認します。
- ボリューム アクセス グループのホストIQNが正しいことを確認します。
- 関連付けられているアカウントのCHAP設定が正しいことを確認します。
- ボリュームステータスがactiveであること、ボリューム アクセスがreadWriteであること、および512eがtrueに設定されていることを確認します。

Firefox 59.0.2ブラウザでvCenter Plug-inを使用するとエラーが発生する

メッセージ

```
Name:HttpErrorResponse Raw Message:Http failure response for
https://vc6/ui/solidfire-war-4.2.0-SNAPSHOT/rest/vsphere//servers:
500 Internal Server Error Return Message:Server error. Please try
again or contact NetApp support
```

説明

この問題は、Firefoxを使用するvSphere HTML5 Webクライアントで発生します。
vSphere Flashクライアントに影響はありません。

対処方法

ブラウザのURLにFQDNを使用します。VMwareでは、IP、短い名前、およびFQDNの完全な前方および逆方向の解決が必要です。

データストアの削除処理が失敗する

説明

データストアの削除処理が失敗します。

対処方法

データストアからすべてのVMが削除されていることを確認します。データストアを削除する前に、データストアからVMを削除する必要があります。

ペアリング キーを使用してクラスタ ペアを接続できない

説明

ペアリング キーを使用してクラスタをペアリング中に接続エラーが発生します。
[Create Cluster Pairing]ダイアログ ボックスには、ホストへのルートがないことを示すエラー メッセージが表示されます。

対処方法

ローカル クラスタに作成された未設定のクラスタ ペアを手動で削除し、もう一度クラスタペアリングを実行します。

QoSIOCステータスに関するエラー メッセージ

説明

プラグインのQoSIOCステータスに警告アイコンとエラー メッセージが表示されます。

対処方法

- Unable to reach IP address

IPアドレスが無効であるか、応答がありません。アドレスが正しいこと、および管理ノードがオンラインで使用可能な状態になっていることを確認します。

- Unable to communicate

IPアドレスに到達できていますが、アドレスの呼び出しに失敗しています。指定されたアドレスでQoSIOCサービスが実行されていないか、ファイアウォールでトラフィックがブロックされている可能性があります。

- Unable to connect to the SIOC service

管理ノードの/var/log (古い管理ノードの場合は/var/log/solidfire/) にあるsioc.logを開き、SIOCサービスが起動していることを確認します。SIOCサービスの起動には50秒以上かかることがあります。サービスが起動しなかった場合は、もう一度実行します。SIOCサービスの現在のステータスを確認するには、管理ノードの/var/log/にあるsiocStatus.logを開きます。

関連タスク

[QoSIOCの設定](#) (40ページ)

NetApp Element ConfigurationネットアップElementを使用して、Element Management Node (MNode) の QoSIOC 設定を構成できます。QoSIOCサービスを有効にして使用するには、この設定が必要です。

関連資料

[ネットワークポート要件](#) (9ページ)

システムをリモートから管理し、クライアントがデータセンターの外部からリソースに接続できるようにするために、データセンターのエッジ ファイアウォールで次のTCPポートを許可する必要があります。システムの使用方法によっては、一部のポートは不要な場合もあります。

QoSIOCサービスが使用可能と表示されるが使用できない

説明

QoSIOC サービス設定はと表示UPされますが、 QoSIOC は使用できません。

対処方法

QoSIOC SettingsネットアップElement Configuration 拡張ポイントのタブで、 Refresh ボタンをクリックします。必要に応じて、IPアドレスまたはユーザ認証情報を更新します。

データストアでQoSIOCが有効になっているが使用できない

説明

データストアでQoSIOCが有効になっていますが、使用できません。

対処方法

データストアでVMware SIOCが有効になっていることを確認します。

1. 管理ノードの/var/logにあるsioc.logを開きます。
2. 次のテキストを検索します。

- SIOC is not enabled**
3. vSphere Web ClientまたはCLIを使用して、データストアでSIOCを有効にします。

製品マニュアルとその他の情報の参照先

NetApp HCIとSolidFireオールフラッシュストレージについてより詳しい使用および管理办法を知りたい場合は、それぞれの製品のドキュメントセンターとリソースページにある情報を参照してください。

ドキュメントセンターでは、ハードウェアの設置とメンテナンスに関する情報、利用可能なその他のコンテンツ、既知の問題と解決済みの問題へのリンク、および最新のリリースノートも参照できます。リソースページには、データシート、テクニカルレポート、ホワイトペーパー、およびビデオへのリンクが掲載されています。

- [*NetApp HCI*のマニュアル](#)
- [*NetApp HCI*ドキュメントセンター](#)
- [*NetApp HCI*のリソースページ](#)
- [*SolidFire* および *Element 12.0* ドキュメンテーションセンター](#)
- [*SolidFire* および *Element 11.8* ドキュメンテーションセンター](#)
- [*SolidFire / Element 11.7* ドキュメントセンター](#)
- [*SolidFire / Element 11.5* ドキュメントセンター](#)
- [*SolidFire / Element 11.3* ドキュメントセンター](#)
- [*SolidFire*のリソースページ](#)

ネットアップ サポートへの問い合わせ

ネットアップ製品に関するサポートのご依頼、ご意見やご要望については、ネットアップ
サポートまでお問い合わせください。

- Web : mysupport.netapp.com

著作権に関する情報

Copyright © 2020 NetApp, Inc. All rights reserved. Printed in the U.S.A.

このドキュメントは著作権によって保護されています。著作権所有者の書面による事前承諾がある場合を除き、画像媒体、電子媒体、および写真複写、記録媒体、テープ媒体、電子検索システムへの組み込みを含む機械媒体など、いかなる形式および方法による複製も禁止します。

ネットアップの著作物から派生したソフトウェアは、次に示す使用許諾条項および免責条項の対象となります。

このソフトウェアは、ネットアップによって「現状のまま」提供されています。ネットアップは明示的な保証、または商品性および特定目的に対する適合性の暗示的保証を含み、かつこれに限定されないかかる暗示的な保証も行いません。ネットアップは、代替品または代替サービスの調達、使用不能、データ損失、利益損失、業務中断を含み、かつこれに限定されない、このソフトウェアの使用により生じたすべての直接的損害、間接的損害、偶発的損害、特別損害、懲罰的損害、必然的損害の発生に対して、損失の発生の可能性が通知されていたとしても、その発生理由、根拠とする責任論、契約の有無、厳格責任、不法行為（過失またはそうでない場合を含む）にかかわらず、一切の責任を負いません。

ネットアップは、ここに記載されているすべての製品に対する変更を隨時、予告なく行う権利を保有します。ネットアップによる明示的な書面による合意がある場合を除き、ここに記載されている製品の使用により生じる責任および義務に対して、ネットアップは責任を負いません。この製品の使用または購入は、ネットアップの特許権、商標権、または他の知的所有権に基づくライセンスの供与とはみなされません。

このマニュアルに記載されている製品は、1つ以上の米国特許、その他の国の特許、および出願中の特許によって保護されている場合があります。

ここに記載されている「データ」は商品目（FAR 2.101で定義）に該当し、その所有権はネットアップに帰属します。米国政府は、データが提供される際の米国政府との契約に関連し、かつ当該契約が適用される範囲においてのみ「データ」を使用するための、非独占的、譲渡不可、サブライセンス不可、世界共通の限定的な取り消し不可のライセンスを保有します。ここに記載されている場合を除き、書面によるネットアップの事前の許可なく、「データ」を使用、開示、複製、変更、実行、または表示することは禁止されています。米国国防総省のライセンス権限は、DFARS 252.227-7015 (b) 項に規定されている権限に制限されます。

商標に関する情報

NetApp、NetAppのロゴ、ネットアップの商標一覧のページに記載されているマークは、NetApp, Inc.の商標です。他の会社名と製品名は、それを所有する各社の商標である場合があります。

<http://www.netapp.com/jp/legal/netapptmlist.aspx>

マニュアルの更新について

弊社では、マニュアルの品質を向上していくため、皆様からのフィードバックをお寄せいただく専用のEメールアドレスを用意しています。また、GA/FCS版の製品マニュアルの初回リリース時や既存マニュアルへの重要な変更があった場合にご案内させていただくTwitterアカウントもあります。

本マニュアルの改善についてご提案がある場合は、次のアドレスまでコメントをEメールでお送りください。

ng-gpso-jp-documents@netapp.com

その際、担当部署で適切に対応させていただくため、製品名、バージョン、オペレーティングシステム、弊社営業担当者または代理店の情報を必ず入れてください。

GA/FCS版の製品マニュアルの初回リリース時や既存マニュアルへの重要な変更があった場合のご案内を希望される場合は、Twitterアカウント@NetAppDocをフォローしてください。